

334-4

長野縣小諸高等小學校編纂

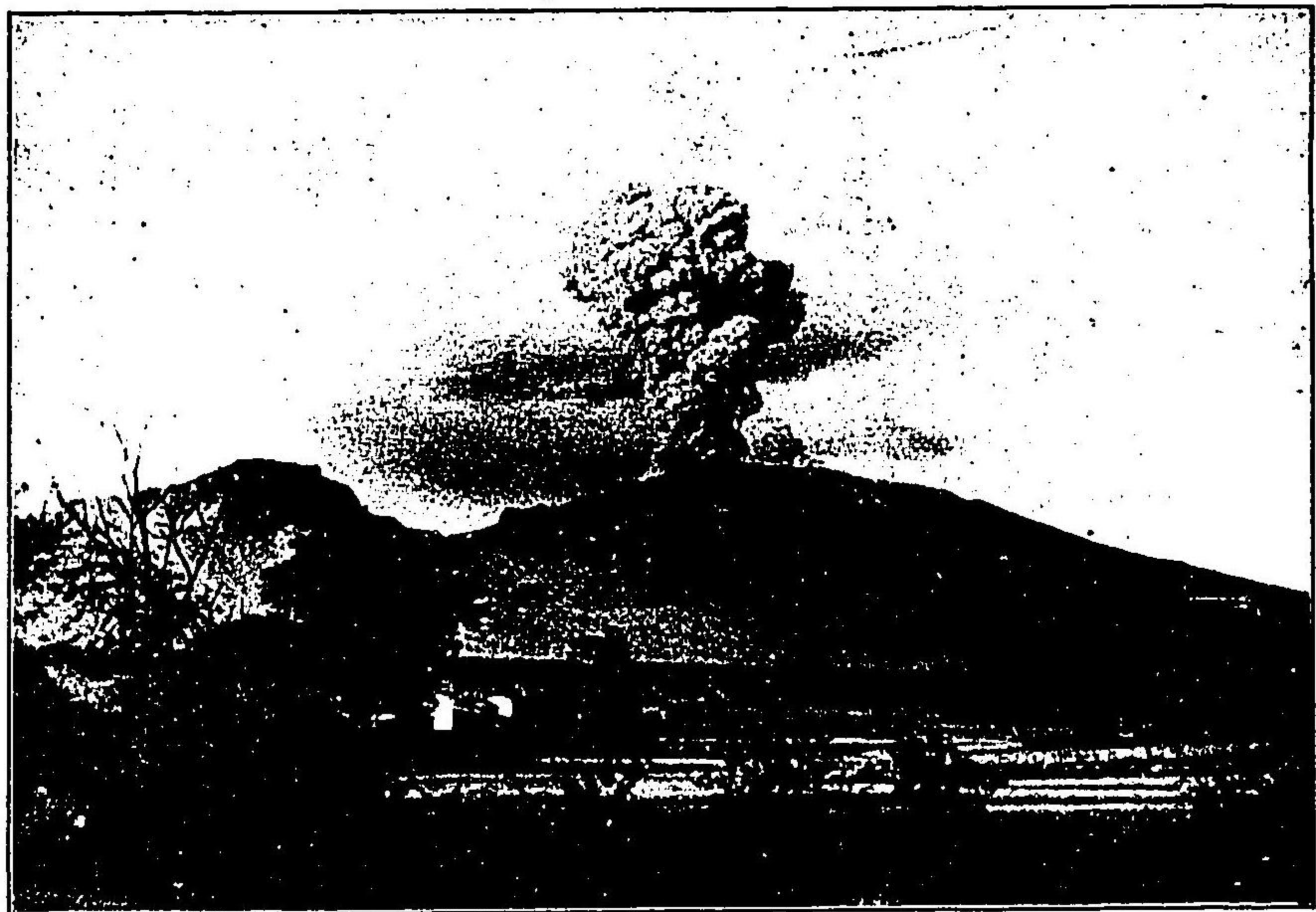
淺間山 全

發兌元

東京

田中書籍出版部

(小山氏原版)

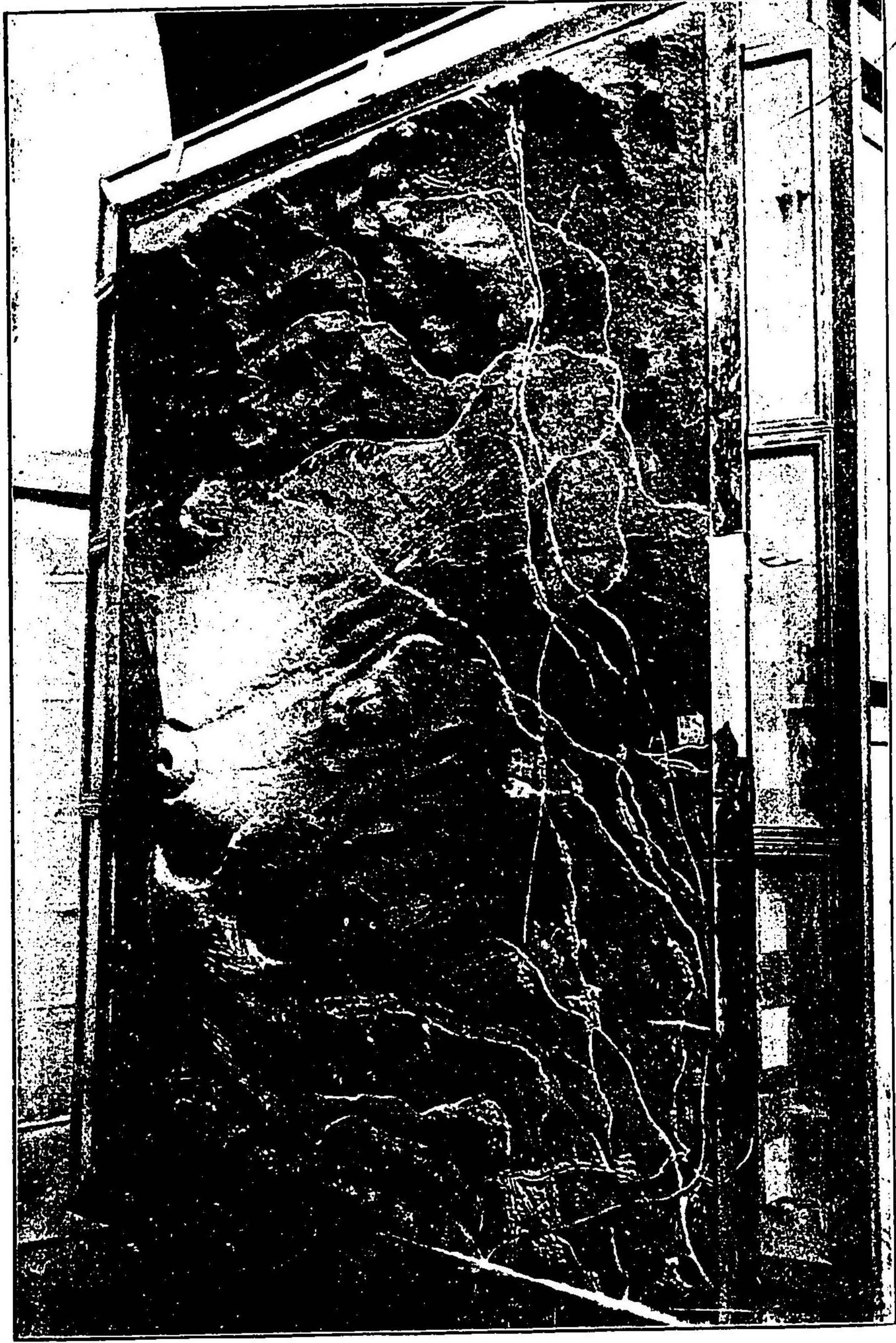


大井村ヨリ見た浅間山

(小山常治氏原版)

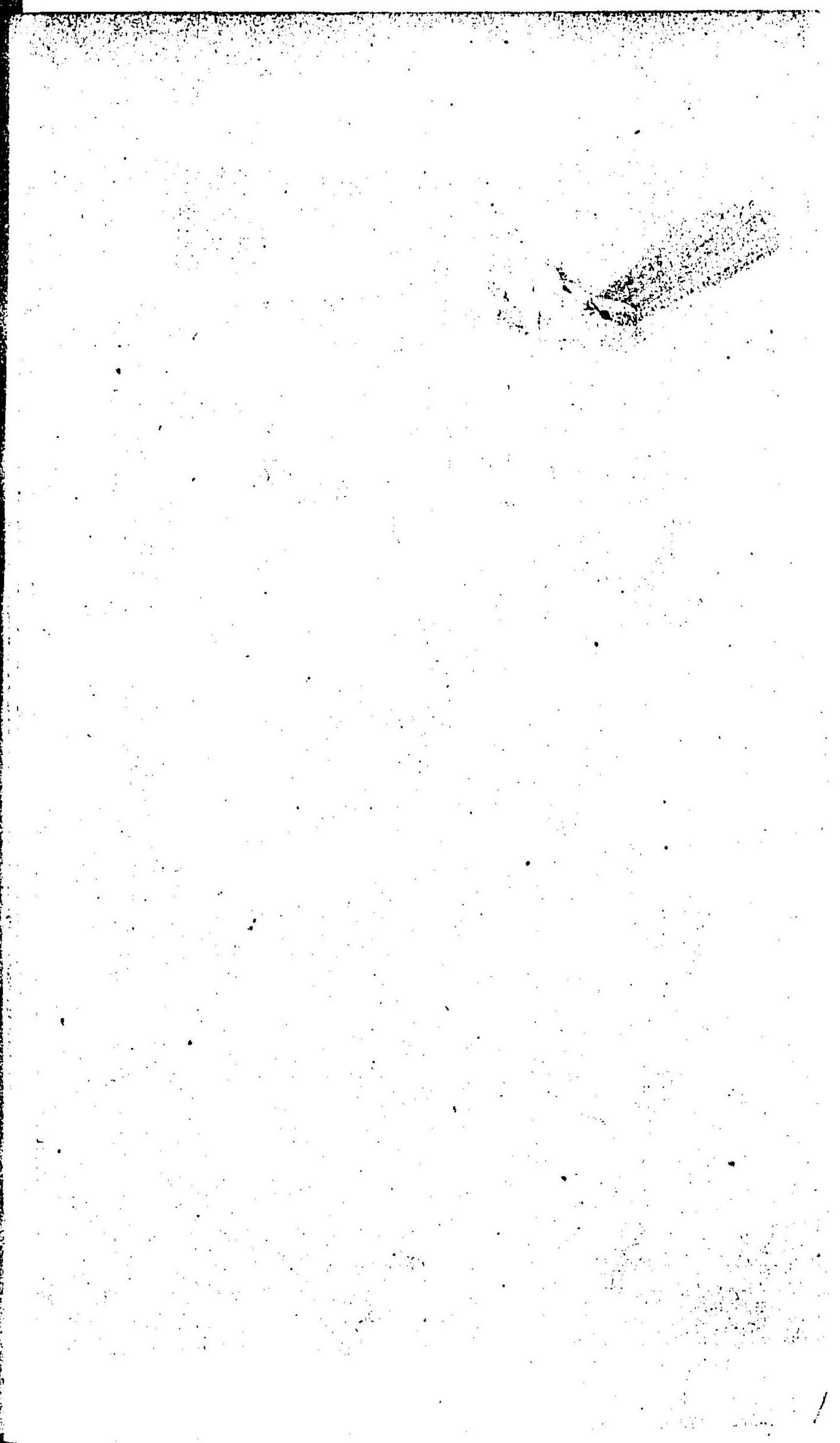
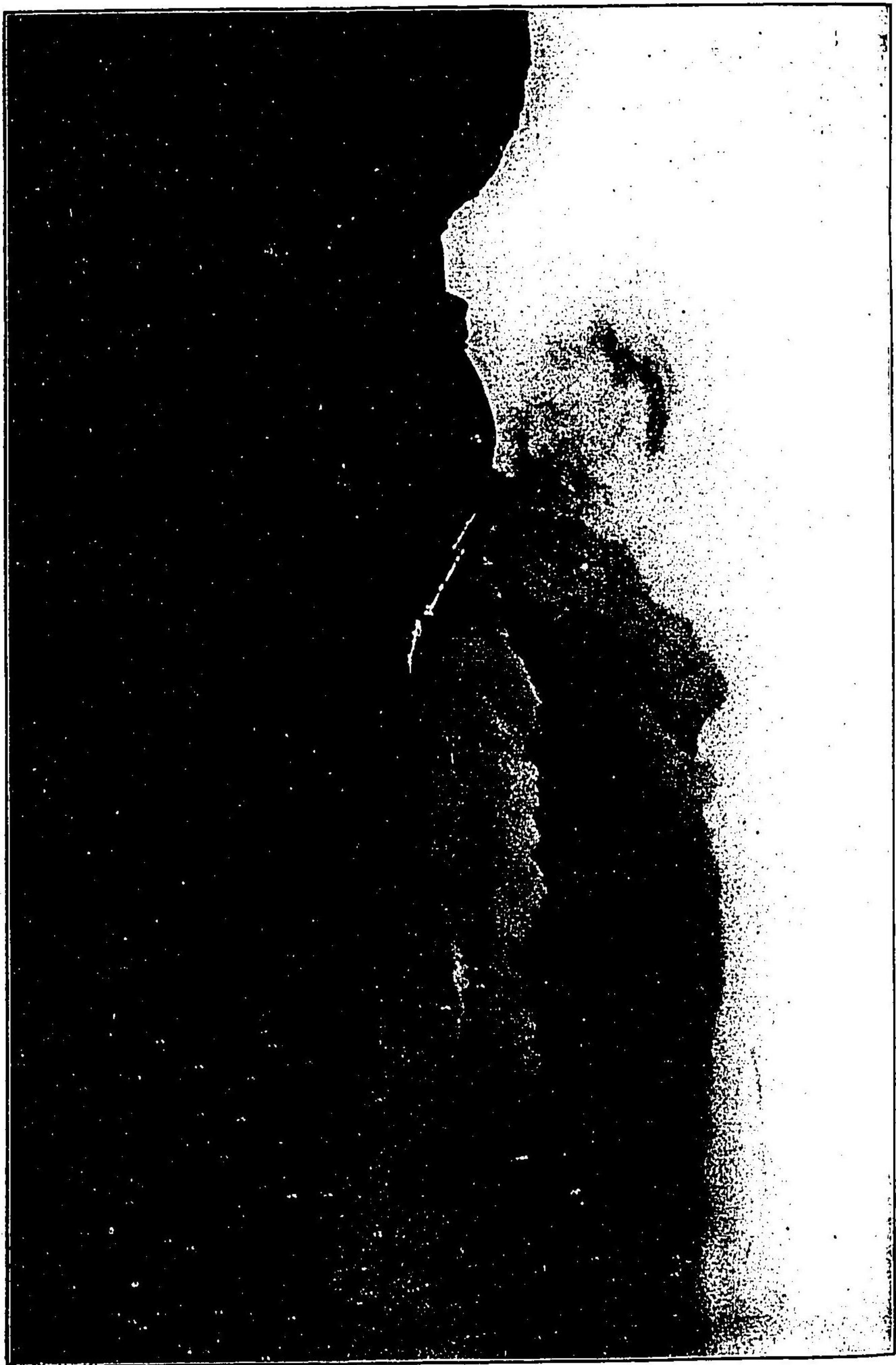


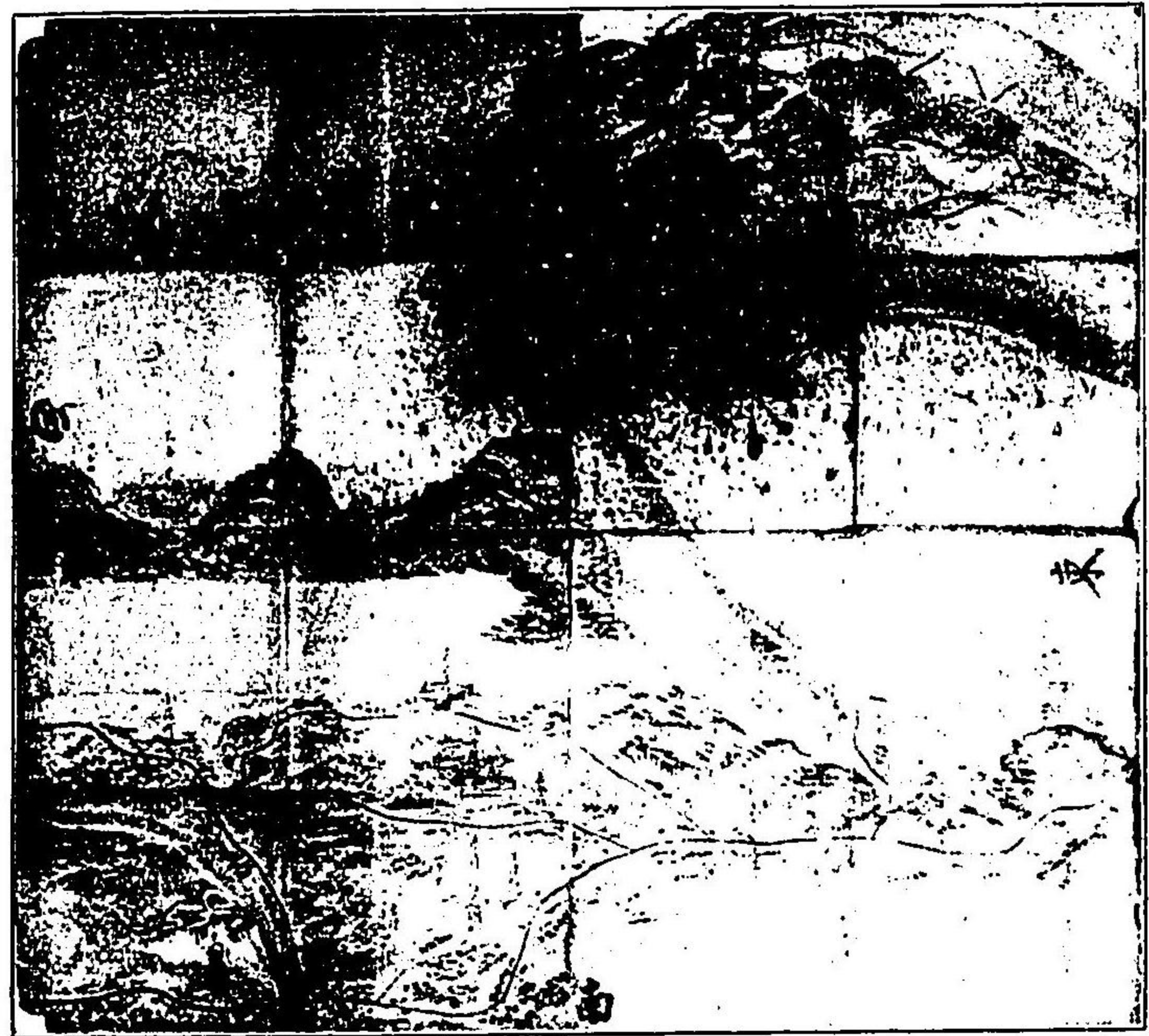
山の曙光



藏所會究研) 型 模 山 間 浸

(影攝夜日五月三十年二十四活明) 圖之烟噴山間淺





明天年間當時の實筆淺間焼の古畫



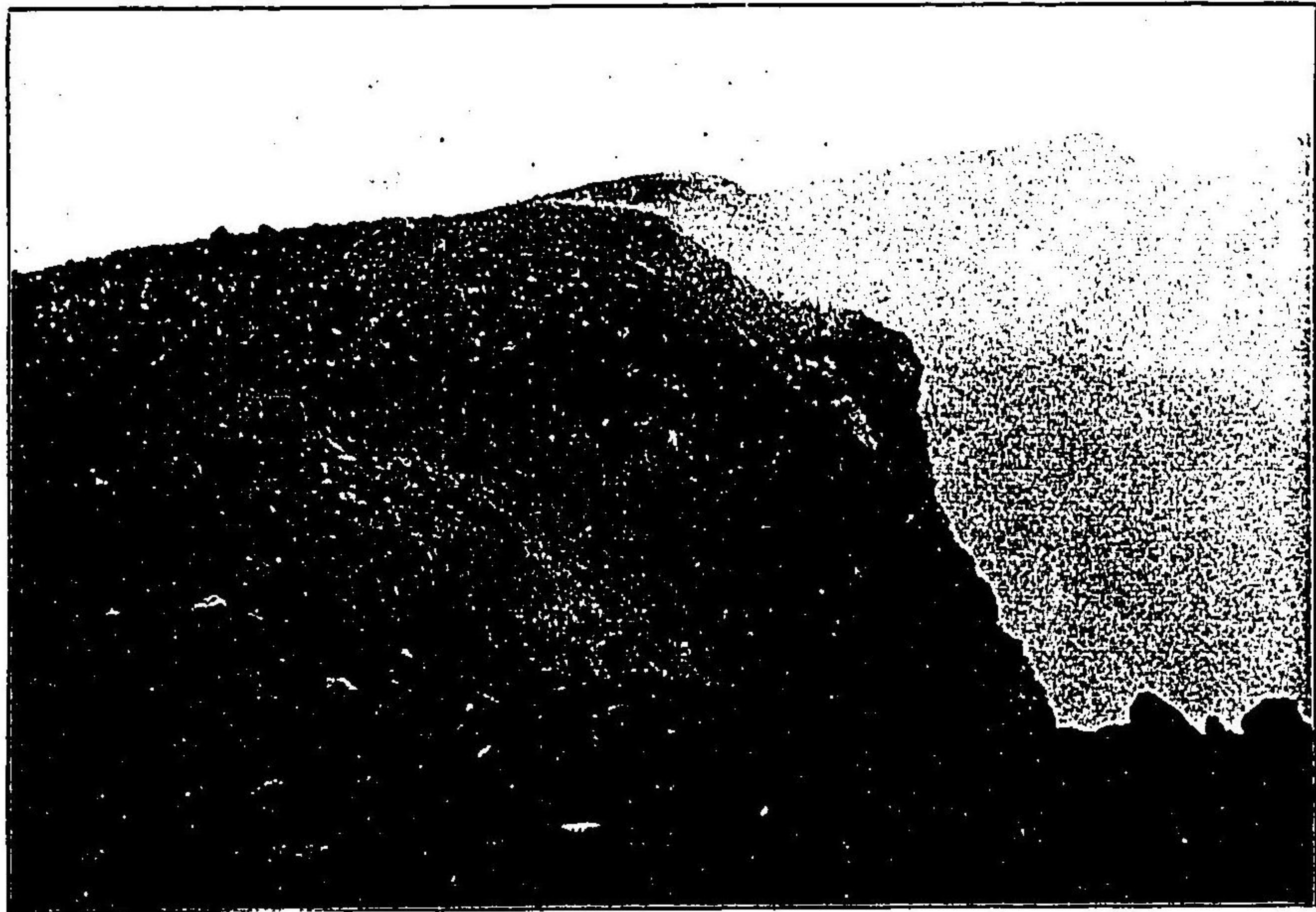
(一 其)



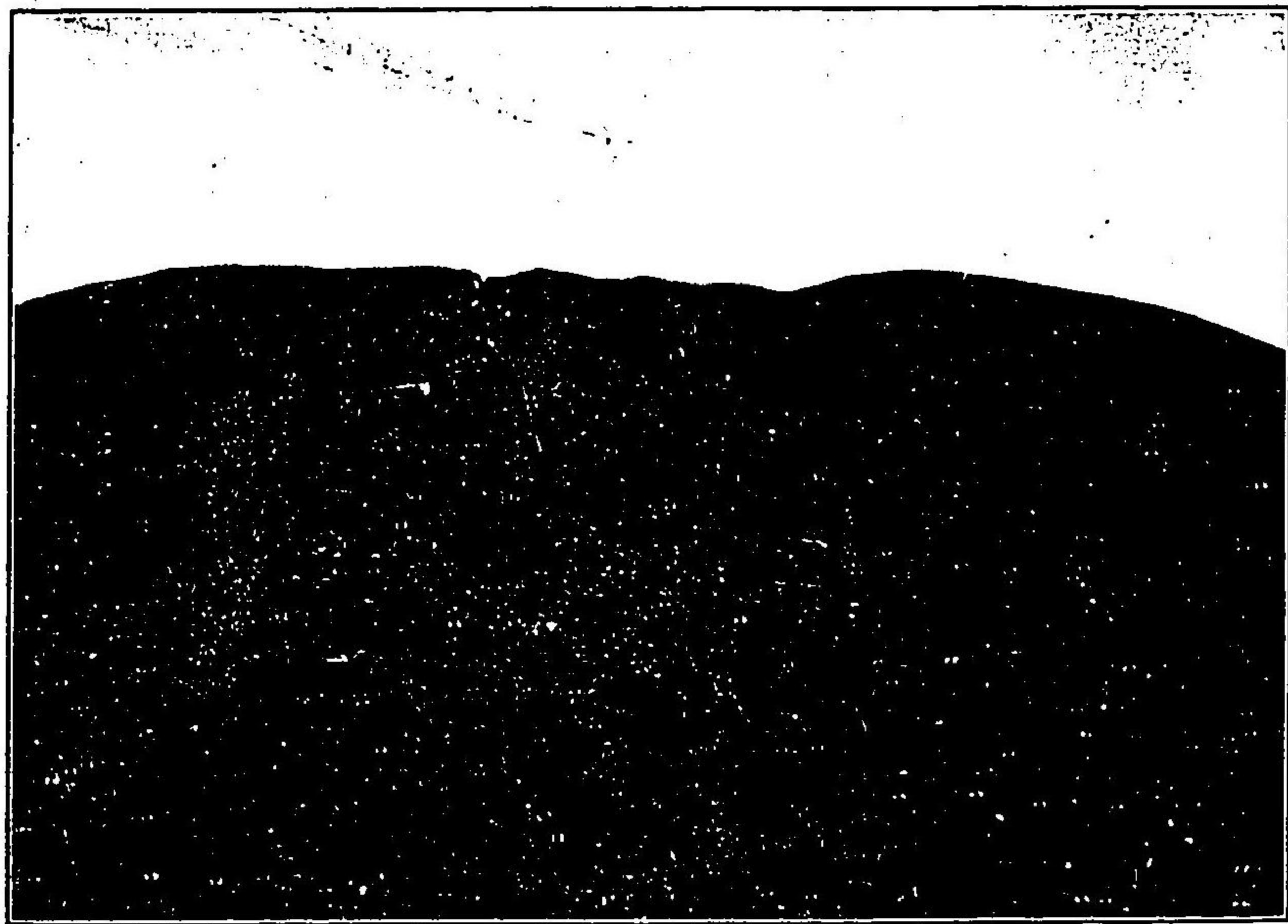
(二 其)



(三 其)



噴火口壁ノ圖



火口丘の絶裂 (小常治氏寄贈)



(魚津興一邸寄信)

浅間山噴火口内(四方ヨリ見タル景)

序

『淺間山』成る、その裾に住んで、朝夕仰いで山容に親しみ、感化を受けてゐる人々の手に依つて、有史時代以前からの名山は、初めて略ぼ、その完體を、出現させるのに至つたのである。

想ふに、日本が、山岳に親しむ國民であることは、アルプス山や、ヒマラヤ山が、未だ暗黒の地圖であつた時代に、既に多くの高山が登られ、比較的精密なる記述が作られてゐたのでも知れる、さうして山岳對人間の關係を、親密にさせた理由は、私の考では次の如くである。

日本にはアルプスや、ヒマラヤに見るここの出來ない火山が、地

皮の脆弱なる部分、即ち海岸に近くて、早くから街道となるべき運命を荷つてゐる地點に噴起した、随つて往來の旅客に、その巨人の頭なり、肩なり、或は脚下から全體を標的として、仰がれ易い位置に立つた、之を本州中部に例へて言へば、太平洋岸の富士火山、日本海岸の立山火山などは、それである、只だ淺間山は、本州中部の中央に占座してゐるから、此例を以て律することは出来ないが、上州の平原から初めて、峠を登つて高原に立つたとき、山岳國の第一山として、山岳宗門の結縁を授ける導師の如くに、立つてゐるのは淺間山である、私が山岳を好むに至つたのも、淺間山から初まつたので、その當時の印象は、今に忘れられない、海岸でこそ無いが、人の視目を

聳かす點に於ての效果は、同一である、同じ信州の火山でも、飛驒境の御岳、乗鞍岳、燒岳(硫黄岳)のやうに、山又山の奥に立つてゐて、近古、又は今代になつて、漸く其存在を知られたものご違つて、早くから『淺間の岳に立つ烟』を以て、知られた所以である。

併しながら、往古、自然に對する智識、未だ開かれない時分は、この方面に感覺の鋭敏で無かつた人間の頭を、殊更に振り向けさせるだけの牽引力が、富士や淺間にあつた、則ち熾烈なる噴火作用が、それで、この現象は、人間の感情を高く翔けさせたに違ひない、富士山と淺間山とは、太古から人間の感情を燈す名山であつた。

尙ほ加ふるに、其形容を火山獨得の齊整的にして、單純でありな

がらも、纏まりのついた型を作つて、美意識を喚び起すに至つた。淺間山は今猶ほ活火の猛烈なため、富士のやうに、端立なる圓錐形を作らないが、山岳の表現に於て、富士山をクラシカルの山とすれば、これは奔放自由のロマンチックの山である。そこにこの山の生命が宿つてゐる。

最後に山岳と、四周の干係から言へば、ヒマラヤ山の如きは、海拔三万尺に垂んとする高さがあるにしても、その最高峰エヴェレストを見やうとする人は、比較的最も山に近い人間の群落地點からするも、僅に朝の透明な空氣を通じて、山容の一閃を覗ふことを、僥倖し得るに過ぎない、といふことである。深秘はこの方に在るであ

らうが、このやうな山岳は、別天、混沌世界の物になつて、殆んど人間の交渉を斷絶する。富士や淺間が、驛路に俯瞰して立つてゐるのに比べて、如何に我等の山に、人情のゆかしい味があるかが知れる。「げさも煙が三筋立つ」といふやうな、沁み々々親しい氣味は、高原の驛路と調和するのである。

淺間山が山岳國に占有してゐる位置と、その人類に交渉をした使命とは、右の如く重要なものであつた。私は信ずる、猶詳しくは、その温和な方面にあれ、畏怖すべき方面にあれ、この書に現はれてゐることを、見出されるであらう。

國史あれば、郷土史がある。信州小諸の郷土から、淺間山といふ自

然の王者を傳へた事業を、私は讚美する、殊にそれが育英の事業に携はる人々の手に依つて、成されたことに對して、劫初の山岳も、永久の人類との深い默契を沈思せずにはゐられない、併しながら遠いことは扱措いて、私の現在の希望は、この書の事業家が、墳墓としての、過古の淺間山を傳ふるに止まるならば止む、天造の大紀念物として、今猶自然が、その創造力を以て、意匠を施しつゝある大美術品として、之を尊重しやうといふのにあるならば、更に我が淺間山を護るの途を講ぜられて、今の富士山のやうに、人間のさかしらから、その皮膚に無漸なる傷を被らせないやうに、したいものである、と同時に、この書が先容を作して、信州の各地、又は他の山岳國の各

地で、續々こゝその自然の王者を傳ふるの舉に、出でられ、日本山岳の地詩又は地史を、各自の山に親灸する人々の努力を待つて、完成せられたいことである。

明治四十三年四月一日

小 鳥 水

序

夫れ山河の跋涉は、能く心志を高尙にし、氣宇を濶大にし、豪健雄渾の氣象を養ふに足れり。余性山野を好み常に高きに登りて浩然の氣を養ふ。若し夫れ身を高山の淨境に置き、遙に塵界を離れて天地の大に逍遙せんか、心身自ら大我の域に達し、殆んど天地と同化し萬物と一体となれるかの感なき能はず。其快湧然として長く忘るべからず。蓋しこれ自然と人心との相交渉する所以なるべくして、余が好んで友を山野に求むる所以也。

我信州は名山高岳固より多く其尤なるものを淺間山とす。嗚呼此山千古易らず、聳えて高く以て我信州の守たり。余日夕其山

容を仰ぐに山勢奇ならずと雖も雄姿堂々として巨人の趣あり、加ふるに白煙常へに絶えざるのみか、時に激して萬丈の黒煙天を衝き轟々たる響坤軸を撼じ、其壯觀名狀すべからざるものあり。思ふに無言の靈感人を襲ふて已まざるものあらむ。況んや、身親しく登臨する者に於てをや。宜なる哉、古來土俗淺間登山の風あり。陰曆五月八日を以て御山開きと稱し、九月中旬に至るまで登山者の陸續たるあり。

昨今我國登山風をなし、名山高嶽の登攀年と共に加り來り、就中淺間登山者の多き富岳と並び稱せらるゝに至れり。従て學術上の山岳研究をなすもの亦尠からず、此等の諸子大率小諸を訪ふて研

究の便を求む、余爰に見る所あり、曩に淺間山に關する資料を蒐集し、一は以て舊記の散佚を防ぎ、一は以て山岳研究者の便に供し、又汎く淺間山を世に紹介せんとし淺間山研究會を組織せり。今や研究會の事業略其功を竣へたるを以て茲に此書の上梓を見るに至れり、然れども記事未だ杜撰なきを保すべからず、考証未だ十分なりといふべからず。文辭亦拙劣なるを免るべからざるを恐る。願くは自今益々研究を重ね、或は大方の指導を請ふて徐ろに修正を加へ、以て完璧となすの日あらん事を。

明治四十三年六月

淺間山研究會々長 佐藤寅太郎

凡例

- 一、本書は長野縣北佐久郡小諸尋常高等小學校職員一同によりて組織せられたる、淺間山研究會の編纂する所なり。同研究會の經過一般は載せて別項にあり。
- 一、本書は學者にもあらず、詩人にもあらず、文人にもあざざる吾人の編纂にかかるものなれば、行文に詩致などあり得べくもあらず、研究に新發見又は名論卓説などあり得べくもあらず、たゞ此書一たび世に出で、人文科學發展の上に於て、何等かの提供と何等かの貢獻とを爲し得ば吾人の望は以て足れりとせんのみ。
- 一、淺間山研究會設立以來其一半は之を資料の蒐集及び淺間山の實測に致し、其一半は本書の編輯に従事したり、然れども参考書の如きは實に吾人の手に入りたるものみに限らざるべく、實踏査の如きも猶幾多の余地あるべければ、是等は漸を遂ふて其歩武を進め以て此研究の大成を期す。
- 一、参考書籍の數ある中に特に本書中の光彩たるべき天明噴上の記録の如きは、殆んど完全なる資料を提供せられたりと言ひ得べきか、是年未だ百二十年を隔てたるに過

ぎざれば其蒐集比較的容易なりしによりしなるべし又繪圖の如きも記録と相俟ちて多大の資料を提供せられたり特に中津村丸山仙三君所藏のものゝ如きは珍とするに足るべきものなるを以て特に口繪に掲げおきたり。

一、本書の編纂に當て參考に供したる主要なる書目は左の如し。

- 天明雜變記 三卷 佐藤金右衛門編 淺間燒大變記 一卷 (著者不明)
- 天明淺間山變異記 一卷 (著者不明) 信濃國淺間嶽記 一卷 時々庵著
- 淺間大燒並無二物語 一卷 (著者不明) 天明信濃風土記 一卷 貝川子著
- 國境論覽書 一葉 眞樂寺起立書 繪本會我物語 卷の八 日本災異記 小果島比編
- 大淺間日記 一卷 山田辯道著 今を昔の物語 一卷 (著者不明)
- 北上州押出圖幅 信上變略記 一卷 (著者不明) 天明三年より四年迄の記録 朝熊神社考 二卷 山田辯道著
- 一卷 柯則編
- 古史傳 一卷 平田篤胤著 東鑑 一卷 地名辭書 三の卷 吉田東伍著
- 山岳誌 一卷 高頭式著 日本山水論 一卷 小島鳥水著
- 日本風景論 一卷 志賀矧川著 大日本地誌 卷三 山崎直方著 佐藤傳藏編

内外地誌日本 一卷 野口保興編 信濃地名考 一卷 吉澤好兼著

信濃山林誌 一卷 信濃山林會編 不二山 一卷 小島鳥水著

普通植物 一卷 松村任三著 日本蝶類圖說 一卷 宮島幹之助著

藝氏地文學 一卷 文部省藏版 日本地文學 一卷 矢津昌永著

地文學講義 一卷 石川成章編 地質學 一卷 佐藤傳藏編

上田圖幅 及同說明書 地質局版 雲表 一卷 小島鳥水著

山水無盡藏 一卷 小島鳥水著 地理學小品 一卷 矢津昌永著

地質學雜誌 植物雜誌 昆虫世界 理學界 東洋學藝雜誌 小諸温古雜記

一、本書の編著に當り或は所藏の書籍を貸與せられ或は其他の助力を賜りたる諸君の芳名を列擧すれば左の如し茲に謹んで感謝の意を表す。(但し順序不同)

佐々木鉄之助君 星野詰之助君 依田 豊君 小山 立三君

丸山 仙三君 石井 民司君 太田銈次郎君 故色部 城南君

小山 常治君 牧野 成功君 神津 猛君 小山志免之助君

小山久左衛門君 中山禎次郎君 小山傳太郎君 丸山 高君

凡例

四

山本 清明君 佐藤 熊六君 小林 連一君 萩原 茂十郎君
一、又特に本著の爲めに序文の筆をそめられたる、小島烏水君、挿畫を揮毫せられたる茨木猪之吉君に向て、謹みて感謝の意を表す。
一、終に望み、前に本書編纂部に入りて盡力せられたる諸君の勞を謝す。

淺間山研究会内

淺間山編纂部

明治四十三年六月

淺間山研究会經過之大要

淺間山研究会は明治四十年六月十八日を以て創立せられたるものにして時の校長佐藤寅太郎會長となり、田中直次之か副となり、其他の職員を、(一)淺間山摸型の造作、(二)動物鑛物の採集、(三)淺間山誌の編纂等の三部に分ち、各部研究を進むる事となしたり。之に關せる前後の各部委員名左の如し。

摸型製作部——長尾亥三太 太田銈次郎 松本深 笠間環 赤羽こう 白田政直

大池ひさ 田中いう 甘利邦雄 星野保

動植鑛部——常田儀助 萩原喜太夫 小山甲子生 藤原てい 飯田かつ

角田はな 塩川胸勝

山誌編纂部——馬場治三郎 瀧澤賢 林勇 半田弘 篠澤幸太郎 土屋喜太夫

石黒友輔 依田源七 小平政藏

會計は時の學務委員伊藤龍雄之を擔當せり。

摸型第一期作業の着手は四十年七月六日にして、大さ横五尺、縦七尺の粘土製假摸型な

淺間山研究会經過之大要

一

り。九月二日に至り山姿整然たる假模型を見次て本模型臺の製造に時を費したりしが、九月廿二日より愈本模型の作業にかゝり以來八十一日間、長尾其他各委員丹精を盡し來り茲に、十二月十一日を以て塗上を終りたり、翌四十一年五月廿五日よりは山麓一帶の調査に費ししが、時恰も暑中休暇に際し、工程の進捗著しく、九月八日を以て精巧確實に豪宕雄麗なる模型を完成するに至れり。(口繪慘照)

動物鑛物採集委員は、研究會成立と同時に淺間山近傍一帶に生成する植物採集より着手、暑季に入りて蝶類を集め、登山毎に鑛物を蒐集し、四十一年度に於ては山誌に掲載すべき動物鑛物の分布性情等を研究し、兼ねて措葉標本等の整理を行ひ、九月四日を以て完結せり。

山誌編纂委員は、四十年六月下旬資料蒐集を手始とし、群馬縣下、草津、大笹、鎌倉等の方面に材料の蒐集をなし、九月中旬には測量隊を組織して距離の實測を行ひ、冬期には資料の寫本をなし、或は古老先輩につき質疑を行ひ、妄説を避け、翌四十一年必要なる書拔を終り、農器及暑中休業中、瀧澤、林兩委員は夜を日につぎて精勵編輯に従事し、九月十日を以て一先づ脱稿を見るに至れり。

又小諸町會は此舉を賛し、四十一年度に於て補助費を議決し、本會に多大の助力を與へられたり。斯くて以上の模型、動植鑛物標本、山誌、繪畫は四十一年下旬より開會の長野縣教育品展覽會に出品したるに會場に一異彩を放ち、模型は開會前に於て繪へガキに印刷せられ會期中縦覽者の好評を得、殊に、伏見宮、竹田宮、兩殿下の臺覽を忝うしたり。本校の光榮此上もなき事にして二ヶ年の繼續事業は茲に一先づ完成を見るに至れり。今日模型其他は紀念物として校内に保存陳列して參考に供し、山誌は爾來、會長佐藤寅太郎指揮の下に委員林勇教務の餘暇を以て更に一大増訂を行ひ、茲に發刊の運に至りしなり。經過の大要如斯。

小諸尋常高等小學校淺間山研究會

代表者 田中直次 識

明治四十三年六月十日

淺間山目次

第一編	東信風景論	一
第二編	淺間山	一五
第三編	淺間山變異記	三八
第一章	山史考	三八
第一節	天明以前の淺間山	三八
第二節	天明三年の淺間山	五〇
第三節	天明以後の淺間山	二八
第二章	裾野史考	一五六
第一節	天明儼僮記	一五六

第二節 天明騒動記……………一八六

(附)(一)源頼朝の史蹟……………二〇四

(二)國境論……………二一一

第四編 淺間神社考……………二一四

第五編 淺間山の地質及岩石……………二五三

第一章 淺間山四圍の地貌……………二五四

第二章 全山の地質及岩石(上)……………二五六

第三章 全山の地質及岩石(下)……………二六〇

第四章 山麓の水成岩と應用地質……………二六四

第六編 淺間山附近の植物……………二六七

第一章 植物採集概況……………二六七

第二章 主要なる植物目録……………二七四

第七編 淺間山附近の動物……………二八七

第八編 淺間登山(登山案内)……………三〇六

第九編 淺岳餘情……………三三五

(附)淺間山に關する記文……………三四五

第十編 淺間性情論……………三四七

第十一編 拾遺雜篇……………三六一

(第一)御在府中小諸藩日記……………三六四

(第二)黒酒の垂糟……………三九六

(第三)道行鳴波村千鳥……………四〇六

目次終

淺間山

長野縣小諸尋常高等小學校編纂

第一編 東信風景論

富士の女神と神集ひ 火雨ふらして醜陋を

八百日八百夜と淨めけん 若き姿の淺間山

佐久の廣野に眠りたる 千曲乙女の面影は

猛き炎を夢みつゝ 今も清やかに流れたり(伊藤子清白)

「煙は高き淺間の峰流は清き千曲の川」是豈東信濃風景の代表語にあらずや。人あり身を信越線の火車に托して、北越路に向はんとし、其一度碓氷嶺二十有六の洞門を出て、其處茫々たる草原の風に面を打たしむるに際してや、必ずや這箇好风光の眼前に開展せらるゝに接するなるべし。見よや、其北方に方り泰然と

東信風景の代表語

第一編 東信風景論

一

何等の崇
嚴何等の
崇高

東信風光
の第一位

第一編 東信風光論 二
して碧漢に峙ち胸中萬斛の不平を吐き盡して永久に人世を呪はんとするが如
き巨人の雄姿と其千尺の噴煙が朝暉夕暉と相映發して現出する千種萬様の氣
象とを。あゝ又何等の崇嚴何等の崇高ぞや。記すべしこれ名に負ふ信州淺
間が岳の雄姿なるを。而も其峻嶺連亘長く西に延び裾野の起伏波状をなして
歸するが如く清流を抱ける南方の一大谿谷に向ふて走るや偉容更に其度を加
へ來るを覺えずんばあらざるなるべし。其大谷に抱かれたる清流は是即千曲
の奔流にして火車は實に其清流に沿ひ其起伏せる丘陵を傳ふて走るなり。
に眼を轉じて左方の窓より眺むれば南を劃れる八ヶ岳の連山其豪姿を斜に立
更科の峻峯に連ね漸く進みては和田の高嶺又眼前に迫るを覺ゆるなるべし。
峻嶺又峻嶺。高峰又高峰。數ふべからざるの高岡數ふべからざるの丘陵。是
豈東信濃風光第一位のものにはあらずや。然れども只々之れをして雜然たる
集合無統一なる簇立と見るものあらばそは實に謬見なりと云はざるべからず。
其或は崩るゝが如くに窪み或は盛りなせるが如くに高き諸嶺の麓野の唯一に
走りて千曲の大谷に行くを見ずや。而も其聳立する千山萬岳唯西の一方を闢

柔壯を結
ぶに優雅
を以てす

美しき哉
山河の固

いて碧流を遣る様に至ては峻嶺偉峯實に河川の清きに結はれたるを思はずん
はあらざるなり。山岳若し剛なりとせば河川は即柔なり。山岳若し男性なり
といひ得べくんば河川は即女性なり。山岳若し嚴父なりといひ得べくんば河
川は即慈母たらずんばあらざるなり。實にや東信の風光は剛壯を結ぶに優雅
を以てしたるもの其生みなされたるものゝ萬人の等しく讚美を値すべきもの
なる是豈偶然たらんや。
美しきかな東信濃の山河の固め……。山岳あり奇にして秀。河川あり清にし
て快。而も此兩者に調理あるや其處に磅礴たる一種の靈氣存し常に襲ひて吾
人の情性を動かすが如くに思はしむ。然れども吾人は更に一步を進めて兩者
調理の態姿を見ざるべからず。蓋し山岳と河川とは此風光を生みたる主成分
なりと雖も其大部は舉げて之を山岳の功に歸せざるべからざらん乎。試に此
大景より山岳の悉くを抹し去りたりとせよ其餘す所のものは果して何か。而
も此兩者の此大景に對する軒輊に見ば山岳を推して其主腦たらしめんとする
素より論なきのみ。此處に重疊たる千山萬岳こそ實に東信風光の大部にして

東信風光
の骨髄

東信風光
の代表者

偉觀大觀の多くは、只々そのものにありて存するを知る也。

山岳大嶺は實に東信濃自然の骨髄なり。然りと雖も此の衆峰萬岳の中にありて偉大なる勢力の以て他を壓しつゝあるものはあらざるか。其幾多群峰に秀絶して以て此風光代表者の名目を冠せしむるに足るべきもの需めて而して之を得ざる乎。衆峯巒の先頭に屹立して勇猛戰士の棟梁たるもの抑之を誰？となすか。想ふに這は問はずして明なり。その一度此高原を過りたる彼の徳富蘇峰をして、

突兀孤峰挿碧空 群山以外勢飛揚

問君何有不平事 吐出焰煙萬丈長

と吟せしめ、又彼の梁川星巖をして、

信地多高峻 茲山最是雄 偶然似大度

憤悻鬱其中 萬古氣不滅 條々騰大空

と高吟せしめたる淺岳こそ、實に此風光の代表者なるべくして、衆峰を率ゐる偉將軍なるべけん。

徳富蘇花
の歌

巨人の山。偉人の山。不朽の山。東信の風光は之あるが爲めに實に一段の風趣を加へ、一段の偉大を添へ、多大の雄大を致し、多大の壯觀を成さしむるもの、猶國に良相宰あるが如く、戰陣に偉將軍あるが如けん。是吾人が淺岳を推して東信風光の主人公たらしめんとしたる所以、嚴父たらしめんとしたる所以、山川調理上に重きを叫ばんとしたる所以に外ならざる也。而して河川に至ては、吾人千曲を推して東信風光の慈母たらしめんとする素より論なき也。

徳富蘇花は讚すらく、
淺間と千曲とを除き去らば、東信の風景は殆んど皆無といふも誣言にあらじ。今回の遊や、僅に一週日、春夏の淺間素より見ず、然も往復に其腰を廻り、其裾野を上下し、或は黄ばめる落葉松の間より覗き、山驛の朝霧の絶間に眺め、或は其ラヅアの一塊も十里を隔てて明かによまる、まで晴渡りたる日に淡青色の無澤天、絨もて包める如き、其山の鮮かに秋空に浮び出で煙も立つとは見え、ただ霽ける様なるを望み、また所謂淺間底の烈き日には、山怒て吐く萬丈の煙、沸々と渦まき出るまゝに氣隨の風に吹きまくられて、右

に振れ左に流れ、従つて吐き従つて靡き、果は行く／＼吹きちぎられて片々
 飛んで須臾に満天の雪となるを眺め、或は夕陽山を射て、山の血の如く煙は
 金色の狼煙をあぐる夕、吾影を踏みて麓の小田の稻塚の側に立ちつゝ、日の
 傾くまゝに濃き桔梗色の蔭の山に湧き出で次第に夕陽の傾を蝕み行けば、
 夕日は谷より岨に逃れ、峰の一角に縮まり、細り細りて果は蒼然として暮れ
 終るを望む毎に見る毎に、愈山に靈ありと思ひしに、今日は又うつとりと笑
 めるが如き其山容を望みて、愛の骨に入るを覺え、かく叫びぬ。

あゝ爾信州の東門を鎮する淺間の山歟、偉丈夫の山よ。

千古に朽ちざる淺岳の讚美、萬人の等しく首肯する處なるべし。
 斯くの如くなれば、我東信の自然たる、茲に卓然として特異の風色を有す。思ふ
 に華麗は東信の風光にはあらずるべし、燦然も東信の風光にはあらずるべし。
 優婉も然るべく、濃艶も然るべく、唯々豪壯雄大こそ眞に此自然を謂ひ得て然り
 とすべく、偉大崇高壯美亦皆然りといふべき也。
 淺間を見よ。千曲を見よ。何ぞ其風貌の偉大なる。吾人は此大丈夫の山、偉人

の山が率ゐる風光に一言の不服を言ひ能はざる也。兒玉花外は謠はずや。

仰ぎ見すれば空きはに 淺間の山の吐く煙

鳥は迷はず、木は生えず、 生きたるもの、影もなく

高く聳えて遠く延ぶ。

山の威靈におのづから 首くだれば、わが補と

馬の鬣灰白し。 夕陽をよけて進みゆく

馬子の笠にもつもるかな (馬上低吟の一節)

蓋し此自然なり。實に、春花秋月、四季の序を逐ふて移りゆく東信の風光其
 一度刻まれたる深酷なる胸裡の印象は、牢として抜くべからざるものありて存
 する也。あゝ、これ抑山岳吾人をして然か思はしむるにあるか、山岳を思ふ吾人
 の情の漲れるにてあるか。

試に見よ。春霞淡く裾野に匂ひて若草萌え、嫩葉幽かに呼吸を營まんとする時、
 四圍の峻峰偉嶺の凄きはかりなる白雪の閃耀は如何況んや、此間淺岳噴煙の絶
 景を交ふるをや、茫々たる千曲の碧流を交ふるをや。愈春も暮れゆきて樹々の

葉緑愈濃かなるに至れば裾野に展けられたる一帯の深林、黒き迄に飽く迄も濃かなる緑を罩籠め、其所には一種不可言の偉力と、山岳の精力とが蟠窟するを覺ゆるにあらずや。況んや淺岳噴煙の絶景を交ふるをや、而して碧流千曲の走るあるをや。世は既に秋に入りて、燃るが如き紅葉の壯觀、山又山野、里又里を埋め去り、天地全く美化せらるゝ、偉觀大景、豈又多く見得る所のものならむや。况んや淺岳噴煙の絶景を交ふるをや、而して碧流千曲の駛るあるをや。又草葉黄み落ちて、荒寥なる高原、忽ち變じて人目を傷はんとするが如き白雪の閃耀、山かいやき、野かいやき、森かいやき、家かいやき、人かいやく、崇巖の極。是豈他境に多く見得る所のものならんや、况んや淺岳噴煙の絶景を交ふるをや、而して碧流千曲の走るあるをや。天神畫筆を揮ふて、其折々にかくの如く彩られたる淺間大野、長く延び、て千曲の大谷に終れる大なる自然の風呂敷の中には、そこに數萬生靈の養はれつゝあるを見ずや。あゝ、此山の血を享け、此山の乳を吸ひ、此風光に哺育まれたる人の子の性の如何にその豪壯なるかを見よ。

古來此風光の壯大を稱へ、殊に淺岳噴煙の絶景に向つて、讚美の聲を捧けたるも

の枚擧に遑あらず。試に其一二を擧げんか、

しらすべき煙も雲にうつもれて

淺間のたけの夕ぐれ空

藤原家隆

淺間山神のいふきのさりはれて

くも井にたてる夕煙かな

村田春海

淺間山幾としつきのたち來ても

峰の煙ぞむかしへたてぬ

鳥丸光榮

然れども是等は眞に俗惡にして陳套、未だ以て偉大なる淺岳を美化するには足らず、只山壘をして之を開かしめば、己を知らざるもの、甚しきを嘆せしめずんばあらず。ただそれ並木に響く鈴の音、悠々、喰ひ煙管に三度笠の馬子、木々の間に、北方の天を仰いて、謠ふ追分の一條、

小諸出て見よ淺間の山に

今朝もけむりが三條たつ

に至ては、鳥帽子に狩衣が、京家の公卿の文字の羅列に過ぎざる、詠に勝る事數等

カルパシ
ヤン山中
の高岡を
聯想す

の妙味を覚えすんばあらざるなり。
更に現代の詩人文人は、一度此高原を過り、此風光に接するや、毎に其情性を動かして以て好個の土産を得てかへる。山は人に知られ、人は山に知らるゝもの乎。嗚呼、また何等の奇縁ぞや。今、徳富蘇峰、小島鳥水、田山花袋諸氏の筆を假りて吾人の拙きに代へんとす。

もしそれ、信州淺間山下の大平原の如き、何となく人をして、歐洲カルパシヤン山中の高岡を聯想せしむるものあり、吾人は、輕井澤附近を往還する毎に如何にして鳥國たる日本に、かくの如く蒼莽なる光景あるかを、且つ疑ひ、且つ驚き、且つ悦はしむ。

(東京日より 徳富蘇峰)

寒氣をも怖れず窓明けて右を望めば、淺間山は劈空落し來たる大塊土か、この夕松井田にて仰きたりし時は、屹然高く白雲の外に抜き煙は香爐より立昇る如く曳々然として浮動し、兒の如く孫の如くなる群山その裾に趨りたりしが、今信濃一國にて最高の碓氷峠を足下に踏まへて視れば、土地高ければにや、淺間の高さはそれほどにもなきこと、乙女峠より富士を望むにも劣

淺間に金
剛不壞の
力おそろ

れり、それとこれとは距離の遠近、山の高低に區別ありて、一口には評しがたけれど、乙女峠は淺くして低く、碓氷峠は深くして高し、乙女は茶を飲むによろし、碓氷は山骨稜として霜の劍の何をか斫らざるむ、殊に淺間は混世魔王の狂ひ吼るが如く、野は空しくして一葉を見ず、川は濁りて一鱗を止めず、火を抛ち、石を轉ばし、天が下をば常關の國となさずばやまじとぞ、おもふ、富士に南山の壽めでたく、淺間に金剛不壞の力量おそろし、何人か測りけん古へより追分驛の人家の軒と、富士の峰と高低なしと言ひ傳へ、淺間を富士に亞げる高山とたゞへたりしは、いさゝか二價あれど、これらの山は活火山と死火山とを代表する本州の二名山にして、『信濃なる淺間の岳も燃ゆなれば不二の烟のかひやからむ』と後選に詠じたるは、知らずしてなるべけれど、中部日本火山の同脈に屬する二山を配したるは奇なり。

(淺間の煙 小島鳥水)

妙義、角落兩山の結節點なる碓氷嶺の暗碧の上高く、滿身玲瓏たる白雪の衣を着けて、斜に日に對したる其の美、其の秀、其の麗、殊に空は一點の雲翳なく

雪の天國

晴れ渡りて、其深碧の純白と相映對せる表象の美は、到底この人の世のものとも思はれぬ許なり。雪の天國の語はそれとなく我が感嘆せる心頭に上りぬ。

雪の天國！何ぞその言葉の玲瓏たるや。われはその雪の天國の如何に美しきかを想像して、殆んど眼をその淺間の大嶺より移さざりき。(中略)隧道の數二十有六、あゝ何ぞその暗黒なるや、車燈の影朧げに人を照して、其顔其姿、恰も陰府にあるが如し、あゝこれ雪の天國に通ずる洞門ならずや。

一度洞門を出づれば、山かいやき野かいやき、家かいやき、人かいやきて、果してこれ雪の天國！

誰か快哉を呼ばざるものぞ。見よ、其四面の雪のいかに美しく、天日に閃き渡れるかを、輕井澤の野の廣漠たるは人皆之を知る。其樹林の配置、燒石の磊塊、四面の山の開けたる、全く泰西の風景に類して、外國人の好みて暑を此地に避くるも、亦知らざるものは少なかるべし、されど此雪の野、雪の平原を知れりや。

淺間の大嶺は既に眼前に近く、其雪の閃耀は殆んど人目を傷はんとするばかり、烟は前嶺の左肩を掠めて、低く小淺間の絶巔をすぎ、簇々として其後背六里が原に靡き行けり、地上には雪所々に團をなして、烟れる如き檜山毛櫛の排列、落葉松の葉は残りなく凋落して、薄、萱蓑の半ば雪に埋れながら、蕭々たる山風に鳴れる、まことに冬の淋しさと寒さをあらはして餘あり。

(雪の信濃 田山花袋)

小島鳥水は、其著『日本山水論』の一節に記して曰く、天我を覆ひ、地我を載す、この間に立ちて二極の連鎖たるべきものは山岳なり。高きものは其性質として、本來人をチャームする力を有すと。其何が故に然るかは知らずと雖も、吾人は實に高山大岳を愛するものなり、高山大岳を愛するが故に、淺岳を好愛措く能はざるものなり、淺岳を好愛措く能はざるが故に、淺岳が率ゐる、東信濃の風光を好愛措く能はざるものなり。

さるにても忘れがたきは、豪壯偉大なる淺岳の風姿なるかな。彼の高遠に跨る雄大の姿。不朽を語る神秘の力。裾野を過ぎる一夜泊の旅客をして、『呑めよ、

人をチャームする

不朽を語る神秘の力

騒げよ、いよ、明日は、淺間煙の立ちわかれ』と語はしめたるもの其意を解して如上の意味に解せよ。吾人は實に其情に座する一人たるものなり。嗚呼、地上唯一の偉よ、壯よ、淺岳よ、吾人は決して汝を忘るゝ能はざるを奈何せん。

第二編 淺間山

淺間磅礴二州連 萬古依然不斷煙
何事近時屢鳴動 行人感額說當年

岡本核堂

蜻蛉洲の名山

淺間山は雷に東信の名山たるのみならず、古來富士山と並稱せられて蜻蛉洲中の名山なり。地理學者は之を活火山最良の好標本なりと稱し、詩人騷客は『煙ばかりは埋れぬ』絶景に讚美の聲を捧ぐ。發して灼熱せる熔岩の迸流となり、三十餘村の人畜爲めに埋没。鬱して般々たる奇怪の叫喚となり、麓野の人士爲めに額を感む。崇嚴の山、恐ろしの山海を抜く事八千二百五十尺、千古巍然として上信の境に峙つ。

信飛一帯の地況

抑淺間山が聳立する信飛一帯の地や、樺太崑崙兩大山系衝突の地點にして、山岳の群集既に多かるべきを、況んや不二一帯の山系横的に此地を遮断するや、峻嶺偉峰競ふて簇立するもの實に其數を知らず、加ふるに以上兩山系の率ゆる諸火

山脉の會するあり、爲めに峻嶮更に峻嶮を加へて、茲に全國に冠たる大勢を示すに至る。

褶曲山の多くが屋棟状をなして、隣々近きに反して是を尖り削られ群離し、孤立し或は層起し、簇群す、高峻、突兀、平仄の押韻を意とせず、鑿亦甚しからざる詩に、却て思索以外の天品を見る如し、火山は實に日本巨人中の骨人也、確人も、力人也。

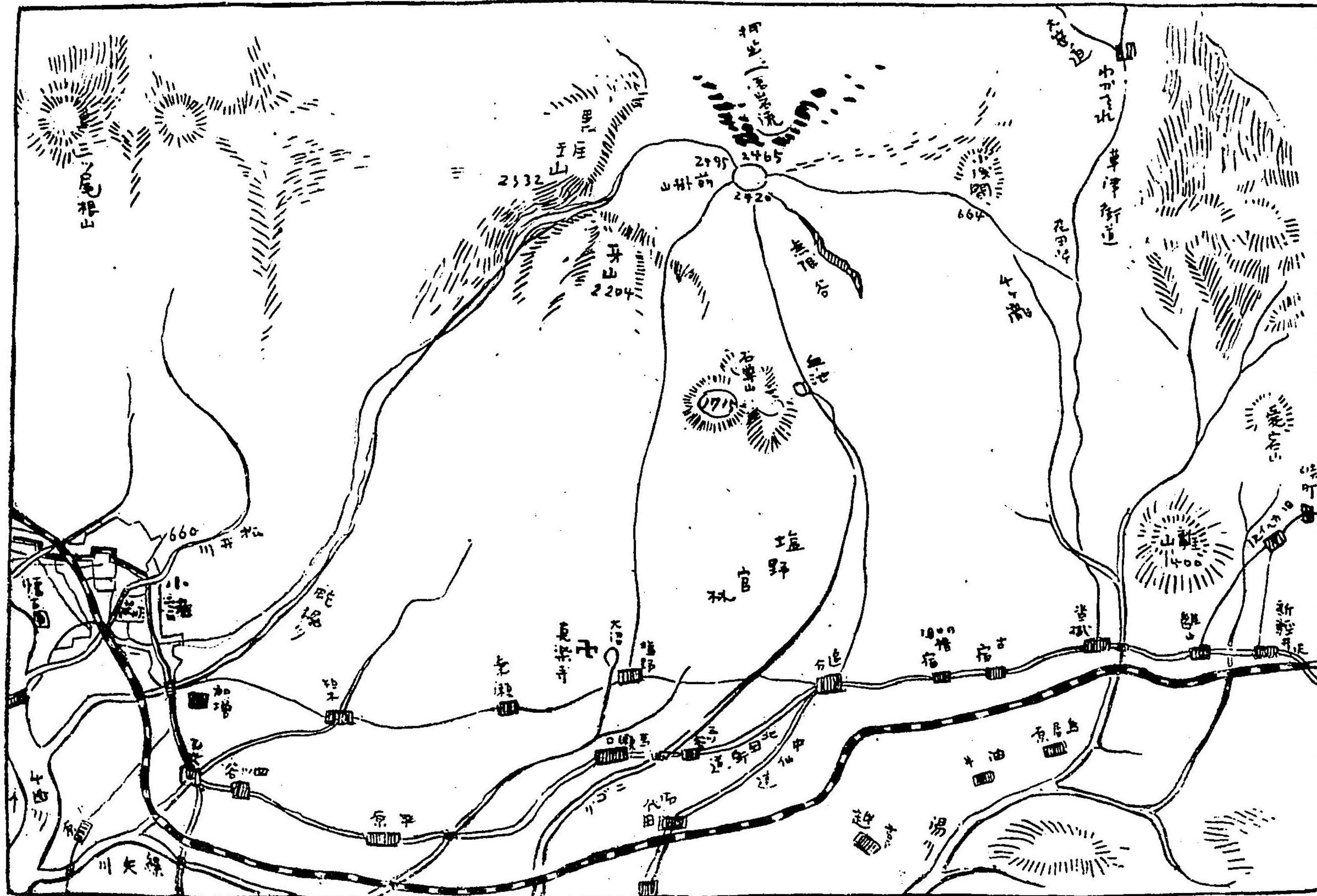
(小島鳥水)

那須火山脈の來りて淺岳を起し、鳥海火山脈の走せて之を見舞ひ、彌彦火山脈の馳せて此高原に會するもの即是なり。而して是等諸火山脈の相衝突する中溝は之を不二帶となし、大平洋より日本海に向て本土を横的に遮斷す。信濃の地峻嶮峰巒の簇集する、又故なからずや。我が淺岳の峻嶮は、實に其那須火山脈と這箇不二帶との連結點に立ち、高峻地上更に秀拔を加へ、而も我蜻蜒州の中央に其座を占むるもの也。されば苟も我國の火山脈を論せんと欲するものは、必ずや此山を以て結節點として標記せざるべからざる也。

淺間山は信濃國北佐久郡の北境に位し、上野國吾妻郡に跨る。山の構造は稍複

淺間山の位置

淺間山圖



牙山

雜と稱すべく、二の外輪山と一の火口丘とより成る。而して其外輪山たる今は甚しく壞損して、只僅に其一部分を残すのみなるを以て、其頂上は勢三箇の峰に分たる。即第一次の噴火口は、其火口壁の一部を存して牙山と稱し、第二次の噴火口は今日の所謂前掛山にして、其東方にあるを火口丘淺間山とし、今日盛に噴煙しつゝあるもの是なり。

牙山(三二〇四米)淺間山第一次の外輪山にして、其一部は今尙山の西南に存して、其様眞に齒牙の並列するが如し。牙山の名は蓋し之より來れるならむ。此山は其北方に當れる黒斑山と共に、淺山第一次の火口壁をなすものなれど、其後此火口の東部に偏して第二次に噴出したる前掛山及び第三次に噴出したる火口丘淺間山等の爲めに、其火口の東部は之を認むる能はざるに至れり。然れども、此壁を有したりし當時の噴火口は、少くとも現火口の數百倍のものたりしや疑ふべくもあらざるなり。

黒斑山

黒斑山(三三三二米)牙山の北方、前掛山の西北に方り、頂上黒斑の一嶺あり、是此山なり。此山は前述の如く牙山と連亘して、第一次の外輪山たりしものなれど

寶圓坊の
前掛山

も、今は兩山、一大深谷を以て隔てられ中に火口瀬の一流を挾む。因世に此山を寶圓坊と呼ぶものあれども、そは誤ならん、寶圓坊の名は此地方にて其近傍の溪澤を寶圓坊の澤と呼ぶにあるのみ。

前掛山(三四九五米)第二次噴火口の西壁にして、第二次火口丘たると同時に、又其東部に噴起せる火口丘淺間山の外輪山なりとす。其内面は絶壁をなして柱状をなせる熔岩の露出明かに、外側は西方に向ひて第一次火口壁邊に延び、其間に火口原を有す。此山中腹以上は岩塊累々として毫も草木を見ざれども、其以下に至れば樹木漸く茂り草叢地面を覆ふて又大地を露出せず。火口原は南北に長き新月狀にして、這松雜草之を蔽ひ、山鳥野禽の靜に謠ふを聞き、其靜寂は太古に比すべし。原は之を湯の平と稱し登山者の一休すべき所なり。又火口の水は黒斑山と牙山との間を穿ちて火口瀬をなし、四邊の溪谷を賑はしつゝ、西南に流れて千曲川に入る、蛇堀川是なり。淺岳が豪壯雄大の英姿を持し、古今人士をして嘆賞措く能はざらしむるものあるも、そは實に此前掛山あるが故にして、假令噴火口内更に新山を生じたりと雖も、尨大の形骸は今尙存して當年を説く、

湯の平

蛇堀川

狂歌に曰く

釜もとの常に世話しきしるしには

淺間か嶽に前掛のやま

謂ひ得て又妙ならずや。

銚子口
無限谷
壺岩

前掛山の東方に延びたるものは火口丘淺間山を圍繞す。其南壁の一低所は之を銚子口と稱す。登山者此處に到れば、前に方りて蒸々たる噴煙の亂騰するを認め得べし、此處より東は地概ね低きにつくのみにして、外輪山は只僅に小隆起として認め得るに過ぎず、北部に至れば全く火口丘に覆はれ盡して又見得べきなし。銚子口の東南山側に一大深谷あり、之を無限谷といひ、其下方谷に臨みて巨岩峙立するもの之を壺岩と稱す。

前掛山の後方に方つて峭立し、四時白煙の亂騰するものは、是即現今の噴火口に於て、數萬の生靈敢えなくも武藏野の露と消えにし未曾有の一大慘劇は、實に此坑口よりせしを忘れざれ。

火口丘淺
間山

火口丘淺間山(三五二〇米)火口丘は火口原より隆起する事極めて小なれども、

其山頂は即淺岳の最秀點なり、火口は俗に之を『お登』と稱し、東北半缺の低處あれども稍完全なる圓形をなし、周圍約十八町と稱す、(口繪参照) 漠々たる白煙常に山頂に漾ふと雖も、清朗なる天候に當ては雲霧極めて少なく、内壁坑底手に取るが如く瞰取するを得べし、火口の深さ八百二十尺壁面には熔岩噴石の累層歴然たるを認め得べく、蒸氣は亞硫酸硫化水素と共に火口壁面及び口底數箇の裂罅より猛然として噴出す。其様實に狂り狂へる野獸の如く、劇烈を極め猛烈を極め、すさまじき乱騰の白煙と叫喚の凄絶なる現象とに至ては、人をして長く凝視する能はざらしむ。加之、火口底の小孔裂罅よりは、往々にして深紅色の物体を認むる事あり、是即ち灼熱せる熔岩の一部を現はしたるものにして、眞に赤龍走るの地獄穴、傑然として自然の魔力に驚かざるを得ず。山の外側は全く浮石を以て被はれ、又間々幅射狀の裂れ目あるを見る、殊に其西北側に當ては其大なるものを存し、裂罅よりは時として蒸氣などを漏出す。すさまじき哉。自然の力も亦!!

小淺間山

山の東腹、輕井澤、沓掛登山道に方り、山頂稍窪める一小火山あり。小淺間山と稱

石尊山

し寄生火山なり。又前掛山の南方に方り、石尊山と稱する一小隆起あり。是牙山、黒斑山と共に外輪山をなすが如き觀ありと雖も、想ふに獨立せる一側火山なるべきか。又裾野、輕井澤の西方に離山と稱する隆起あり、之も同じく側火山なるべき乎。

離山

血の池
おぼくろ池

追分口登山道、石尊山の東北に三池あり、二は赭赤色にして一は藍青色なり。前者は血の池と稱し、浮石中の鐵分溶解して着色せるものなるべく、後者はおぼくろ池と稱し、此附近に特在する硫酸鐵の溶解したるものなるべし、三池皆直徑凡そ十五六間、稍長圓形をなす。

火山の形態美は、裾野實に其一に居る。然れども淺間火山は、其東西二方接するに他の峰巒を以てするあり、爲めに裾野は東西兩麓に於て殆んど之を見るべからず。然れども南北の兩麓に至ては、其發達著しくして、北なるは之を六里原と稱し、南なるは之を追分原と稱す。

追分原

追分原 吾人は先に淺南の裾野は之を追分原といひたりき。然れ共實は追分原決して其全部にはあらず、唯其大部は追分原即ち之を占むるに居るのみ。裾

野は廣くはかれれば北佐久郡の大部を擧げて然りといふも不可なきが如く也。疑ふ人あらば願くは去つて淺間を遠望せよ、北佐久の大部は實に千曲の溪谷に走長る裾野の大風呂敷に包まれたるを見ずや、然れども今は主として、幅半里餘^五三里に亘る追分原を記して、以て其一般を窺ふ事とすべし。

追分原の名は、其原中の一驛追分より來れるなるべし。而して其驛の名は、實に北國街道と中仙道との追分より來れるなるべし。先にも述べたる如く、此處は火山の中腹にして、往還の標高七八〇〇米^ハなれば氣候至て寒冷にして、盛夏の頃と雖も蚊虻を用ひざる村落もあり。

夏さむき淺間がたけの麓原

雲低く下りて飛ぶ鳥もなし — 佐々木信綱

は即ち此處の事なり。殊に土地一般に磽确にして、至る處浮石の散乱を見ざるなく、矮松雜草徒らに存して耕耘に適せざれば、原は實に茫々として所謂『追分通り』とて寂寥の通の謂となる、貝原翁の木曾路記には『三宿の間、南北半里許東西二三里程、いたづらなる曠野あり、寒さ甚しく五穀生せず、たゞ稗菴麥のみ生

追分通り

する故畠少し。又果の樹なし民家にも植木なし、不毛の地といひつべし。』とあり。又かの新古今集に

いたづらにたつや淺間の夕煙

里とひかぬるをちこちのやま — 藤原雅經

とある遠近の里の名今に残りて、正に此邊の事なり。夕陽暮靄に消えて四山淡黒、荒蕪たる草原を辿る旅人の情。霧深き高原と、濛々たる噴煙と其感慨何れにありとするも、此原の面目躍如たるものの存する也。

原の中には荒村數多あり、何れも鐵路敷設以前にありては、北國往還の客を擁して般賑を極めたる巷なれども、今や單に荒涼たる山村に過ぎず。中に名高きは三宿^三なり、三宿とは輕井澤、杓掛、追分三驛の事なれども、或意味に於ては此地方宿驛の代表語たる事あり。三宿古昔の面影は

淺間山さんなせ焼けしやんす

裾に三宿(又はお十七)もちながら

と、追分節に残りて當時の髣髴するものあり。ただ輕井澤は夏季三月避暑の客

遠近の里

三宿

輕井澤

追分

を迎ふるが故に、外人などの來遊するもの甚だ多く、一時股賑を極むと雖もそれも盛夏の短期間に過ぎず。又沓掛、追分の如きも近來停車場の新設せらるゝありて避暑客の來る者多しと聞けど、古昔仇男をして『仇な追分立退く時は松の露やら雫やら』と謠はしめたる面影は到底之を見得べくもあらず。

雲場原

輕井澤の附近一帯を特に雲場原と稱す。裾野中の一原野なり。小島鳥水は其附近の風物を描いて曰く、

輕井澤高原は一望皆霜白、鴉茶白の西洋人の別墅のみ。枯芒の中に、赤味を含みて何となく一味の暖氣を漲らす中に、瘦せて小さき唐松の林は、黎檬黄に光り、高原の風に毛を擦り切らしたる蕘の兀山に渦まく雲は、氷の如く固まり、雲と雲と相合ふや、氷と氷と相觸るる如く鏗々然として鳴らむとすれど、さすがに昇る旭を包む能はず、離山の頂先づ鯖色に青く光りぬ、木立がくれの古沼の鏘にして見まほしの秘色や、霧の淺間、雲の淺間、雨の淺間を再びすることを恐れたる我は、かくても猶淺間の見えぬを、いかにもごかしく思ひ、いかに燥り立ちたるぞ、しかも雲の流るゝこと早く碧水の底を見せたる

追分

空に泡沫の如く淡々しく漂ふに至りしが、流石に淺間は高かち、雲綿々として山の厚きこと、平生の二倍にも達しぬ、我は鉋を揮ひてかの厚きものを削り落したく思ひぬ。(雲表より)

又田山花袋は其西沓掛、追分附近の冬を描いて曰く。

汽車、輕井澤の停車場に停ること十餘分。再び轟々として西を指せば、落葉松を以て縁取れる谷、枯草亂篠を以て充されたる丘陵、雪は樹陰、山陰に白を殘して泥濘半ば解けたる一道の大路、深く陥りたる轍の跡は、長く楢林の彼方に通じて、先づ見ゆるものは沓掛の荒驛、何ぞその驛の荒涼たるや、何ぞその白壁の點々として寒げなるや。風は折から淺間の雪を渡り來りて、輕羅日にかゝやく數千片眞に是れ、金粉銀粉を粧點し來りたるものに髣髴たり。追分の町の荒涼たる人家を、檜、落葉松などの林の絶間に望みつゝ、丘陵と平原と相交れる間を走ること數里、御代田の停車場に至る。(雲の信濃より) 荒涼たる原野の狀、それ眼前に開展せらるゝにあらずや。而も更に聞くべし、燒石磊々として石原をなせるには

吹き飛ばす石も淺間の野分かな

芭蕉

斯箇の光景、眞に此十七字に盡きたりといふべし。

然れども、近來人智漸く開明に向ひ、曠野の開墾と共に殖林の事業愈々盛大に赴くあり。淺岳を遠望したる士は定めし此大景を見たるなるべし、其濃緑を籠めたる一帯の原野は、漸く展びて幾多の深林を載せ、以て人家に近づくあるを、而して其殖林は、今や益々山の中腹に及びて、自然林を壓しつゝあるなり、大野を蔽ふて大地を露出せしめざる、この深林こそ實に淺岳をして雄大を保たしむる一の要素なれ、即ち吾人は更に進んで、その殖林の状況を述べんとす。

殖林状況
一般
裾野の土

淺間山麓、土地状況の一般を観察するに、追分以東裾野の大半は、數次の降砂石其上面を覆ひ、土壤概ね結合の力なく、従つて荒蕪不毛の地多きに反して、追分以西裾野の西半は、地味概ね良好にして、田圃従つて多きを見る、而して殖林の事、以上兩者に差異ある事素よりなりとす、即前者の大部分を占めたる從來の自然林は、赤松其他の雜木にして、赤松は實に其大部を占む、而して林齡亦五六十年より七十年前後に達するものありといふ。後者に至ては、赤松の自然林亦其大部分を

從來の自
然林

殖林の計
劃

苗圃

裾野の西
半終る

占め、中央より北部に偏するの地を除きては、地味概ね同一なるを以て、其成長亦好良の成績を示し、林齡實に六十年より百二三十年に至るものありといふ。而して以上兩者の地積、總計一萬千六百町歩、其中六千三百町歩は、或程度の生産地と稱するを得べけれども、約一千八百八十町歩は、實に全く不毛の地域たるを免れず、明治廿二年に至り、當路者は現在の森林に改良を加ふると同時に、比較的良好なる殘部の荒原、三千町歩に殖林を行ひ、富源の蓄積に其意を致し、爾來茲に連年殖林を施行し來り、大に見るべきあるを認むるに至れりといふ。

殖林の計劃に關しては、信濃山林誌を閲するに、先づ裾野西半の平地に始めて、漸次之を東方に及ぼし、以て未立木の同地を埋むる方案なりしかば、第一に防火線を開きて野火の延焼を禦ぎ、樹種は落葉松を主とし、地味によりて赤松を雜ゆる事とし、此等の苗木を養成すべき苗圃を裾野に設置せり。造林に着手したるは明治廿二年にして、先づ裾野の中、字一杯水と稱する所に廿三町歩の植樹を行ひ、續て翌年之に隣れる字、マムシ塚の三十六町歩に植付け、爾來繼續明治三十年に至りて裾野の西半を了へたれば、三十一年よりは裾野の東半に轉じて、追分の裏

植栽面積
及樹別

手なる大原野に着手し、三十五年には上州の國境に接する、東部一團の未立木地に及び、斯くして現今に至りては、既に計劃地の殆んど全部を了せり。而して當初以來、三十九年度に至る間の植栽面積は、二千六百三十町歩に達し、これが造林の費用亦、三萬五千五百五十八圓六十五錢の巨額となる、右植栽面積を樹別によれば左の如し。

落葉松	二、一九二、七〇〇歩
赤松	三〇七、一〇〇歩
扁柏	三九、〇〇〇歩
栗	八六、〇〇〇歩
其他	五、四〇〇歩

事業の當初にありては、準備未だ完からず、年々僅に二三十町歩の植付をなすに過ぎざりしが、苗木の養成と人夫の熟練とは、漸次施行面積の擴大を促し、近時は平均三百町歩の新植を行ふに至り、既に豫定の大半を盡し、残るは僅に點々たる介在地、五百餘町歩に過ぎず、されば今後一二年にして全く其手を收むるに至る

六里が原

熔岩流の
遺蹟

べしと、かくして吾人が所謂淺岳麓野大景の成因をなしつゝあるものなり。

六里が原 一度淺岳の絶巔を極めたる士は、恐らくは北方群馬に向つて一瞥を與へたるなるべし、其際登山子が眸中を射ける奇怪物は、抑何物ぞや。其脚下に始まりて、長くく原を遮り延びたる黒色の奇怪物は、抑何物ぞや、是問はずして知らん、淺岳が流出したる熔岩流の遺跡なるを。其赭土を捏して造作せるが如き、丘や岡や原やを壓し、思ふが儘に手足を展ばしたる様、實に其凄慘の跡とは見すや。今にして之を見る猶慄然たる氣の襲ふあるを。況んや、灼熱せる熔岩沸騰せる泥流、延長十有六里に及び、人畜爲めに盪盡し果されし當時の慘狀は果して、如何なりし。さればなり、今や此原茫茫として、矮松雜草の外、人生活の象を認め得ざる曠野となり、僅々うら寒く悲しき林の少數を包み延びく、て遂に吾妻川の沿岸に達す、六里が原とは實に此曠漠たる意味の謂なるべく、荒涼又茫茫たるの原野に過ぎざるなり。殊に此原の地下、鎌原の一村は天明の異變に埋没せられしを思へば、雲低く垂れたる夕、眞に人魂迷ふを覺ふ。彼の遊子をして「いさまで黒きよ熔岩の簇りて、六里が原に熟睡せるさま」と詠せしめたる熔岩

の奇觀は、延長一萬七千三百二十五尺、面積五億八千五百五十二萬二千七百七十六平方尺。實に六里原をいふ第一位のものたるなり。かくの如き六里原は、中に少數の荒村を包み、白根山の山陽なる裾野と相合せ所謂三原の大野をなすものとす。三原とは舊庄名にして、吾妻郡の奥なる淺間白根の間なる曠野に、御牧の名ありしによる。蓋古の拜志(延喜式)左馬寮御牧九所(一)大笹近世幕府關柵をおきて通路を監視したる所とす、或は狩宿御番所と呼びたり、されど季世には停廢せられたり(の御牧にあたり、大田郷の西鳥居峠に至る迄を總稱す)。

後世は特に三原の村名を立て、長野原の西三里、吾妻川の北岸に其號あり、今は更に鎌原、西窪、大前、大笹、千俣、田代等を合せ、嬬戀村と改めたり、讀者若し此處に至るあらば立つて淺岳の容姿に注意せよ。蓋し淺岳は凄然たり。風は浙瀝たり、人をして凄凉の氣中に投せられたるが如く感せしむ。是噴火口の北邊著しく低く、裾野にありて猶よく坑内より噴煙の状況を觀取し得るによるものとす。然れども此間の消息に至ては、未だ其人ありてよく天下に示したるものあるを聞

かざる也。さるを我淺間山研究會は曾て此地に實地踏査をなしたる事あり、而して當時の紀行は、一行中の太田信陽が手によりて既に公表せられたるものあり、取りて讀む、荒涼たる六里が原、凄絶なる熔岩流の遺跡、宛として眼前に躍る、依て其一節を抄録して此間の消息を窺ふ事とすべし。

此邊から所謂六里が原だ、燒石累々たる中に雜木林、赤松の疎林などが間々點綴せられて居るのみで、水もなく、田畑もなく、村里もない、極めて單調な殺風景の平原である、此間を一里程歩いて待ち惚けたわかさりの茶屋に着いた、吾等は今北上州に一步を踏み入れたのである。(中略)不潔でこそあれ、吾等は此茶屋で種々なる趣味を發見した、それは此處の庭(即街道で此方面に於ける長野と群馬は區劃せらるゝのである、それ故、物置場は長野縣の管轄、壞れかゝつた様な便所は群馬縣の管轄となる)といふ奇觀もある。調査の必要から村役場の所在地を聞いたら三里半郡役所はと問へば十二里餘ある長野宿と答へるなどは、一寸啞然たざらるを得なかつた、又冬はどんなこと雪が降るね……サ様サ五六尺は降るダンベ……それじや人通も

ないだらう……郵便屋(シヤ)が通る許でガンス……これから二里半應桑泊りと決定して、わかさりの茶屋を出た、淺間背面は愈鮮明に見えて來た、鐵路の通ずる方面では種々の山が目障りとなつて、恰も士卒に擁さるゝ將軍の様に、偶々行人に實体を誤認され易いが、當方からは赤裸々の火山スタイルを遺憾なく發揮して居る、西の方火山壁の一部も見える、殊に天明大噴火の時、ラバの大流出をした跡が背面の半程を區劃して、歴々と手に探る様である。明日は吾等は彼處へ攀ちて親しく探検するかと思へば、恐怖いやうな壯快のやうな妙な氣がする。(此夜應桑泊) 此處で今着いた樽の水を瓶につめさせ、多くの草鞋を用意して茶屋の裏手から鬼押出を目標に登り初めた、無論道などは更にない、ただ焼石の鬼磊たる中に、例の矮松が亂立して居るのみだ。

仰き見れば、火雲疊々たる淺岳は魔の如く前を塞し、白根四阿の峻嶺は、犬巨人の大手を擴げて立つやうに、吾等の右手を壓してをる、また黒斑の背面が白斑であるのは、中々の奇觀である。



I. BARAKI

此邊は四方いづれも數里に及ぶ六里が原の廣原で、天明大燒後一時は一草一樹だに無く見渡す限り悲風浙々たる焦土であつたらうが今は彼方の山麓、此方の丘陵と所々に落葉松、赤松の林も出來、幾分の景致を添へてあるが、名物の燒石熱土は百餘の星霜では未だ如何ともする事が出來ぬ、其無數なる燒石は彼の酸化鐵を含む輝石安山岩で、一樣に紅がかりした黧黑色の三抱へ四抱にも及ぶものも累々として堆積して居る、それが噴出の際雨液と空中を飛散し、舷々……否岩々相摩し自然に稜角を失たものと見え、多くは皆楕圓形のものである、そして炙り過ぎた燒餅の様に、表面に皆無數の裂皺を存して居る、仍ち落下して冷却する際内部と表面と、熱の不調和から起きた顯象であるのは勿論だ、余は標本に鬼の握飯大のもの一ツ拾うて來た、今日の酷熱は格別だ、金を鏢すとは斯る折の形容であらう、茶屋から十町も登つてから吾等の行手には、日影を遮る一樹さへない、脚下は熱せる妙礫や火山彈にて殆んど熬り盡されやうとする、乾きに乾きて唾も汗も出ぬ、只一方里に一二程砂漠のオアシス様の小林があつたので、吾等はそれがため暫

し日光の直射を避けて幸に眩暈者も出さなんだ。

此途中予は砂礫中の地盤に二三ヶ所長く續ける大裂條のあるを見受けた、跪て罅隙を窺たが、闇憶として底ひの知れぬ所もある、試に小石を墮せば暫くコロコロと微響を傳へ、思はず人の氣魄を寒からしむ。

吾等は斯る間又熔岩勑流の跡が河身の様に所々に凹地をして居る邊を過ぎ、崔嵬たる一高丘を攀ちて、漸く鬼押出しと稱する所へついた。

遠くから想像はして來たもの、かく迄凄絶壯絶の有様とは思はざりしを、予は思はず百鬼夜行!!と叫ばざるを得なかつた、予の百鬼夜行と叫んだのは、其累々さ山積して居るバラの形狀をいふたのである、色は恰も骸炭だ、大なるは高さも幅さも三十尺も四十尺もあらう、黒鬼の如きものもある、猛虎の隅を負うて嘯くやうなものもある、仁王の如く突つ立つて居るもの、阿修羅の荒れ狂ふ如きもの、悪人の塑像の如きもの等、高底亂立、何れも吾が頭上に墮ちやうとして居る、恐らく眞面目に見ゆるものは一つもあるまい、總ての形態が殍猛だ、地獄式だ、之を要するに百鬼夜行といふより外は適切な形容

詞を持たぬ。

此ラバが磊々として重疊してをるのは、一二丈から十丈位の高さで二三町七八町、長きは半里も續いて居るのだ、こんな處を寫生すれば、地獄の針の山はいとも立派に出來上るであらう。

熟々山巔を望見するに、天明噴火の際には先づ瓦斯の爆烈に因つて殻を成せる大岩塊を山麓附近に落下せしめ、次で普通の岩石砂礫と共に、ラバの大噴出を來したのと思はれる、其背面山麓に却て左まで焼痕なき輝石富士岩輝石安山岩、第三紀水成岩、玻璃質安山岩らしい、大岩塊の多く點在するを認むるからである、されど、こは智識淺薄なる予輩の一個の私言、斯道本識者の鑿證を要するは勿論である。(中略)

由來、淺間の特色は海拔の特に秀でたるに非ず、高山植物にあらず、珍奇の昆蟲、豊富の礦物等にもあらずして、我火山國に於ける地下活動を、最もよく表彰しつつある火山……加之、斯學研究者の好資料たる複成的活火山たるにあり、而も、其大活動の實蹟は、此裏山にあらざれば、明瞭なる觀察を遂げが、

たいのである。(下巻)

あゝ、淺岳をして、單に片々たる部分の解剖を以てせしむれば、又他に需むべき奇とてある事なし。然れども千古依然として、彼の八咫富岳の煙は絶ゆるとも、泰然自若として、人知らぬ遠つ神代より、明治聖代の今日に至るまで、隆々として噴煙する様實にも勇ましの限ならずや。

江山洵美
是我郷

『江山洵美是我郷』誰が吾郷の洵美を謂はざるものぞ。而かも淺岳麓近來切りに殖林の事あり、豪岩不羈の雄姿更に其度を加ふるや、吾人は益々淺岳好愛の情措く能はざるものあり。或人吾人に語て曰く、『淺岳の野!! 谿谷幾重の底、小脉幾重に疊にも疊込まれたる所、深林生氣を籠むる所、余をして謂はしむれば、其の處には一種計量すべからざる精氣偉力、勢力の蟠まれるを覺ゆ。蛟龍潜むの感興は、其野を徂徠する毎に、常に來て余が胸臆を刺す』と。吾人亦何ぞ此感なからむや。實に斯箇精氣、勢力の感情は、麓野の人士に向て古來幾千年の感化と誘導とを逞うす。其血を享けたる麓野數萬の生靈、夫れ奈何の情性をか有するぞ。内村鑑三は、其著地人論に説いて曰く、『人類の本能は山を以て神殿を築くの地

天の默示

と定めたり。オリムピヤの山頂、是希臘全土の上に天智の降臨する處なりき。シナイ半島、ムーサ山嶺、是九誡の大訓が人類に授けられし所なり。ヒマラヤ山南面靈鷲山、是佛教三千年の基を開きし處にして、東洋教化の遺源ならずや』と。知らず、偉嶺淺岳が率ゐたる裾野人士か受けたりし天の默示の果して何かを。吾人は、此自然に哺まれたる幾多の生靈が、其性能の發揮に待ちて日本人文の啓發を期待す。淺間人士それ茲にかへりみる所ありて可也。

第三編 淺間山變異記

第一章 山史考

第一節 天明以前の淺間山

淺間山最初の噴火は、抑何れの頃にてありしか。今姑らく古記録が口吻を假り來れば、『上古大燒のありしこと未だ詳ならず。日本紀に、天武天皇、白鳳十四年三月、信濃國灰降、草木皆枯とあり、案するに淺間岳此時大燒ありし灰なるべし。』(天明信上變異記)とありて大古の事未だ詳ならず。然れども次掲數首の和歌によりて察すれば、昔時は靈岳芙蓉と共に、其噴煙を鏡ひたりしや、疑ふべくもあらざる也。

最初の噴火

信濃なる淺間が岳も燃ゆなれば

ふじの煙のかひやなからむ

富士の嶺の神の名にきく淺間山

煙くらべやするもおくれぬ

するが

契 冲

而して又、次掲數首の和歌に徴すれば、富士の噴煙絶ゆるとも、此嶽ひとり其噴火を繼續したりし様をうかひ知るに足るべき也。

富士の嶺は絶えぬと聞くを淺間山

心たかくも立つけむりかな

小澤 蘆鹿

いつの世に淺間の岳の燃えそめて

富士の煙やたゝすなりけむ

足立 弘訓

同じ惠の露浴みし姉山の煙絶え果て、吾たゞ獨り残りたる腕白兒淺岳が胸中は果して如何の思かある。かくて、戸籍は之を存すと雖も、生年月の幽久にして不測なる淺岳は、千古依然として噴火を繼續しつゝあるなり。然らば、吾人は之より手中に存する古記録に原き、そが天明以前の歴史を物語らんかな。

一、白鳳十四年——皇紀一三四五 (天武天皇の御宇)

三月信濃國灰零草木皆枯云 (日本書紀)

今之を按するに、是恐らくは此山の異をあげたるなるべし。絶頂の大坑常に煙立のほり、硫黄の氣あり、坑中に硫黄滿つる時地火突發し、大石

白鳳十四年

はとはしり、砂石を降し、麓をやく、其音數百里に聞ゆ、故に此山ひとり元として四時すさまじ。〔信濃地名考〕

仁和三年

一、仁和三年——皇紀一五四七〔光孝天皇の御宇〕

七月三十日、大山頽崩、山河溢流、六郡之城、塵拂地、漂流牛馬、男女流死、成丘〔扶桑略記〕

按千曲川の變なるべし、佐久、小縣、埴科、水内、高井各六郡なり〔淺間嶽記〕
編者曰、大山は淺岳乎、若し然らざるも、其連嶺餘脈の事なるべし。

天仁元年

一、天仁元年——皇紀一七六八〔鳥羽天皇の御宇〕

七月より九月に至る大噴火、砂礫灰、燼田園を埋没し、震動の聲諸國に聞ゆ〔日本災異誌〕

弘安四年

一、弘安四年——皇紀一九四一〔後宇多天皇の御宇〕

六月九日、暮方、山より西黄なる雲出で、人倫草木迄金色の光となる。同夜、四ツ時より山焼出し、信州追分小諸より南四里の間、灰降り、今に其跡残り、北は山の麓まで押出し、今に其處を石とまりと云。此邊亡村多

し。〔淺間嶽大變記〕

應永三十四年

一、應永三十四年——皇紀二〇八七〔稱光天皇の御宇〕

六月四日、富士山と淺間山、叟吹〔信濃國淺間嶽記〕

永正十五年

一、永正十五年——皇紀二一七八〔後柏原天皇の御宇〕

七月朔日、淺間山、雪降。〔信濃國淺間嶽記〕

大永七年

一、大永七年——皇紀二一八七〔後奈良天皇の御宇〕

四月、大に焼け、砂石降る。〔信上變畧記〕

享祿元年

一、享祿元年——皇紀二一八八〔後奈良天皇の御宇〕

噴火〔日本災異誌〕

同四年

一、享祿四年——皇紀二一九一〔後奈良天皇の御宇〕

十一月廿二日、大雪降り積る事六尺、又は七尺の所あり、廿三日、廿四日、晴天にて、廿五日より廿七日迄時々降る。然るに、廿七日淺間山大に焼出し、大石小石麓二里程の内雨の降る如く、中にも大原といふ所へ七間餘の岩石ふりける。是を七尋石と名づけ、今に有、灰砂の降る事三十里に

及びたりとぞ。

無間谷といへるは、淺間引まはし、巖石峨々として恐しき大谷なり、前掛山といふは、燒山を隠して佐久郡に向、鬼の牙山、黒生山の間谷に、右の大雪降り積りし處に、燒石のほのほにて、一時に消えたり。又廿七日七ツ時より、大雨にて、廿九日まで晝夜の別もなく降りければ、山々の燒石、谷へ押し出し、麓の村々多く跡方なく流れし處あり、其後街道不通になりしを、近郷より出で、小石ともかたつけ、四年が間に、街道普請成就せり、今に至り、山の半腹街道筋、皆燒石のみなり、是降りたるにはあらず、其時押し出せしなり。〔天明信濃風土記〕

天文元年

一、天文元年——皇紀二一九二（後奈良天皇の御宇）

大燒（日本災異誌）

慶長元年

一、慶長元年——皇紀二二五六（後陽成天皇の御宇）

四月四日より同八日迄、山鳴大に燒上る、八日午刻、大石降落人多死數不知、此石近國へ降人死（信濃國淺間嶽記）

同三年

一、慶長三年——皇紀二二五八（後陽成天皇の御宇）
七月廿六日、噴火（淺間大燒無二物語）

噴火（日本災異誌）

同十年

一、慶長十年——皇紀二二六五（後陽成天皇の御宇）
十一月、大燒。月を越えて熄む（日本災異誌）

正保元年

一、正保元年——皇紀二三〇四（後光明天皇の御宇）
正月十三日、大燒（日本災異誌）

同二年

一、正保二年——皇紀二三〇五（後光明天皇の御宇）
正月廿六日、大燒（淺間山大變記）

同四年

一、正保四年——皇紀二三〇七（後光明天皇の御宇）
四月廿六日、大燒（信濃國淺間嶽記）

慶安元年

一、慶安元年——皇紀二三〇八（後光明天皇の御宇）
正月十四日、大燒（日本災異誌）
二月十九日、大燒（信濃國淺間嶽記）

閏正月廿六日、辰刻大火古老曰、この時大雪四尺餘雪解にて追分流失云
〔信濃國淺間燒記〕

七月十一日、大燒〔同上〕

同二年 一、慶安二年——皇紀二三〇九〔後光明天皇の御宇〕

七月十日、大燒〔信上變畧記〕

同四年 一、慶安四年——皇紀二三一一〔後光明天皇の御宇〕

二月廿二日、大燒〔日本災異誌〕

承應元年 一、承應元年——皇紀二三一二〔後光明天皇の御宇〕

三月四日、大燒〔淺間燒大變記〕

明暦元年 一、明暦元年——皇紀二三一五〔後西院天皇の御宇〕

十月廿八日、大燒〔日本災異誌〕

同二年 一、明暦二年——皇紀二三一六〔後西院天皇の御宇〕

十月廿五日、卯刻大に鳴り燒く〔信濃國淺間燒記〕

同三年 一、明暦三年——皇紀二三一七〔後西院天皇の御宇〕

十月廿日、大燒〔信上變畧記〕

萬治元年 一、萬治元年——皇紀二三一八〔後西院天皇の御宇〕

六月廿四日、大燒〔日本災異誌〕

同二年 一、萬治二年——皇紀二三一九〔後西院天皇の御宇〕

六月五日、卯刻大燒、山鳴大に響〔信濃國淺間燒記〕

同三年 一、萬治三年——皇紀二三二〇〔後西院天皇の御宇〕

二月廿八日、大燒〔日本災異誌〕

寛文元年 一、寛文元年——皇紀二三二一〔後西院天皇の御宇〕

三月十五日、大燒〔信濃國淺間燒記〕〔大變記には廿五日〕

同 廿八日、大燒〔同上〕

同九年 一、寛文九年——皇紀二三二九〔靈光天皇の御宇〕

大燒〔日本災異誌〕

寶永元年 一、寶永元年——皇紀二三六四〔東山天皇の御宇〕

- 同三年 一、正月朔日、大燒數日、不止 (淺間燒大變記)
- 同三年 一、寶永三年 皇紀二三六六 (東山天皇の御宇)
- 同五年 一、十月十六日、大燒 (日本災異誌)
- 同五年 一、寶永五年 皇紀二三六八 (東山天皇の御宇)
- 同七年 一、十一月十八日、夜、大燒、江戸へ砂降り、御檢使來る。(信濃國淺間嶽記)
- 同七年 一、寶永七年 皇紀二三七〇 (中御門天皇の御宇)
- 正徳元年 一、三月十五日、大燒 (日本災異誌)
- 正徳元年 一、正徳元年 皇紀二三七一 (中御門天皇の御宇)
- 享保二年 一、二月廿六日、四ツ時半、大燒にて、震動半時程、降灰一寸。(信上變畧記)
- 享保二年 一、享保二年 皇紀二三七七 (中御門天皇の御宇)
- 同三年 一、八月十九日、大燒 (日本災異誌)
- 同三年 一、享保三年 皇紀二三七八 (中御門天皇の御宇)
- 同五年 一、九月三日、大燒、前掛山より火玉南へ飛び、鳴り轟く。(信濃國淺間嶽記)
- 同五年 一、享保五年 皇紀二三八〇 (中御門天皇の御宇)

- 同六年 一、五月朔日、大燒 (信上變畧記)
- 同六年 一、享保六年 皇紀二三八一 (中御門天皇の御宇)
- 同六年 一、五月廿八日、晝、大燒、此日關東の者十六人、石にあたり打殺され、中一人は半死 (淺間燒大變記)
- 同七年 一、享保七年 皇紀二三八二 (中御門天皇の御宇)
- 同八年 一、大燒あり (日本災異誌)
- 同八年 一、享保八年 皇紀二三八三 (中御門天皇の御宇)
- 同八年 一、正月朔日、大燒 (淺間燒大變記)
- 同八年 一、七月廿日、大燒 (信上變畧記)
- 同八年 一、八月廿六日、大降霜 (信濃國淺間嶽記)
- 同十三年 一、享保十三年 皇紀二三八八 (中御門天皇の御宇)
- 同十三年 一、十月九日、大燒 (日本災異誌)
- 同十四年 一、享保十四年 皇紀二三八九 (中御門天皇の御宇)
- 同十四年 一、十月某日、大燒 (信上變畧記)

同十七年

一、享保十七年——皇紀二三九二（中御門天皇の御宇）

六月九日、大燒（日本災異誌）

同十八年

一、享保十八年——皇紀二三九三（中御門天皇の御宇）

六月廿日、夜大燒、黒府みな火になる、此節前掛山不殘われ、其幅一尺二寸より五百寸斗湯の平に落たる大石、立白障子の如し（淺間燒大變記）

寶曆四年

一、寶曆四年——皇紀二四一四（桃園天皇の御宇）

六月十九日、大炎上、灰降る（無二物語）

七月二日、大鳴燒、近國灰降、中にも佐久小縣一旦、煙地を這ひ、おぼろにして時を知らず、作毛痛み、秋過ぎまで度々燒、此年は別して燒け、無間が谷に甕新に生すといふ。（信濃國淺間嶽記）

同五年

一、寶曆五年——皇紀二四一五（桃園天皇の御宇）

五月廿六日、鳴動（淺間燒大變記）

六月二十日、夜大燒（同上）

六月廿九日、晴れて午の中刻より大燒鳴音雷の如く（同上）

同十二年

一、寶曆十二年——皇紀二四二二（桃園天皇の御宇）

七月朔日、晴天、四ツ時曇り小雨降る、未の刻より燒出し、申の刻甚しく、民家の戸障子を動し、暮合より鎮る体なり、此の節、淺間山燒崩れ、佐久郡滅亡といへり。大なる新山出來、前掛山より高し、淺間山より草津へ六里ケ原六ヶ村、この邊五月二十六日より、石砂降る、住居不成、立退き跡方なし。（同上）

安永五年

一、安永五年——皇紀二四三六（後桃園天皇の御宇）

七月廿三日、亥刻大燒（信濃國淺間嶽記）

同六年

一、安永六年——皇紀二四三七（後桃園天皇の御宇）

燒くる事數次（同上）

第二節 天明三年の淺間山

淺間山癸卯之變

高栗寛喬

淺間岳跨信毛在小諸城東北三里餘嶽上不生草木蓋以有火氣故也頂有大坑俗謂之窺園十二丁十間坑中常火煙焰凝浮若原野之燎然山足數里間焦石累積古老云是在昔烈火所飛也然五七年來坑中沙礫充實巨石弩張勢欲拏懼卒蓋坑口突兀爲山罅隙生煙數處去歲四月之盡喬等登至無間壑火聲燦然黑煙忽蔽四面自非商丘開不能逼近焉余於煙中隱然見之脹起數仞丹崔黃岫維石巖々硫黃之氣酷烈刺鼻不可息也因謂譬如蕩腫爲膿不得不潰豈將大發之兆乎歸以語人咸曰果然則火發不遠矣居僅二十餘日五月廿六日晌午天色晴明而忽聞轟然雷鳴乃起東北望嶽上黑煙連天鼎爵爲奇峰漸々東頽由此數々雷鳴六月十六日夜火震聲如壤牆屋十八日夜火光射天激耀疑閃電飛石驚流星引氣十丈如大紅帛人定前乃止廿三日日中雨白灰覆屋如絮霜廿七日五鼓前砰然雷震至四鼓後乃止廿九日日暎又雷震黑煙東行勢如驚濤亦似崩雲七月朔七鼓後雷鳴黑煙蓋城二日七鼓後碗礮震地黑煙如騰雲接蔚藍東行激耀上

射飛石四散石亦引氣數十百丈色如竊黑布日入乃息三日四日或一時兩發或二時一息五日夜半震如奔雷猛火燭天激耀如電灸石轉嶽而下如星雪之走屋數刻乃止六日七鼓後復熾熾燒起礮震動灰煙臻悖衝蔚藍東折坑中迸出於石飛如水雹堆積嶽上赫々炎々照耀四方激輝閃々霹靂揚光其東飛也不知幾千萬仞矣人皆惕々徹夜望嶽不能得寢臥焉七日如昨日暎益盛入夜愈盛至八日日出後大盛東北昏黑天涯黯黹屋舍搖蕩激震之甚或如大推橫打柱礎或如鉅杵上擡棟梁殆不可居老幼皆出屬目於嶽大石薄擊飛散不如其數而數百千丈間不復見他物下震上響鳴千山塔萬壑礮々俱々如天地崩裂也煙勢激耀不可名狀矣人々相視謂雖阿鼻獄熱乎豈能如之哉至四鼓大震一聲殊甚如萬雷齊發而後震動稍減然火聲尙如怒濤黑煙如湧雲飛石如風砂至薄暮乃息然後天地開朗人心始復常矣城東五里有離山山以東雨沙石玆有輕井澤驛皆板屋但西南偏有一茅屋六日夜有瓦石如甕者飛墜屋上乃破碎飛散忽焉火發延燒五十餘家其不罹災者爲沙石所填或棟折梁摧或前傾後覆無有全家矣凡雨沙石遠者少沒田園近者多壓家屋其多者深或及丈或八九尺或五六尺愈遠愈

淺亦有咫尺間深淺迥別者二毛二總二陸武藏安房相摸越後州佐渡州亦雨沙石七日八日地動固亡論其邦內武相二總參峽三越江尾勢及備筑亦皆然云此間禽獸爲隕石所擊橫道而死陷泥而僵且駭獸狂走搏噬人畜行路爲梗八日四鼓火坑迤北泥水迸落熱如沸湯疾如迅雷而漲流陸地勢如決堤黑浪滔天懷山襄陵人家樹木或浸漬或淪沒或蕩然如洗又與刀禰合流勢益暴怒左右汎溢爲之人畜漂流有浮家泛宅其中尙聞哭聲巨石浮沈如山蕩漾波上烈焰猶熾數日之外泥渾乾燥而熱不可踏大石客居地上者其大或方三四步或如數間屋經三旬而遇雨則煙起手觸之則熱云嶽東南有湯川者流於離山西沓掛驛東時漲流鼓怒水石相半淖溢於田野金水承之水色黃赤浮石蔽水泱辰居觀流沙可謂長房縮地伎倆乎哉蓋石皆爲烈火所燒透性化爲之輕也形或如蜂窠或壘罅爲奇狀皆灰色也夫芒々天地間大約一轉何所不有意者如此之變亦自天地觀之則小々焉者也哉然自人觀之則大矣哉亦可畏矣博物君子曰亘古傳記所未載焉也故敢記其大較以示子孫爾。

東照公一度縱橫の奸策をめぐらして、舊君豊太閤の幼主を蹂躪し去るや、月の入

天變地異
續出

るべき山もなき武藏野の一隅、確然不動の觀ある一城廓は成りてこゝに江戸幕府の開設を見る。然れ共、時辰回轉、時一度天明に入るに當つてや。天變地異、踵を衝いて至り、人心の動搖漸く茲に其根を萌し、年寛政に入れば、外警愈之より甚しく、國家益々多事の秋に入らんとす。彼を思ひ之を思へば、關左霸氣の消亡既に其季に入りしを憶想せずんば、あらざるなり。然り。千代田城鼎漸く輕からんとして、幕威漸く地を拂ひ、遂に其衰亡を來したりしは事實なりし也。淺岳が空前の大噴火は實に此天明年中に於て存しき。

時は、皇紀二千四百四十三年、淺岳一度人心の腐敗に怒るや、陽焰の爆發碧漢に冲し、震動の雷激耳朶を聳く。沙雨數十里外を壓して、暗黑夜陰に等しく、山嶺怒破して四圍の峯巒火中に圍まる。巨石は騰奔し、熔岩沸水は横流し、人畜大木の洪濤中に蕩流するもの擧げて數ふべくもあらず。人倫は茲に壞損し、天柱は茲に挫折す。何等の悲惨、何等の悲痛か之に如くものやあるべき。世を呪ふ巨人の狂態また恐ろしからずや。

さるにても罪あらずして此災厄に座しける數萬の生靈よ。草木よ。彼等は深

く地下に宛死して尙よく瞑目し得らん乎。吾人が幾多當時の記録を閲するに當りて、常に囚はれつるものは實に其彼等を思ふの情にてありき。今や彼等死して既に百餘歳、忠魂を弔はん爲めには忠魂碑立てども、無念の死を遂げたる彼等の爲めには何物をだも見ることなし矣、ただ夫れ亡靈にして知るあらば、今日此心を持って此記を編む吾人が誠意を諒とせよかし。いでや、これより其慘況を述べんとす、然れ共其悲絶慘絶の痛嘆は却て拙き吾人が文字以外にあらずと知るべし。

その(一)前記

聞くだに戰慄すべき、天明三年淺岳噴上の慘や、夫れ突如空隙を衝いて起り來りしものなる乎。聞説らく、其前兆既に明和、安永の頃にありきと。當時、土砂岩石の坑底に積上する事、恰も土龍の起るが如く、數年來さしたる噴火もなきにぞ、いよく埋りて、積上いよく甚しく、四五年以來は別けて其度を増し、高さ實に數十丈に及ぶや、さしもの大坑近來平地に等しく、望見すれば釜凸にして、恰も炭竈の如く、登山の人毎に、近來に大燒あらんとの聲、常に四隣を振はせたりと、古記録

體探すべ
き天明三
年

噴火の前
兆

明和六年
の登山記

に見ゆ。奇怪變じて恐怖を感せずんばあらざる也。天明雜變記の筆者、佐藤將信、明和六年を以て登山したる事あり。其紀行の一節に曰く、

『お鉢料、大坑の回り半里、之を俗にお鉢料といふより、前掛山を見上る十二三丈高しと覺ゆ』

然るに、天明二年四月八日、登山者の觀察に曰く

『此年、釜山、前掛山同高になりて、釜山東北の腹より、少し煙出る、乍去、燒出すべき氣色も見えず』

然れども、溶岩泥土、坑中に樽積して、數十丈の高きに至る、噴火の氣色見えずと雖、人目豈能く地下火山脈を洞察し得ての言ならんや。また時人、春より、煙端西方に傾く事、數度に及べるを以て、深く憂慮に堪えざりしと聞く、煙端の變遷を以て、直に其變異をトせんす。土地の習俗素より、悉く信すべからざる事のみなりとはせざれども、此事亦何ぞ其證たるに足るものなりとせんや。

斯くの如くにして、空前の大噴火は、天明三年五月廿六日の鳴動を以て、其序幕は演せられたる也。猛然たる獅子の一聲、群獸息を潜むるとかや、麓野の居民、夫れ、

噴火の序
幕

四月八日
五月廿五日
五月廿六日

五月廿七日
六月十七日
六月十八日
六月廿六日
六月廿七日

如何の慘をや嘗めし、今そが概況を摘記して、以て大噴上の前記を編まん。

四月八日、諸人登山。同月九日より焼初むと杳掛宿立札あり。

五月廿五日、午前七時頃より鳴る事石臼の如し、穩ならぬ人心、とがむる人のみ多し。

五月廿六日、午前十時頃より焼出し、大地に蕪き、噴煙天に沖して數百丈幅二三十

間程に見え、雲の峰を積むが如く、縋り綿を累ぬるが如し。直に山より東の方へ

折れて鼻田峠、鎌原村、六里が原、碓氷山、續きへ横はり、見渡すに數十里もありき。

正午過ぎて出口の煙半分減り、鳴りも靜まりたり。時に大陽曆六月廿四日なり。

五月廿七日、午後四時鳴動六時に至りて止む。

六月十七日、夜に入り大に鳴動す。

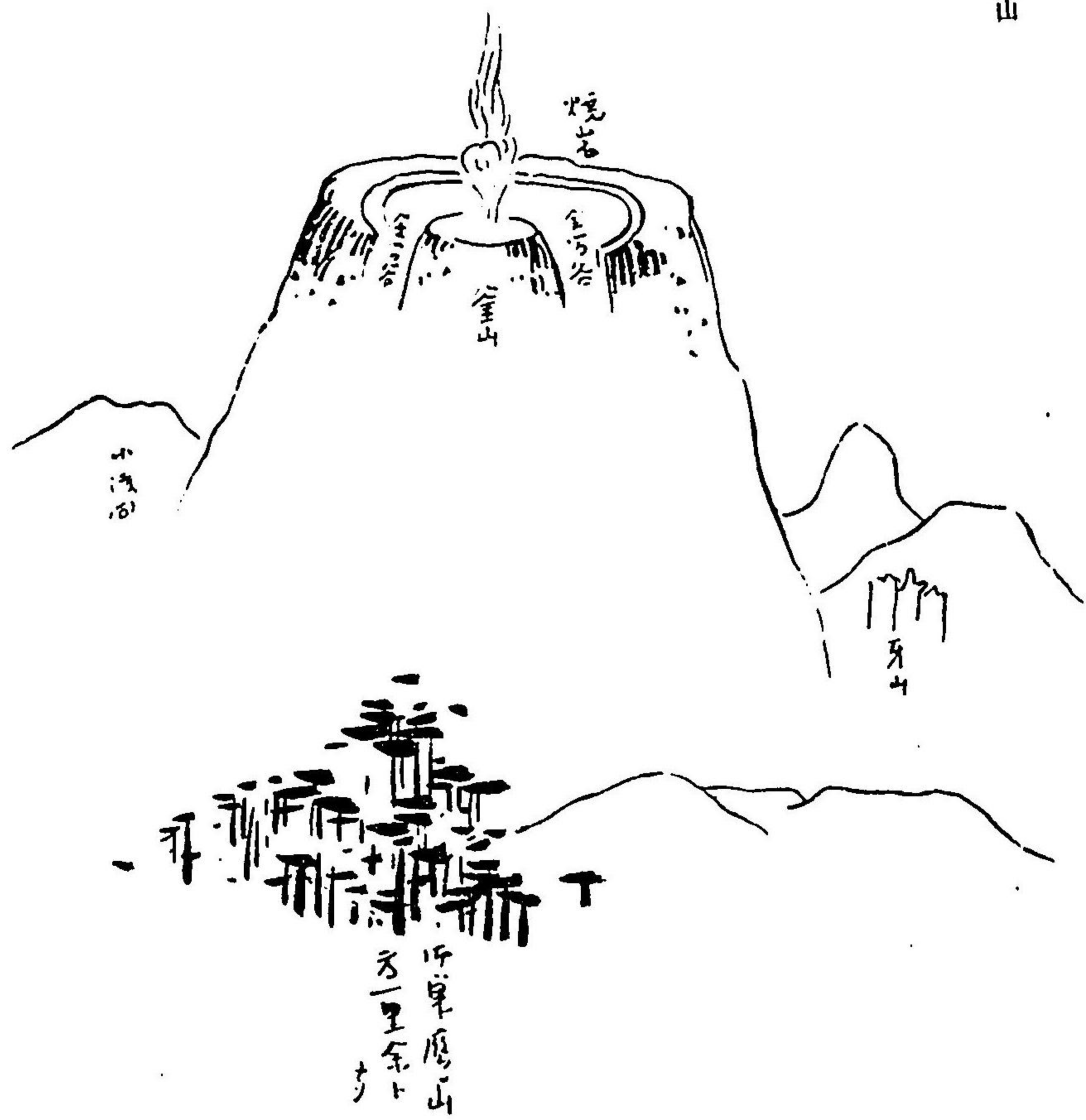
六月十八日、夜半過ぎ甚しく地響し、諸人驚愕す。

六月廿六日、午前八時頃より鳴る事割挽石臼の如し、正午迄聞ゆ、此日は煙薄く只

鳴響くのみ、諸人不審に堪えざりし。

六月廿七日、午後四時鳴り渡り、煙太く吹き上げ、東の方へ棚引き、暮合に至り、煙漸く半分となる。

北上州ヨリ見た
大噴火前ノ淺間山



六月廿八日

六月廿八日、午後四時頃鳴り出し、烟立上る事雲の峰を積むが如く天に沖し、東南へたなびきて山傳ふ。然し其頃は雨しげく折々山をかくす。晴間々々にかく見えたり。

六月廿九日

六月廿九日、晴天正午に至り其音千百の雷よりも強く轟きて大焼、五月廿六日のそれよりも劇し。

七月朔日

七月朔日(太陽暦、月廿九日) 晴天、午前十時曇り小雨降る。午後三時より焼出し、四時より五時まで最も甚しく、暮合に至り稍鎮る体なれども、雲霧覆ひて歴然とは知れず、此焼去る二十九日より強し。

七月二日

七月二日、目に見ぬ者は音にのみ聞きて此体を知らず、正午より焼出したれど朔日より弱し。又午後二時より大焼となり、昨日より強烈なり。八時甚だ強く、翌午前四時鳴り止む。此時に鼻田峠、六里原邊へは砂石降りしと翌日通過したる人物語る。

右兩日の焼は、近國を驚かしたる程にて、是より噴上は日一日と甚しくなり來れるなり、わけて五日よりは晝夜の別だもなく、五里、七里隔りたる里人は貴賤群集

七月三日

し、夜毎に見物恐評す。

七月三日、七月四日、別して焼くる事甚しく、輕井澤、碓氷峠、坂本、松井田、安中、高崎、武州兒玉郡、椿澤郡、三十四里内灰降る。

七月五日

七月五日（太陽曆八月二日）晴天正午より焼出し午後六時より夜十二時迄大燒、鳴

動強く前掛山へ沙石夥しく吹出し一圓の火となる。之を七八里も隔て、眺むるに、猶五尺、八尺、一丈にも見えけるもあり、轉々と轉びて山の腰、裾野を燒き或は破れて四方へ散亂し、クソツと火焰を立つる様恐ろしき限りなり。烟は眞黒にして練綿を繰るが如く、其勢甚だ強くして、湧き出づる釜口にて幅凡三十間、高さ百丈に上り、烟の中よりは稻妻の如き光を絶たず。烟端は東南の方へ數十里程も棚引き、奇觀譬へんにもものなし、又火口の飛音の如きは、百千の雷一度に發するが如く、凄きもの、限りなり。

夜に入り坂本、松井田邊まで小石少し降り、牛馬出づる事もならぬ程なり、實にや、午後十時よりは、轟く物音、強雷のそれにも倍し、寢たる者も驚き起き上りて眉を蹙む。黒烟は天を衝く事數百丈にして東南に靡き、其間よりは徑一丈余の光物

出づ、其様恰も火花稻妻の如く、吾妻下妻岳の邊に至りて消え失せたり。武州兒玉郡、椿澤郡の中は、晝猶夜の如く、家々行燈を點じ、旅人提灯にて往來すといふも、これ淺間山噴烟のためなり。

翌日關八州はいふに及ばず、信濃、加賀、能登、越中、越後、出羽、奥州まで白毛降ると傳ふ。

一噴火は一噴火より強烈になり行く様歷々として手に取る如くに見ゆるにあらずや。

その(三)本記

君不聞昨歲初秋信陽淺間嶽

山裂火山燒其嶺

宛如天柱摧以燃

巨石砂礫飛迸空

格澤煙焰亂漲天

霹靂劈巖撼地軸

閃電般雷幾百年

魍魎猛獸駭相觸

碧煙翠柏拔盡顛加旂

大麓百泉爲沸騰

一夜坡山又襄陵

下流汎濫渾鼎沸

蕩波勻溢氣鬱蒸

下風霾灰闇如晦

鷄鳴于時晝揭燈

士民號呼奔救死

上有隕石下涌水

皇紀二千四百四十三年

加藤景範の記文

記せよ。皇紀二千四百四十三年。時は文月の初六七、八、人生の悲惨凄慘こゝに集り、先に詩人騷客をして泣かしめしてふ淺岳は、今や進んで罪なき數萬の生靈を屠りぬ。熔岩の突發、沸水の汎濫、實に卅六ヶ村の多きに達し、老若敢えなくも千載の恨を残して亡命するに至る。噫、生民に何の罪ぞありしか。生靈に何の非道ぞありしか。數ふべからざるの少婦數ふべからざるの孤兒。道途に蠢々然として罪なき血涙に袂を絞る。岳若し靈あらば立つて之に問はんとすれども、自然は不語なり。不言なり。容姿依然として答へんともせざるを如何せん。あゝ、彼が一呼吸、一震動、如何に人生の悲惨を開展したりし乎。加藤景範は噴烟七日の暗黒を記して曰く、

凡そ、この二十里がめぐり、山のどとろく、水のどよむ、燃ゆる石の空に打舞ふ人の叫ぶ、牛馬山獸のおめき吠ゆる。こは天地の心を合せて、今や此世をつくすらんと、初めて空と空と見出せしは、九日の夕つ方なるべし。

と、其文字裡の其如何に凄々然たるものなるか、思ふに餘ありといふべし。災後二年、澤元凱は上毛に遊びて、吾妻川焦石の一文を撰す、載せて漫遊文集にあり。今茲に其一節を抄録すれば、

吾妻川焦石之記

（前略）天明癸卯七月庚寅朔淺間山陽焰暴發五日甲午火焚山嶺七日丙申大焚震動雷激沙土雨于五百里外山南數百里暗黒如夜沙雨而深三尺厥明丁酉山嶺怒破泥水突發巨石奔騰其泥熱沸流入吾妻川居民衝沒瞬息之間一掃蕩粉被災之地自吾妻郡徑群馬名和二郡至武藏中瀬焉以所聞流沒民戶凡一千八百口不下二千兩岸廣狹二百余里忽爲赤地云余聞中右記富家談所載淺間山發火蓋自古有之今夫熱沸之泥負巨石而走千二百里外是其毒民何慘蓋泥之初衝唯是號泣之聲遙與震電相合居民奔潰不知所爲泥之所及望之黑霧覆天電光閃々睹之焦石如火渾走泥土恰似銃箭之激水網之者樹倒屋壞人物皆死已而水退泥淤都是赤地廣原不見一草一木所々見磊塊之石今猶存其大者如此（下巻）

讀み去り讀み來れば情惻々として幾行の幽涙思はず潜然。榮々たる遊魂誰か

主となり誰か之を祭るべき。吾人は之より其慘狀を描かんとす。ただ願くは吾人が拙き文字裡に幾多凄慘のこもれるを諒とせよ。

(上)

七月六日
裾野人民
の避難

七月六日(太陽曆八月三日) 引續いて鳴動。午後四時に至れば甚だ強く、別て夜十時益大焼となる。追分、沓掛の兩宿は其恐ろしさにや堪えざりけん、同日未明より、屈強の若者は停まりて家番となり、家財は馬に負はせ老幼を先立て、岩村田、小諸其他近在の知人縁者を尋ねてぞ逃げ行きける。午後六時に至れば噴上愈甚しく、黒煙烈々として碧空數百丈の高きに上り、擴がりて天地の大を掩ふ。加之、烟中より發する凄まじの稻妻は、四方八面、方位の總てを盡して飛び散じ、倒るゝが如くに東南數十里に打なびく。又烟峰に伴ふ山の叫喚は、百雷一時に發するが如く、大地爲めに震動して其恐ろしさ誠に譬へんにもものなし。魍魅坤軸にこたへ、天柱碎け、地維覆はるゝとは、是を誇張といふ勿れ。

夜分の慘

夜に入りて山上猶紅に明り、烟中より飛散する火玉、火石は暫くも止まず、西方牙山の如きは、大石小石雨の如く、迸りて、恰も烟火の星下りとも謂つべく、南面の飛

狼狽野へ
んにもの
なし

石は、山傳へに轉びくゝて裾野を燒き盡し、其様實に數萬の松明燈道に並べるが如く、硫黄は燃えて天を焦し、地を焦し、夢の世にやといはんする慘景なり。かゝれば何れも「せつない時の神頼み」とやら、神燈かゝげて祈をぞ捧げける。されば夜深くなりぬとも、一人として寝ねんとする者だになく、唯呆然と庭に出で、空の様のみ打眺め、只管胸をぞ冷しける。殊に十里四方、戸障子も外れんばかりの震動には、内より重しをかけ、又は楔を入れなごしたれども、烈しく來る震動には何かは以て堪るべき、何れも其甲斐だにもあらざりき。兎角する中に、板屋の石など轉び落つる事頻りなりければ、小兒婦人の狼狽譬へんにもものなく、一同野中に集りて夜明けを待つ、止むなきに至れり。之に引き換へ、先の避難の面々は、小諸、小田井の兩道を辿り、吾劣らじと先を争ひつゝ、追ひ越し、鹽名田、八幡に到るもありたり。子を負ひ、老人の手を取り、座頭に曳き、晝中提灯ぶらさげつ、足を血にして逃げ行く様、又何時の世か見得らるべき。

七月七日

七月七日、晴、六日より燒續く。午前十時鳴動。午後二時少し鳴り止む。然れど

大石飛鳥の如し

斗樽程の石降る

降砂の証

も同刻、平尾邊より平賀、大日向等山根通り少々降灰ありしが、これより打續きて大焼となり、六時に至て甚だ強く、數千の雷霆一時に馳驅するが如く、響音地震絶間なし。上見れば古綿をはかして積上げたるが如き噴烟は、大石を伴ひて數千丈の高きに上り、其飛散する様恰も飛鳥に似たり。無間谷の如き爲に埋められて山となり、前掛山より甚だ高し、黒斑山の如きも亦火と化して、其様恰も燈籠滿の如く、盞間望むに數月を経て其色猶白く見ゆ。沓掛の東湯川の如きは、流るゝ焼石にて水を顯さず、又水は砂にて濁り、年を経て尙ほ澄むに至らぬ程なりし。夜に入り八時、甚だ大焼。烟東南へ傾きければ、鼻田峠より沓掛宿北、經井澤へかけ、離山を限り東方へ、砂石降る事雨雪の如し。中にも同夜、斗樽程の大石落ち來りて、沓掛宿、友之助といふ者の屋根を貫通し。壘を切り抜きたりといふ珍事あり。又切に下る焼石に、燃燒したる所三十六箇所、撰人足四十五人にて漸く之を防ぎ止めたりと傳ふ。大噴火既に怪事なり。怪事更に怪事を生みたるとは、是等の事なるべし。

此際に於ける降砂石は、其範圍甚だ廣く、其量も亦實に多きものあり。輕井澤は

積る事四尺余、碓氷峠は五尺余にして軒端に達す、其他山中茶屋を潰し、羽根石を埋め、坂本、横川、松井田を壓し、板鼻より高崎に至りて猶一尺余の積上を見たり、高崎より東は單に砂のみにして、江戸へは約一寸。實にや、俊明院殿御實記卷四十九、同年七月の條に曰く、

六日、(中略) この夜更たけて、西北の方鳴動する事雷の如し、七日七夕規の如し、この日、天色はのぐらくして風吹き砂を降す事甚し。午の刻過ぐる頃、風漸く静まり、砂降る事も少しやみぬ。黄昏よりまた震動して夜もすがらやまず。

前代未聞の怪事、遂に此記を爲すに至る。當時の状況思ひ知るべきなり。而して降灰は單にこゝに止らず、利根川筋、栗橋、幸手の邊二寸餘り、常陸、下總までも少々なからの降灰あり、かくて以上の範圍に於ける上州、武州は何れも、七日、八日、午後九時頃より暗黒となり、雷電稲妻甚しく鳴り閃き、萬象不明、家々燈を點じ、提灯にて往來したりといへば、黯黯たる斯箇の光景、思ふに餘ありといふべし。

されば此日も避難の雜沓實に甚しく、追分、沓掛の人々、何れも小諸、小田井の兩道を辿り、山の様子を眺めつゝ、胆を冷しつ逃げ行くに、岩村田、小田井、鹽名田も、上を

上州武州の閑蒸

避難雜沓

下への大騒ぎ、家財を荷造り、食事の用意して屋外に立ち居る事、前代未聞、恐ろし
とも恐ろし。然る處、輕井澤の人々は、從容として落付き居たりしが、七日夕方、燒
石降り來りしといふに一同の驚き一方ならず、唯一時に騒ぎ出しけり。

輕井澤の
混亂

輕井澤へは、五日、六日、兩三度に、小砂五寸餘降りけるといふに、逃ぐる用意のなか
りしは、大膽無謀の極みなりけり。七日暮合の大燒に、火石、火玉交つて降下し、廿四
五歳の男、燒石に撃たれて即死すといふに、驛内の狼狽一方ならず、提灯、松明にて
家財を牛馬につくるあり、戸板をかつき、桶、摺鉢を頭に戴きて逃ぐるあり、夜着、蒲
團、薄縁、箆を笠にして逃ぐるもあり。凡て男女の隔てなく、親を見失ひ、子を知ら
ずして、只我先にと押し合ひ、揉み合ひ行く様は、實に慘亂の極みなり。かくて、先
を競ふて逃げ行く中、桶の底へ石落ちかゝり、底ぬけて、額に傷を負ふもの數を知
らす。提灯の如きは、降り來る石に打ち落されて、全きはなく、闇さは闇く、恐ろし
さは恐しく、只足のみを運ばせけるが、やがて生土の森に着き、衆評議をぞ開きけ
る。されども今はかなはじといふもの多く、發地村へと逃げ行くに定めぬ。
されども道は不案内、殊に此夕、降り來る砂に物象更に辨へ得ず、堰溝沼などへ踏

泥川の慘
劇

み込みて、泣き叫ぶ者も多けれども、耳傾くる者だになし。他人事處か我がもの
も、苦になる荷物は皆打ち捨て、金銀なども路傍の木陰、葎の中に捨て入れて、只生
命を專一と逃げ行きけり。其處には火玉に撃たれしと、聲を限りに泣き叫び、此
處には石に衝りしと、悲鳴を擧げて叫ぶ。混亂實に名狀すべからず。

輕井澤より一里半行きて泥川、といふ流あり、此頃日々の降雨にて、水嵩甚しく増
し居り、闇夜の越瀬も知らぬにぞ押合ひ、揉み合ひ落入りて、諸人財寶を流す事夥し。
茲に輕井澤に布屋佐治右衛門といふ者あり、衣類負ひたる馬の中荷に、四文錢二
貫八百文を入れけるが、川の越上りにて打ち落したり、馬子驚き立ちて搜索せん
としたる折、茶碗大の火玉一個、小鬘をすりて落ち來りければ如何に尊き金ぞと
て、我が生命には替へられじとて逃げ去りきと、又同所に八郎兵衛といふものあ
り、家財を負はせて川を渡りけるが、馬匹川の中途にて打ち倒れければ、荷物は其
儘に捨ておき、漸く馬のみ引き上げて逃げ行きしとか、これにて時人困苦の有様
は畧知り得べき也。

發地村民
と逃亡

かくて、漸く發地に辿り着き、やれ一安心と息をつきつゝ、安堵の思をなしけるが

六里の山越

哀れやそれも暫しの夢、一天明けて伺ひ見れば、早や此村も其大半は逃げ散り果て、空家ぞ多き。疲れ果てたる身を以て、又行く事も出来ざれば、留守宅を捜して粥など炊ぎ、漸くの事に生命を繋ぎ、志賀、香坂へとて山越しをはじめたり。此處も不案内なる六里の山越。跣足を血にして走りけるに、山坂多く熊笹など繁茂し、剩へ、鳴音岩石に響きて頭より石火矢を以て送らるゝ心地、此節も親子の見境なし。漸く香坂新田へ下り着けば、こゝに初めて生きたる心地。然れ共、大勢の事なれば、思ふ様なる食事など到底出来得べくもあらず。

發地村へ大石ふる

又境村、馬越、馬取、萱、發地、上下、狩宿、塩澤、油井、廣戸、草越、茂澤、梨澤、久能、面替、兒玉、右十、六七ヶ所の人々は、七日の晩の鳴動、火玉に、皆逃げ出す。然るに上下發地へ僅に石十二三ならでは降らざりければ、左程に驚かざるものもありき。中にも下發地村、幸右衛門といふ者、兄弟言ひ合して、村方残らず逃ぐるとも、吾等兩家は逃出すまじ、古來大燒數度に及べども、此地に火石など落ちたる事を聞きたる例なし、といひける折柄、前庭に一升椀程の火石飛び落ちて、藁稗に焼え付きければ、兄弟之にて膽を潰し、家内残らず引連れて香坂に避難し、右の趣物語れりといふ。

忍び難き避難の亂狀

此度の避難は其範圍中々に廣く、西は八幡、南は白田、清川邊迄、五里七里の道を辿りたるものにして、殊に一生懸命の競争なれば、十人十方に分れて他人の事は知るべくもあらず、又の會時も期し難きに至れり。然れども、更に忍び難きは病者が避難の有様なり。産婦の如き其一なり、又此節流行したりし疱疹患者の如き其一なり。其等の人々の苦難中々に筆も及ばず。茲に塩澤村に糸右衛門といふ者の男の子三歳になるが、疱疹の重くして避難の途中にて亡せたるあり、さるに此場合如何ともする能はざるは當然のこと、其儘道に捨て置きて逃げ行きけりとかや、我血を與へし子なれども、かくも決意を餘議なくせられし父母の心や如何なりし、其夜の夢や如何なりし、かくて翌日は行かれず、翌々日に至り、漸く辿り着きて之を埋めしてふ慘事あり。行きて我子の屍に手を觸れし父の鼓動や如何なりし、哀れ深き事といふべし。

御影御役所の註進

かくの如き有様なれば、午刻、追分宿役人、御影御役所へ註進す、此節、淺間山大燒震動し、家内人數散亂して往還御用差留候段、口書を以て訴ふ、又同日、午後一時、同宿問屋、年寄能出、御老中御證文、繼來候處、差支の旨訴之、御糺の處、無紛御證文、小田井

宿へ持返すといへり。又午後二時に至ては、輕井澤宿役人の註進あり、宿内へ火石降候に依て、御用書並御高札外し取り、戸板を担ひ笠にして野邊へ持出し、漸く土中に埋候處、宿内へ火玉落、二三ヶ所燃え付きけれ共、消防も中々及ばず、男女逃散と申上ぐ。又沓掛よりも、砂石降り恐しき有様、續いて註進したりといふ。右につき、御用狀等御影新田御役所より、江戸表へ脇道差立添書したりといふ。曰く「和田村、安原村、香坂村、香坂新田、上州市、荻本宿、下仁田市、宮藤岡より本庄宿夫より宿々江戸」

七月八日

七月八日(太陽曆、八月五日) 晴天、同曉午前四時より甚しき大焼別して、八時より十一時に至る三時間は、古今未曾有、前代未聞の大焼。鳴動の激烈なる事、千萬の雷一度に轟くといふも愚なり。總身唯是恐怖の塊。痛烈なる響音は捧を以て胸先を突き倒すが如く、何處ともなく來れる聲音は「淺岳崩壞、佐久郡滅亡」の叫びにてありき。中にも午前八時、トントン。ピチピチ、火炎黒煙相交錯して亂騰し、勢猛烈冲天實に數百丈。閃く電光亦凄絶の極。加ふるに岩石火玉の投下頻に、恰も群雁の舞ひちぎるゝが如く、落下の音響は天を震はし地を動かし、山勢爲

淺間崩壞
佐久郡滅
亡

めに一變せんとするの趣あり。實にや。此音南は甲斐、遠江、尾張、伊勢、五畿。北は加賀、能登、越中、越後、佐渡、西は中國、東は武藏、相模、上下總、常陸、奥州、白河、二本松等、數十里外の人心を刺しきと、越中の賣藥師茶木文三郎の談に、此音富山邊にては石臼の如しといひ(雜變記)。山城、玉水邊にては、講釋の席甚しく震動し、其日の講筵爲めに半にして休みきといふ。又尾張名古屋藩にては、是は如何なる變事にやあらんと、諸士残らず殿中に詰めたりといひ、其他日光、江戸は戸障子爲めに震動し、山を距つる敷里なる香板村などは、煤け障子悉く破れたりといひ、かれこれ以て當時の狀況を知るを得べき也。されば其麓なる追分、沓掛などは、戸障子の大半は外れ、屋根石の轉び落つる事甚しければ、如何に大胆の者なりとて、午前中に一人も残らず逃げ失せけり。(口繪の古書參照)かゝる有様なれば、鹽野、小田井、前田原、御影、新田、平原、八幡、柏木等の村民も、午前十一時までには大半逃げ出す始末中にも、御影役所詰手代衆の如きは、豫て七日より書物を持ち運ばするやら、土中に埋むるやらして、和田村名主八郎右衛門方へ引越すといふ始末、實に狼狽を極めつるなり。かくの如き有様なれば、其他の村

御影役所
引越

々にても如何はせんと諸氏の周章てたる事、理といふべし。

此日の避難は、其範圍の廣きだけ、それだけ其難沓も亦甚しく、夜明け果て、猶行燈を下げ、財寶を捨て、斧をかたげ、小桶など脇挿み、桑原々々と、口々に念佛を交せてぞ走り行く。願れば、黒煙天に漲りて、東方殊に甚しく、東北より東南の方亦夜陰に等し。暗黒の氣天地に充滿し、電寸隙を洩さず飛ぶ。輕井澤より來れる者は哀語して曰く、輕井澤へは火玉落ちければ、早皆焼失すべし。追分、沓掛なども焼失疑ひなしと。かれこれ、驚き騒ぎたる事夥しく、世は是唯「物騒」の二字に歸したりといふも過言にあらじかし。遁逃の村々通計四十餘ヶ村とぞ聞えし。斯の如き有様なれば、先に追分、沓掛などの人々が唯一の避難處なりし、安原、香坂、香坂新田の如きも、既に着物雜具を付け送り、老幼は先づ近村へと逃げ退く。其人數總て五十餘人、平尾、横根も亦同じ、かくて一驛は一驛と次第に其數を増し、八日午前八時より同晩に至るまでに、志賀村に六百十餘人、安原村に二百五十人、香坂村に二百七十餘人の群集なり。其他岩村、小諸に至ては宿泊するもの數を知らず、鹽名、内山、平賀の方面は右に準じて知るべきなり、而して、それより更

遁逃の村
四十餘村

火玉
鎮靜

たくる迄は、集ひ來る者引きも切らず、其難沓實に一方ならず。

されど十二時よりは、流石に猛烈なりし噴煙、噴石も追々鎮靜の体にて、最早火玉火石の落つべき様にも見えざれば、家内残らず逃げし者、又は財寶衣服を野中道脇に捨ておきける者など、互に言ひ合せ、恐怖の念を抑へつゝ、立ち歸り見るに、追分、沓掛兩宿は、家居無難。然れども、發地原、其他野道に捨ておきたる荷物は、盜人の爲めに大方持ち去られたりき。當時人は語りて曰く、逃げ残りたる者にして野中の捨荷をあさり歩き、價貴きもののみを拾ひ盜み、それにて富を重ねしものありと、淺まし世や、淺まし人の心や。死して尙財寶を掴まんとはするか。其心根こそ惡みて、なほ餘ありといふべき也。

輕井澤の
大膽者

輕井澤宿の人々は、九日言ひ合せ、漸く立戻り見るに、逃げ退きて火石に打たれて死なんよりは、我家に在りて果てんに如かじと、止り居ける横道者、忠右衛門、與七、五兵衛等、都合三十餘人、中に武家方大切なる御用荷物有之ば、假令命は捨つればとて、逃げ退かさりし者、何れも無難なりしかば、大に其先見を誇りたりしと、然れ共、火石火玉の被害は到底之を免るべくもあらず、同所喜八の子、成次郎、行年廿二

燒石に打
れて即死

歳、昨正午茶釜大の大石に首を打れて敢えなくも、即死したるを始めとして、其他の手負者甚だ多かりし。又火玉より變じて火災となりしは、表家三十五軒裏家十七軒。砂石積つて潰れたるは、表家二十七軒裏家五十五軒、外に破損家四十八軒、本陣なども其中にあり。

降下の火
石

空中數里を飛翔したる燒石が、如何にして火を放つに至りたるか。當時の記録は語つて曰く、右火玉といへるは、青石焼けて火となれるもあり。多くは硫黄百沸しみたる輕石に、火燃えつきて吹き出すなり。落つれば皆破れ碎けて、其より火焰出づるにありと、又曰く、七日暮方より落つる大石は、三升樽、五升樽程もあり、八日巳の刻迄に斗樽程の石交り、又輕き砂石あれども、一尺七八寸、三尺程、屋根に積れば、古き屋根は皆潰れたるなりと。實況を知らざる吾人は、只之を聞きて當時を臆想するに過ぎず、然れ共數里を飛びたる石の、尙然れるを思ふと共に、今日麓野に生活する吾人の地を思へば、特に耳を茲に傾けて其慘況を憫ふの情實に堪えがたきものある也。而して記録は更に語つて曰く、此度淺間山より焼出したる燒石、皆白鼠色の輕石なり、焼けたる故の輕石にあらず、其邊蛇ばめ、深はりな

避難民の
歸郷

どの輕石に異らず。自其土地淺間の釜底にも生じこれあるものと覺えたりと、村々立退きたる人々は、十日過迄居て立歸る。中には廿日、卅日を越えて歸るもあり、これ一は噴火後の様子をかがひ居たると、一は家族の寄せ集めとに思はざる日數を要したるとによるなり。中には、壁一重隔て、家人の居るをも知らず、二三日中たづね廻れる人もありける次第にて、殊に、飯も、女などは、これ幸と逃げ行きて、其後をくらしけるものもありとぞ、あはれ、淺まし人の心の心かな。かくて漸く家内引き連れ歸宅して見れば、其乱狀實に名狀すべからざるものあり。歸宅はすれど暫くは手を下すべき様もなく、呆るるより外はなし。殊に降燒石の厚きため、用水悉く埋れし輕井澤の如きは下は五町上は四町餘隔りたる所に少々の出水あれ共、三人も一時に汲めば忽ちにして盡く、さりとて山より流れ来る水は、三十日に餘りての泥水、手足を洒すさへも用ゐられず、涙の外はなきこの慘狀、二十里四方の村々、農人は耕をやめ、商人は業を捨て、只煙をのみぞ眺めつゝ、幾日も暮す、哀れにあらずや。

以上は、是れ當時南麓に於ける人民が困苦の狀態なり。然れども、被害何ぞこゝ

被害一般

に止らんや。一天黒煙の蔽ふ所、砂石必ず降下して諸民を苦しましむ。吾人は更に其一般を叙述せざるべからず。

鼻田峠

鼻田峠 淺間山の東六里原鼻田峠は、上州大笹、草津への街道なり。此處に夏秋水茶屋あり、此度の降砂石に埋れて、ただ一尺程を顯はす、降りたる厚さは八九尺なり。

輕井澤宿

輕井澤宿 八日晝過ぎて見る處、宿内椽より高き事二尺餘の砂積り、兩側の屋根より鉄を以て掻き落すに、往還宿内七八尺高く、家毎に下り坂、石階を以て出入し、二階出張の格子に馬繫きおく様大雪の積りたるに宛然たり。天明雜變記の記者、佐藤將信は記して曰く、予八月十二日碓氷嶺熊野社へ參詣の節、往來にて二階座敷の客を通りながら格子より見えけるなりと、以て其當時の様も知らるべき也。

碓氷嶺

碓氷嶺 八日朝になり、逃ぐるにも尙恐ろしく、身命は神に任せ、各最寄に集ひ居けるに、こゝにも降砂甚しく、熊野權現は御社棟のみ出で、他は埋み果てたる有様なり。權現宮居の廻に、漸く三十四五坪の砂石を持ち出して捨てたり、或人其

山中茶屋

堀口を検し見たるに、三尺五寸ありしと、又降りたる時は凡四尺餘もありて、末の小宮は一社も見えざりしと、かゝれば翌日より、社家御師連相集り、砂石拂にて清めたり。此度の被害は、古家四五軒潰れたるのみ。

洞峰茶屋

山中茶屋 砂石積る事四尺餘、屋根より落ちたる石は、軒端へ届かん有様にて、爲めに二軒潰る、九日朝より何れも逃出す、同夜香坂新田與四右衛門方に十六人泊り、四五日過より追々立歸りし。洞峰茶屋 同じく逃げ所なく、其儘届けるに、木々の枝、皆打ち折れ、谷々埋れ以前の貌處によりては大に變じたるもあり。されは草木一葉もなく、青きものを尋ぬれども見えず。禽獸も亦食に飢えて道路に倒れ、名にし負ふ羽根、石の難所も埋れて、只雪の朝の如し。殊に其頃は雨繁くして度々の出水に、道中の砂山堀り崩れ、難場至つて多く、普請せざる中は牛馬は勿論、撰人足さへ、漸く五六貫目を背負ひて通り得るに過ぎざりし。

中山道筋

かくの如くにして、輕井澤より中山道筋桶川邊迄の田島、一面に平地となり、草木残らず埋められ、立木あれども葉なく、竹は雪折の如くに枯れて、青葉なし、只元と

して雪の朝の如し、猿狗、鹿の類なども亦石に打たれて死せるもの甚だ多く、其屍川へ流れ出でたるを見るに、体に毛といふものなし。たま〜生残りし諸獸諸鳥と雖も食なくして遂に餓死するに至る。あゝ、淺岳が睥睨する所の一帯の地や。萬象一として危害を受けざるなく、一として生物の色あるなし。悲惨も亦極れりといふべきかな。

坂本宿

坂本宿 六日、七日砂石降り續き、七日の朝より大雪の如く、次第に屋根に積り積りて潰家多し。若き者共は、えんざ、木鉢、蒲團などを被り、屋根に上りて掻き落すに、凡四尺余道中は爲めに砂石一丈餘の堆積を見る。晝夜提灯松明にて立働くに、震動雷電益々甚しく、人々生きたる心地だになし。されば一同一度は、避難せんとはしたれども、關所にて差止められて遂に果さず。止むなく強き家を見立て、寄り集ひ、只神佛に祈をぞ捧げける。此地も用水埋りて水一滴もなし。此度の被害潰家表十二軒、裏七八軒、焼失二軒。

妙義

妙義 山町共に砂石少しく降りたれども何事もなし。

松井田宿

松井田宿 砂石二尺余、古き家は潰れたるもありしかど、怪我はなかりき。女は

火山毛降

悉く逃げ去りたり。此度の被害、潰屋裏屋五十餘軒、松井田附十九ヶ村の内、五ヶ村無難、坂本宿附三十九ヶ村残らず砂石降る。

降下の砂石は雷に右の諸宿を壓したるのみならず、上州の南部なる、下仁田邊へも降下あり、稍之を北にして、吉井、富岡は五六寸積り、一宮、藤岡邊も處によりては六七寸あり、更に之を北にしては、安中、板鼻、高崎一帶の地一尺餘積り、倉賀野より新町、本庄、深谷なども右に準じて七八寸の降下あり、又前橋近傍へは白毛降る、基一本にして枝三本五本もあり、中には肉つきたるもあり、長さ五寸、七寸、尺位のものもありとは古記録の語る處なり。而して其餘勢は更に延び行きて、秩父熊谷、蕨、板橋、江戸を過ぎ、安房、上總、下總の遠きに及び、更に其餘波は遠く奥州二本松にも及びたりといへば、以て其猛勢を逞しうしたるを窺ひ知るべき也。降下の砂石實に以上の如くなれば、中山道筋、一面の慘狀實に目もあてられぬ程にして、只天變の恐ろしきに呆然たるのみなり。當時の記録は更に吾人に談るに左の數節を以てす。

田畑の荒

輕井澤より新町邊まで、通り筋より双方見渡す處、田畑立毛残らず埋り、山々の木

々は野火焼枯に異らず、竹木雪折の如く青葉なし、一面に鼠壁を見るが如し、然るに八月下旬に至り、松井田邊、梅、桃、櫻などの花、歸り咲きの如く開き、又は露發生す、時ならず、何も怪しき事なりと諸人恐れ合へり。されは此邊の田畑なか／＼容易には立歸りがたく、止むなく他參の願も多かりしと聞く、殊に牛馬など皆引き出し、呉れるといへども、貰ふものなく、詮方なければ野原へ繋ぎおきて、望の者へ渡したりとぞ。又松井田より輕井澤までは、人馬繼をなす事能はず、蓋し、空家のみ多ければ也。これが爲め荷物は、下仁田通り香坂を経て岩村田へ出で、或は追分より、本宿通り、入山通り相對にて、人馬賃錢定らず、追て調査の上定むべしとて難儀なる事いと多かりし。

草木全く
枯死

妙義山の杉は生ありたれども、松は残らず枯る。其外諸木、心は枯れ、枝は生たり、松井田より高崎にいたる此邊一帶の地、竹皆枯る、翌年に至り筍出たれども、砂石厚き處は出でざりき。藤岡邊竹半枯る、蓋し折れ痛みて枯るゝなり、諸木翌春に至り檜、榎等芽を出したるもあれど、老木は多く枯死す。坂本、輕井澤、碓氷嶺などの山は立木九分枯る、爲めに何れも冬の景色をなし、淋しき事いはん方なし。

されば當時豊富なるものは薪位のものにて、五七年も過ぎて諸木朽ち腐るものあれば、木材の値爲めに貴しと。

あゝ、慘憺たる斯箇の光景、眼前に彷彿たるものあるにあらずや。吾人は思を一度當時の人心に及ぼす時、察するに堪えたる或情に囚はるる事ある、豈又やむことを得んや。而して石砂の降下實に以上の如くなれば、道路の如き亦險惡となる事、自然の勢なりとす。今試に二領主が此間を通過したる消息を記して以て諸君と共に當時の慘景を偲ばんと欲す。

七月六日、小笠原相摸守、江戸發、通過の節、道々砂降り至極困難なりしが、漸くの事八日の夜、松井田到着の所、以上の有様なり、詮ん方なく十四日迄逗留、然れ共何時まで留らんも知れざれば、十四日未明を以て出立す、碓氷山嶺を歩行、手人を供にて越す、同日鹽名田宿泊。此節千曲川橋落ち増水なりければ、此處にも十八日朝まで逗留、荷物乗下等は松井田在の者を備ひて請負はせ、一宮通りにて香坂峠を廻り、岩村田まで一駄につき金一兩宛にて持送る、扱鹽名田宿へ着、山道十四五里、行李二個を國附にして請負の者も損あり、馬も半分は道に捨て、戻りたるも

道路險惡

小笠原相
摸守通過

あり、これは山道故、一駄仕方二駄三駄になしたるがための損と、砂石降りたる處は、牛馬捨置にも仕度き折柄なれば也。

小諸領主
の通過

同六日、小諸領主江戸發駕、深谷宿着、甚しき荒につき二日逗留、十日に板鼻迄、碓氷昨前、宿々川々差支あり、て十五日まで逗留、十五日に松井田迄、十六日は好天氣なりければ、小諸へは夜の八時着城。荷物は領分川東村より松井田まで駄曳き参り、才領附添ひ、香坂を山通り四五日過ぎて着す。其後降雨屢あり、碓氷山中灰砂、輕石押流し、道の形日に日に替り容易には通りがたしとぞ聞く。江戸小諸間の里程は僅々四十二里に過ぎず、一日八日を歩すれば六日ならずして着す、一日七里を歩しても六日にして足る、然るを今度や二倍の日子を費して漸くにして達する事を得たるなり。困難の状思ひ知るべき也。

以上を以て見れば、淺岳が噴上の事如何に猛烈にして、蒼生が苦難の如何に痛烈なりしかを察し得べく、又如何の鳴動と、如何の降灰砂とが地上の物象に如何の變化を興へしかを覗ひ知るに足るべき也。

山崎直方は理學士なり、多年淺間山の研究に志をよせられたる人なり。同氏は

這般の鳴動、地震、噴出物に關して研究を公にせられし事あり、今其一節を左に引用すべし。

鳴動 大山破裂の際にありては、通常地震及鳴動を伴ふものなり。天明の噴出の如き、其勢極めて激烈なりしかば、之に伴ふ鳴動の如き亦極めて甚しかりしが如し。舊記皆之に擬するに千萬の雷霆を以てし、又石臼の如き地響きすといふも、其鳴動の緩急性質等に就ては、充分之を詳にする能はず。唯其録する所を見るに、鳴動は極めて遠距離に達せしもの、如く、關東諸州は素より論なく、東海諸國、尾張、美濃、近江、伊勢、畿内、播磨より、西海道の某地に於ても亦之を聞きしといふ、江戸にありては、八月三日(陰曆七月六日)午後四時前後より、西の方向に當り鳴動を聞き、翌四日猶甚しかりしといふ。

地震 火山破裂に隨伴する地震は、其破裂の激烈なる程には、激烈なるものにはあらざるが如し。普通の大地震と稱するもの、如きは、却て其原因火山にあらざるもの多きは、已に一般學者の信する所なり。淺間噴出に伴て起りたる土地の震動は、十分の記録なく、其詳細を知るに由なしと雖も、山麓の村落に於てすら

地震の爲め家屋の壊倒せしものあらざるが如し。

上野武藏の各所(或日江戸に於て)に於て戸障子の外れたるものありといふ。されど其震動なるものは土地の震動なるや、或は大氣の震動なるや之を審にする能はず。通常郊外にありて砲兵の演習するや、其砲聲より生ずる大氣の震動は、猶市街の人家戸障子に震動を及す事あるは、吾人の親しく経験する所にして、淺間火山の破裂の如き、其鳴動の激甚なりしことは前述の如し。從て生ずる大氣の振動は又甚しかりしなるべし。彼の戸障子の外れたるが如きも、直に之を以て地震の結果と見做すべきにあらざるべし。

噴出物

噴出物 火山礫、火山灰等は時と土地とを異にして種々の差異あり、天明淺間の噴出せるものは疎鬆にして、海綿状の空胞多き輕石にして、其色は大低暗灰色より多く灰暗黄色のものにして、又間々灰色にして且玻璃質のものあり。噴口を遠からざるの地にありては、豆大栗子大のものを降し、漸々其大きさを減じ、最遠隔の地に飛散せしものは、即前者の細粉たる灰塵なり。今日淺間四邊の地に於て此等の噴出物は、地表の上部に一帯の層を造りて露出するは、信越鐵道の羈客が、上

州安中邊より碓氷峠を踏へ、追分原を横貫する際、線路の截断面に於て之を認むるを得べし。此他又所謂火山毛を飛ばし、其他尙異種の岩石等を噴出したるやも測られずと雖も、今日にありては十分に之を知る事能はざるなり。

五月廿六日、最初の破裂以來、屢次灰塵を飛ばせしも、其最も甚しかりしは最後の數日にありしや疑ふべき餘地もあらず。其噴出物は風向の爲に大低之を東方に飛散せしめ、最後の數日に至りては信濃は勿論、北陸、奥羽の地方に、火山毛及灰を降下したりし事既に吾人が記載したる處の如し。

(中)

以上叙述したる所は、是天明癸卯歲に於ける酸鼻境裡の一般なりとす。然れども、こは唯單に淺岳が陽麓に於ける當時の状況を物語りたるに過ぎず。若し夫れ一度眼を北群馬の野に放つあらば、其處にはいふべからざるの慘いふべからざるの凄一時に開展し來り、唯慄然として卷を掩はざるべからざるものあるべし。古人が所謂「筆舌の及ぶ所にあらず」とは、蓋し當代人士が記すに餘りの慘狀なるを証するものにあらずして何ぞや。太陽曆の指す所、八月五日は實に

北群馬の
慘狀

最慘最凄の演劇日にして、彼の洋々たる坂東太郎が走る所の兩岸其處に生息する蒼生は、今より百二十年以前に遡りて、彼等の祖先が罪なくして、生死の巷に彷徨したりし、最大悲痛の紀念日に相當するを思はば、果して如何の感慨をか懐くべき。明治戊申八月五日、淺岳早曉より鳴動を開始し、吾人裾野の人士をして額を蹙めしむ。然るを况んや、目の當り灼熱せる熔岩、強烈の威を逞しうして、人畜を殲滅したりし現状を目撃したりし者の心情や果して如何なりし。吾人豈よく此間の消息を傳へ得べしや。

地上幾多の山岳はあり。地上幾多の活火山はあり。然れ共我が淺岳をして今日之の如く知名のものたらしめしは、實に天明の異變即是也。而も一方南麓に於ける人畜の危害も擧げて其原因の一に數ふべしと雖も、其大半は實に彼の熱岩迸流の怪擧にありとせざるべからず。其猛乎として、人畜を蕩盡し去りたるもの、彼の「當年を説く」てふ語の起りし所以、萬人の等しく認めて以て空前の大噴上となし、爾來茲に斯箇の盛名を擅にするに至りたるものならずんばあらざる也。

淺岳が知名のとなりたる原因

さなり。是也。是也。而して吾人の筆未だ茲に至らずと雖も、是豈何ぞ其郷關をのみ叙せんとするの偏意にあらんや。吾人の淺岳を好愛する一日の事にあらず。而も其淺岳の歴史をたづねんとする亦一日の事にあらざりし也。即稿を改めて茲に其梗概を物語らんとする也。

七月七日(太陽曆八月四日) 山麓「石留」(いしどまり)と稱する地點まで熔岩を押し出す事三度。それを望見したる鎌原村民は、先年數度の迸出に考へ、よもや人畜を冒すが加き事はあるまじと、唯火石の降る事のみを打案じ、土藏、岩穴などを心掛けおきたるに過ぎざりし。

七月八日 前日來の鳴動を繼續して一刻だも止まず。麓野の人士爲めに生きたる心地もあらざりしが、曉に至り別して天地を震動し、家屋森林爲に潰る、ばかり、年經し大木の如きは、何れも挫け折れ、神社佛閣の塔碑など揺り碎くる事頻りなりければ、人々、物騒々々と唱へつゝ、神佛に祈禱する事怠りなかりし。然るに此物騒は單なる物騒にてはあらざりき。遂に朝の八時といふに、土砂冲天に舞ひ、火石打上げらるる事實に數十丈「宛如天柱摧以燃」。巨石砂礫飛迸空。格

天地爲めに統一を失ふ

熔岩流椰の林を掃ふ

六里原に汎溢

椰の御林

澤煙焰亂漲天。霹靂劈巖撼地軸。閃電般轟幾百年。魍魅猛獸駭相觸」の光景凡そ時餘に亘り、天地爲めに統一を失ふに至りしが、忽にして沸騰せる泥流、猛然として山の北方を破壊し、一時に怒と六里が原の草木を胃し、次いで灼熱せる流岩を放溺し來りし也。當時淺岳の北腹にあたりて一帯二里に亘れる深林あり、往古より未だ一度だも樵斧を入れず。幹の大なるもの實に五六圍許、巨木亭々として雲を衝くものあり。里俗之を稱して「椰の御林」といふ。破裂は實に此近傍に起り、猛烈なる勢を以て先づ山の表皮とも稱すべき部分を破壊し、碎岩泥土宛然洪水の決するが如く、椰の林を一掃し盡して其根株を抜き。巨木大樹泥水の中に盪ふて、六里が原に汎溢したるなり。加之、次いで來れる熾熱の熔岩も亦北山腹を覆ひて之を山麓に注きたる也。

初め此椰の御林は、大木年々空しく朽ち果つる事の惜しきまゝ、吾妻郡某々等數人の出願により、年賦にて伐採すべき運びとなり、諸國に渡り、柚職を募集し、柚小屋數棟を林中に建築し、さて證書受領にと罷り出でける其間に於て樵夫ならぬ熔岩流は、瞬く暇にその大木を盪盡したりしなり。

狩宿新田
にて望見

釜山分裂

凄惨の活
畫

此時に當つて、之を遠く狩宿新田にて望見するに、其様恰も川霧の如く、幅一里、長さ二十丈に亘り、豪壯なる姿を以て、淺岳より川筋に連続し、其處殊に鳴動するを覺えたり。此日薄曇りなれども、降雨の様も見えざれば、人々只々淺岳の噴煙彼方に落ちしならんとぞ思惟しける。是即熔岩沸水、釜の北縁を切つて押し出し來りし其時なり。雜變記に曰く、一山を押し上げ、釜山五間、三間の割目數多、中にも北方腰、數百個所、八重十文字、此割目每より泥石吹き出し、殊に釜の北東の方、燒崩る程にて、御巢鷹山方一里餘、殊の外大木あり、是を押し破り、一の小澤を埋め、矢を射るが如く、眞一文字に押し出せしと見えて、鎌原村を初め、暫時に廿四ヶ村不殘、其外川邊村々數多の人馬流失したりと。以て當時人心を冷したりし、慘狀の端緒を窺ひ知るに足るべし。又妙義常應院も、湯治として、草津に居たりし時、八日十時頃、淺間山、北東に向たる處、凡三十五六間程の穴に見へ、千曲川の幅程二筋に分れ、泥押し出したる様を見たりといへば、是亦如何凄惨の活畫なりしや、は思ふに難からざる處なるべし。

斯くて、椰の御林を一掃したる熔岩流は、幅實に二里一滄千里の勢を以て六里が

鎌原村壊滅

原を猛進し、末梢分れて數條となる。即其右翼なるは應桑村の西方を掠め、左翼なるは大笹村の東邊を略し、而して其中堅は直下に鎌原村を衝きて吾妻川に及ぶ。其鎌原村を畧せる時の如き、水、燒石、泥、火と共に煮ひ乍ら狂ひ來り高さ何丈といふを知らず、かくの如くなれば見る間に全村壊滅の悲運に會す。讀者機あらば至つて其遺跡を弔ひ見よ。然らば村の西方に方つて一小荒堂宇を認むるなるべし。石級僅に十六級也。吾人嘗て巡廻して此地に至るや、里人吾人に語つて曰く、天明噴出の以前にありては堂宇は高く小丘の上において、階數實に百二十餘級也。然れ共石室、土藏を心掛けたる里俗何ぞ其災害を豫期すべき。泥流俄然として來るに及び、匆皇難を此小丘に避くると雖も、其遂に玆に及ばずして泥流中に葬られたるもの總て五百人と。堂前の石碑空しく遺恨を千載に止めて、徒に遊子の血涙を絞る。今試に燈の高さを一級約四寸とし、埋没されたる級數を假りに百五級として計算するに、其高さ實に四丈に餘る、之れ即泥の深さ也。此度鎌原村の被害家數百五十二軒、人數六百五十七人、中五百六十四人流失。然らずして生き残りたるものと雖も、火石にて手足を焦し、熱湯にて生氣を失ひ、

泥水湛むて數里の海なる

泥流の幅四里

のみならず、親を失ひ、子を殺し、殊に家財を持ち出さんとしたるは多く、若者なれば、これらは何れも浚はれ行き、残るは老人、子供のみなりしとは、聞くに涙の種なりかし。

裾野六里が原の盡くる所は、即吾妻川の溪谷なり。(吾妻川の源泉は、淺間山麓の西なる、榛敷山の陰にあり、東に注いで、田代村の北なる山の澤々落ち合ひ、四阿、白根、兩山の間に流し、東に注いで、新屋、結壁の所、吾妻峽、流となり、榛名山の北麓を廻り、釜川驛の東に至り、利根川に合す) 泥流一度此沿岸に至るや、河流を横断して之を堰き止め、水を湛えて山より山に及はしめ、鎌原より數里の間を湛えて泥海と化せしめたり。此處に橋あり、羽根橋と稱し、長さ十八間、深さ六尺許、然るに水、橋上を冒して高さ事數丈、沿岸の村々泥水に浸されたる事素よりなり。かくの如き事少時にして、先の數流合して等しく此地に到るや、水門一時に破壊して泥土を押し拂ふ。其高さ實に十餘丈、火炎、黑煙、火石、硫黃、狂態を極めつゝ、一瀉千里の猛勢を以て下流に注ぐ。沿岸爲めに震動して聲あり、數千の村民、逃げんと欲して而して得ず。吾妻群馬の兩郡に亘りて、實に九十五ヶ村の多きを盪盡したるなり。斯くの如くにして、泥流、長野原に至れば、幅四里程にも見え、山川人家一面の海と

二關所埋めらる

なり、村々の田畑五尺七尺一丈餘に皆押埋められ、吾妻郡下四十二ヶ村等しく此運命に逢ふ。而して更に進みては進むに従ひて益々人蓄を屠り盡し。行谷村の如きは、鎮守の森の大なる樅逆さまに根を其儘上にしてありし勢。されば人馬の流死實に算を亂す。空の關所を押し抜き利根川に入り、五領關所を埋む。加藤景範の記録を見るに

人馬泥流中にただよふ

いでや、利根川を流るる人の骸三日ケ程はいや重りに重り來るに、東の一の大なるも、所々にせかれて北へ南へあふれめぐりたるに、ただよはされし里人多かり。彼の骸共を止めよと上より捻給はりけむ、此處彼處に人數多く來て引き上ぐるに、赤くふくれただれ、或は皮の剥ぎたる頭ひしぎ骨あらはれたる、手足もがれたるものを負ひ、すくめたる稚兒を抱ける、男か女か見知るべくもあらぬを積み、肉の塊をなせり。……ほろびし人は計難し、いくらにもあれ、萬を以て數ふべしといふめる。

殘酷實にかくの如きものあり。實にや信濃國淺間嶽記には、そを目のあたり見ける人の實話を掲げて曰く、

殘酷の極

此節前橋のこなた渡舟あり、此節逃る者飛びかゝりたる洪水にて足をやき、ちんばに成たるものあまた有、泥土水川一面に鳴渡、家居其まゝ流るゝも有、男女、牛馬、白杵、水上に浮きつ沈みつ、泣く泣かるゝ有様、目もあてられぬ事、

助船の命

これを讀みて其裡の實景を想像せよ、實にも悲惨の一活畫にあらずや。されば伊勢崎の領主酒井氏は、領地川邊村へ助船を命じ、竹竿、細引等を出して引き上げくしたる男女、實に夥しく、何れも手厚き養生を加へ、若し蘇生して住所の知れたる者は、之を歸らしめ、知れざるものと雖も、食を與へなどして置かれれば、時人、大に之に感じ、益々其慈悲の程を稱へ敬ひたりと傳ふ。

坂東太郎陸となる

爰に利根七分川は、平塚前へ流れ、三分川は五領并河岸尻へ落つる川なるが、大木大石にて七分川を築き止め、さしも名高き坂東太郎、忽ち變じて陸となり、平塚より三里上の川干あがり水とまり、鯉、鮒、鮓、其外種々の魚類を拾ひ取るを得たり、泥は三分川へ押出し、三友村へ突かけ、村家を埋め、土藏は恰も穴藏の如くに變じ、馬は前裁門口より流れ込み、人は墓所に埋めらる。二階に昇り助かりたる人も、十三三日の間食に飢え水に渴し、詮方なく着物を泥に浸し、絞りて漉し、手に掬して

之を吸る。かくの如き狂亂の泥流は更に進みて其勢を逞ふせり。即、八丁河岸天神邑を越え、藤木迄三十餘町に亘りては、五尺、八尺、二間餘の大石を押し上げ、凡四五間餘も此焼石泥の中に煮ひ返り、泥水逆に煙立登りきと、それより更に下りては、烏川の水を築き止め、平押に八丁河岸の南を通り、本庄宿の北は盆過ぐる迄水流れ、田畑損毛甚しく、新河岸、八丁河岸前、流馬、死人累々たるものありき。然れ共泥流は、之にて飽き足らざりき。更に犬川を押し切り、熊谷裏湯の間の聖天の森に押し抜け、井留間川、上福田川、河越、兩國橋邊へ人馬多く流れ出でける、尙、利根の下流、幸手驛の近傍に於ては、濁流平水より高き事三尺餘に及び、河水は一方銚子港より直に太平洋に注ぎ、一方は江戸川より東京灣に入り、余波伊豆の近海を濁したりといへば、古人をして稀代の珍事なりと嘆せしむる、又故なからむや。あゝ、僅々一日也、否、一日といふべからず、實に數時間也。此數時間を前後して、綠枝、葎の境、忽ち變じて紅熾灼々、礫礫の域と化し了し、永く後世の人士を驚かす、讀者若し機あらば行きて上述の河川の邊、殊に峽流の涯に於て、火山噴出物の六七尺の厚さを以て、段丘の上層となすものあるを見よ。これ正に、當年の遺物にして、横

湧水太平
津に注ぐ
伊豆の近
海濁る

河邊の遺

壁村、川原沼等の近傍に於ては、所謂吾妻式富士岩の塊片を多く混するを見るなり。

以上の如き有様なれば、他出して此變に逢はざりし者共などは、さて我家には事ぞなきやと、急ぎ立ち歸り見るに、家居はいふに及ばず、村落荒涼として一物の餘すなし、剩へ父母を失ひ、妻子に別れ、只呆然とせん術もなく、其身も消え入るせつなさに、共に命を投げんと河邊に立ちて死ぬるもあり、又は、只單獨、生き存へて何の樂やある、いざや、余生を佛門に歸し、父母の菩提を弔はんと、泪片手に回國順禮に出づるもあり。あゝ、是實に人生の最大悲劇、悲傷極りて又いふ所を知らざる也。されは也。川邊毎夜に泣き叫ぶ幽魂を慰めんとして、寺々、施餓鬼供養法事を行ふ。吾妻川岸はいはすもがな、上總國行徳にて二千人の供養あり、又下村といふ所にて、三千人の供養あり、かくて漸く泣き聲其後を絶ちきといへば、亡き靈も九泉の下、尙喜びしなるべし。

施餓鬼供

回國順禮
に出づ

吁、悲惨なりや、吾妻、群馬の兩郡、皆ては、發樹翠滴、北群馬の天地を彩り、白屋草楮其間に斷續し、一水蜿蜒、日々に東し、加ふるに南方、淺岳の一嶺、峭然として聳立し以

荒蕪たる
六里ヶ原

て其麓野を看守す。然れども其山は人に忠なるの山にあらざりき、其水は遂に人に危害をも與へてき。今や、荒原漠々として風物皆暗憺たり。恨綿々として盡くる所を知らず。憶ふ當時蒼生が苦心經營の痕跡や今何處にかある。腥風死骸を吹いて曠原狼籍たり。陰雲暗憺、啼鳥飛雲、徒に凄凉を加ふるのみ、後人蜀山人、亡靈を弔ふ碑に記して曰く

信濃なる淺間のたけにたつ烟は、ふるさうたに見えて、をちこち人の知る所なり。いにし天明三の年、夏のはじめよりことになりはためきて、波のふもえあがり、烟は東の空になびきて、灰砂を降らし、泥水を吹き出し、同じき七月五日より八日に至る迄、夜晝の分ちもなく、ふもとの林ことごとくやけ、泥水三里ばかり隔りたる吾妻川にあふれゆきて、凡そ廿里餘の人家、山林、田圃はいふに及ばず、人馬の流死せしもの數を知らず、しかるにありがたきおほんめぐみによりて、やうくもとのごとくにたちかへるといへども、たちけむりは更にやまず。いにし年この災をおそれ、すみやかにたち去りしもの、からき命をたすかり、おそれずして止れる者は、ことごとく死亡せり。これよ

蜀山人の
碑文

りのちにいたりて、またも大きにやけ出でんもはかりがたければ、里人此碑をたて、後のいましめとなすことしかり。

富士のねの烟はたゝすなりぬれど、あさまの山のこととはに見ゆ

文化十三年丙年秋九月

蜀山人書

黒岩大築建

凄愴の氣四邊に満ち風悲み鳥憂ふ。嗚呼此碑永く存して後人歎歎の資となる、親しく碑前に立つ人の、絞る涙に如何の意味ぞこもれるか。悲惨を極めたる北群馬の野や、吾人は一先づ茲に此記事を結ぶに際し、上述したる泥流通過村々の一覽表を添へ以て當時を偲ぶ料ともなさんと欲す。

泥流通過の村々

吾妻郡

蒲原村

羽尾村

小磯村

中居村

西久保村

大前村

今井村

赤羽根村

芦生田村

袋倉村

右十ヶ村の儀は不殘流失人數合て一千八百人程、御見分先へ可申上旨、金澤安太郎様より仰渡。

三島 村家、五十七軒。人、十六人。馬、八疋。川戸村家、十六軒。人馬、不殘

下原 村家、二十軒、人馬、不殘。青山 村家、十一軒。人馬、不殘

五町 田家、七軒、人馬、不殘。原 町家、十七軒

矢倉 村家、七十軒。村中、不殘。横谷 町家、五十軒、村中、不殘

川原 田家、三十軒、村中、不殘。岩下 村家、三十軒

林 村家、十軒、村中、不殘。長野 原家、百二十軒、村中、不殘

坪井 村家、二十軒、村中、不殘。郷原 村家、七軒

右十五ヶ村合て家數四百五十二軒、但本寫通然る處書面には四

人馬の儀は未相分不申候、三島役人御訴被申出候。

群馬郡

村上 村家、百軒。小野 村家、二十軒

川島 村家、百二十軒。以上三村合て百六十人流失

祖母島村家二十七軒 南牧 村家三十軒御番所流失

北牧 村家百九十軒 以上三村合て百五十人流失

右六ヶ村、祖母島村名主以左衛門江戸表へ御訴被出候。

澁川 村家一軒、村中泥入。中 村家百二十七軒、人數不知、田畑泥入

狩宿新田(砂石少降、家居無難) 此外二十四ヶ村

前口 村(流泥入) 松ヶ崎村同斷

半多 村(同斷) 新田 村(同斷)

松 木(不殘流) 松尾 村(同斷)

立石 村(同斷) 新井 村(半分流)

原田 村(家二十四軒) 川原 島家三軒

中條 村(畑斗) 市城 村(家九軒流)

青原 村(流失) 八木原村(無難)

半田 島(流失) 半田 村家八十軒

下金井村(流失) 箱崎 村(田畑流)

奥田村(同斷)	荒牧村(田畑斗)
上栗村(同斷)	岩井村(家三十六軒)
金井村(家二十二軒)	宇津馬村(家二十一軒)
右村々御公領御見分七月廿一日伊勢にて御改の由	
是より利根川筋兩川邊村々流失泥入	
白井村(畑泥入)	神崎村(同斷)
多留村(同斷)	田口村(同斷)
關根村(家五十七軒)	桃木村(流失)
小田村(畑斗)	寶政村(少泥入)
新堀村(家流)	福島村(家廿四軒御關所流失)
上宮村(泥入)	番場村(流失)
小泉村(泥入)	芝村(同斷)
中町(同斷)	長沼村(畑斗)
連沼村(畑斗)	島村(泥入)

向長沼村(同斷)	小笹村(同斷)
新午村(泥入)	向山王當(畑泥入)
八十島村(泥入)	新川岸(同斷)
沼上村(同斷)	五料村(泥入)
向小泉(同斷)	下宮村(同斷)
南玉村(家少流泥入)	向福島(同斷)
仲鷲村(同斷)	才田村(同斷)
横牛村(大泥)	坂井村(同斷)
萩原村(同斷)	下新田村(同斷)

右三十六ヶ村泥入所々より七八尺一丈二丈三丈位押入川幅一里或は二里も
あり本瀬不定追々御救御普請十月より被仰付御見分度々。(天明雜變記)

(附) 噴火雜記

以上はなるべく記事を詳細にして其状況を傳へんとしたれども記し終つて猶
雜事數項を遺却したるを見る。仍て左に之を録して其遺漏を補はんとす。

泥流の速度

北上州に於ける大燒石

泥流の速度 吾妻郡大笹より武蔵國深谷驛の東北中瀬村の利根川沿岸までは、曲りくゞて凡そ三十里許りなり。此間を約五時間にて達したるを見れば、大約十分間毎に一里を流れたる割合なり。以て其猛勢を察すべき也。北上州に於ける大燒石 火石夥しく押出したる中にも、長野原の川中に長さ十三間横八間高五間程の大石あり。近邊の水湯煙を立て、沸ひたち近づくものだになし。都てなめの如く輕き石なり、破る時は中より火焰出づ。水に入れば煙出づ。然れども次第に火氣減りつくる時は年を経て自ら破れ崩る。

(天明雜變記)

田村權入の慈悲

田村權入の慈悲 大戸村百姓に田村權入といふ有徳人あり。手前も水損ある中に川切不通路にて、米糶其引上百文につき米八合、鹽一升五合位なるを聞き、前々高崎筋にて買入の米三千俵餘を出し、駄賃を損して買値に拂ひ、百文に米一升六合、鹽二升八合に賣渡して近郷の者を助け、其上泥入水村五十三ヶ村へ一村切高目人別開合五十兩、三十兩、二十兩時の用立とて賦る。男女小兒まで割合一人につき銀四百三十文或は五百文にあたりし由。(天明雜變記)

生存者の結縁

生存者の結縁 鎌原村の中生残りし者男女九十人は恙なしといへども、すべき様なく方々へ散亂せしを、八月末に呼び集め廣き草の家を一軒建て、其中に居て各家業を出精して露命をつなぎし所、御公儀より金二百兩下しおかれ、何卒引續き在所開發いたすべき様、仰せ渡されければ、それは渴魚の水を得て蘇る心地して悦び合ふ事限なし。

扱かゝる詫住居に大勢集り居れども、夫を失ひ妻を流して夫婦揃ふ者は二十人程なり、かくては末々の便もなく思ひ、老若に限らず相應に取組夫婦の定めなすべしとて、年たちし者共媒になり親分になりしが、日を撰むにも曆はなし、何が不自由にも足る事を知る此時は魚も、かすの子、大根輪切、粟斗にするめの献立も出来、九月廿日大吉日とて一番二番を樞引にて、茶碗汁わんの三々九度に、泥は高砂仕方無の聲、草屋根に響き波り婚禮前後首尾よく相濟みければ、先二十二組の夫婦出来たり。残り七人男やもめ是をも相應の女見付次第取組神佛に祈りをかけ、毎日土を起すこと便なきとはいひ乍ら末たのもしくぞ聞ける。

(天明信濃風土記)

(下)

吾人の筆の徒に拙くして、以て斷えず讀者の不滿を買ひつゝありしは吾人の夙に慚愧にたえざる所にして、再三諸君の諒を得んことを望みたる處也。而して今や如上の記述を了したるに際し、諸君が拙き吾人の文字を通して、何物の幻影を見給ひしやを問はざるべからず。諸君の胸裡には果して何物の印せられしぞや。滿目荒涼たる六里の曠原。蕭條として秋風荒ぶ吾妻の河畔。腥風慘憺たる利根の流域。而して風物寂寥たる淺岳の陽麓。あゝ、これ實に憂心亂緒の種なるなからむや。然れども翻つて、此慘害を興へたりし、淺岳自身の變化如何を考ふれば、吾人は實に筆を進めて此間の消息を傳へざるべからず。

然れ共、吾人は先づ之が記述に入るに先立ち、是非とも説かざるべからざる一箇の事實を有す。そは吾人の先祖が實に旅行好きの國民たりし事即是也。見よや、未だ汽車も汽船もあらざりし未開の世に於て、金毘羅參詣は如何、善光寺參詣は如何。而して又峻嶮にして定かなる道もあらざる未開の世に於て、富士の登嶽は如何、御嶽參詣は如何。更にまた高山、峻峰の開山の壯舉は如何。是等は何

憂心亂緒の種

旅行好きの國民

七月二十
日の淺岡
山

れも吾人の祖先が如何にも冒險の氣風を有し、如何にも旅行好きの國民なりしを證するものにあらずして何ぞや。然り、吾人大和民族の躰中に、此血液の循りつゝありし事、是吾人が今日此記を草するに預つて力ありし以外、斯箇勢力、活力の内に蟠り存する間、吾人大和民族の活動止む能はざるを知る也。幸なる哉。今や多少流行の氣味を帯び、底に嫌焉たらざる一種の銜氣を含むと雖も、登山探檢の實、漸く茲に盛に、しかも其老幼たると男女たるとを問はずして、此機運に向ひたるは、兎に角喜ぶべき現象とせざるべからず。

然らば變後の淺岳は果して如何、吾人七月廿日過ぎて望見したりてふ記事を開するに、其峰巒中太だしき變異を來したりしが如し、曰く「前に焼崩れたる谷々皆埋り、東の方へ一段高く尾上出來たり。南方も峰通火石硫黄埋りたりと見え、常に糸筋の如く煙幾筋も出る、風なき時は白糸の立のはるが如く、風ある時は横へ幾筋も白糸の如き棚引き峰の煙は太く絶えず。山より北の方は、峰の崩より麓まで大石數万瘤の如く出張り、焼石百五十間、三十間、百間位、二十間位は小石の分、見渡二三里。(此處不明) 夜は赤く晝は燃え上り、硫黄熱であり、今出る處の煙

は北の方山割れさかれたる口々、釜出來て、いよ／＼煙東へたゞよふ。』(信濃國淺間嶽之記) 災後の淺岳、此記事によりて畧窺ひ知るべきにあらずや。而して旅行好きなる國民は、此間の消息を傳へんとはしたる也。

登山を
降す

淺岳如何に暴威を逞しうしたりと雖も、八月上旬に至れば、早や鳴動も日に緩となり、只噴煙のみとはなれり、茲に近郷の者共言ひ合せ、早や大焼の後なれば、復た石砂吹き出す事もあるまじとて、何れも登山を試みて、其好奇心を慰めんとはしたり。然れども先の慘状を目撃したるもの、扱いよ／＼登山となれば、其胸中の鼓動や、高まりけん、或は中途にて引返し、或は前掛山の頭まで進みて、様子を窺ふに止まり、未だ以て御鉢料に進みたるものあるを聞かざる有様なりし。

平根村十
人組の登
山

爰に佐久郡平根村の同志十人組の一隊あり、心を決し、八月朔日を以て登山す。歸來里俗に語りたりといふを聞くに、『前掛山、南、北、西、残らず割れて、其數を知らず、其幅五六寸、大なる所は一尺二寸許にて、割目々々より煙出る、釜山は前掛山より殊の外高くなり、八重八角に破れたり。巢鷹山は淺間より直下に見る。此林千年の大木、殊の外名木ありといふ。山に入つても立木にて夜の如く、方角を知

る事能はざる深山なるが、右の焼石落懸りしと見え、八月朔日頃未だ煙立のぼり、残らず焼失して、皆炭の如く見えたり。釜餘程焼崩れたるなり。釜の様子は西にも破あり、東にも猶割あり、殊の外麓の澤迄破通りしと見ゆ。釜の深きこと知られず、煙釜の口一ばいに立ち、中見え、釜の北の方破口を見るに、五丈程ありて、其底知られず。右十人組、八月朔日釜の縁に登る、恐ろしき事いふばかりなし。漸く山を下り、麓に休み見るに、九時焼強く煙上りける。あやうき事正に顔を見合せける』(信濃國淺間嶽之記)

吾人は其勇氣を嘆賞せざるべからず。吾人は其觀察を多とせざるべからず。讀者よ、吾人は考一考して、災害の記事を参照し、此間の消息を洞察すべきにあらずや。

香坂村四
人組の登
山

越て九月十四日、四人組一隊の登山あり、佐久郡香坂村の人々なり、同佐藤將信の紀行に曰く、『見及ぶ所、鹽野口馬留と申す所の少し上より、湯の平まで、五尺、八尺、或は二間、三間、六七間程なめの如くなる石、數多飛落て、火中に五六尺打込み、碎き散るに飛んで大木を打折り、二尺三尺管の如し、殊に火石を掘出し、大穴をなす事

凄し。前掛山巔に上る、割目數ヶ所、幅一尺、二尺、無間谷より釜山の破し事、五尺、七尺、一丈。殊に釜の北方は八重八角限りなし。石を落して試に、や、暫して前後に當る音、とたくと聞ゆ、中々其深さ何百丈とも計りがたし。割目毎より煙出る、硫黄にむせて行先の通路を失ひ、後へ戻り又横に廻りて、漸くお鉢料に進みて見るに、今大焼にて十丈餘釜山高くなりしと覺えて、前掛山を見越し近邊小山見ゆ、此日は山も静なりと雖も、砂煙絶間なく吹出し、袖袂を面に覆ひ、少し北へ廻りて窺ふ。

去月八日、釜の子丑の方焼崩れしといふ、實に未横に煙吹出す體恐しき事いふ計なし、急き麓に下る其時鳴動し、煙立上る事凄し、危き事也。」(天明雜變記)

吾人は其勇に嘆賞措く能はざるもの也。吾人は其勞を多とせざるべからざるもの也。而して吾人は活動の氣に富める佐久男兒が、前後二回の勢に向つて多大の尊敬を拂はざるべからず。靜に思ふ、是淺岳が麓野に生息する蒼生に與へたる默示の表現乎。讀者は宜しく其勇に向つて賞讃を與へて可なり。

然れども、其勇は單に以上の二組に限らざりき。翌天明四年四月に至つては、更

活動的な
る佐久男
兒

六人組の
一隊熔岩
流の遺跡
を探險す

に岳を越えて北群馬泥流の遺跡を訪ねたる快舉あり、岩村田宿、吉澤彦五郎、小田井宿の者六人連の一隊是也。其節の話に曰く、「鎌原村押出しの跡、焼野三里の内に滿たり。又西に至りて一里許は火石降る體にて、立白障子の如し、築山の如し、三十間、二十間の石數萬に及ぶ。中に一つ離れて大石有り、總廻五百八十足、但五十間四方に及ぶが、大音にて呼るに陰なる人、漸く蚊の聲の如く聞えし、又赤石或は輕石の所もあり、大石の上に雨降れば、煙立のぼる。又其邊一里餘方、一面に硫黄押埋め煙夥し、或は大地割目あり、石を落し試るに、深さ一丈五六尺もあり、足の下とろくと鳴る。年を越えても道行く人割たる穴にて、糞香付歩行、夫より西へ行て、方半里程、大木半分末許残りてあり。是は御林の焼折、打折押出したる物と見ゆ。」(天明雜變記)

年を経て天明五年に至り、先に一度登山したりし佐藤將信、更に四月十三日、五人同道にて登山す、其誌に曰く、「湯平通、道筋去卯の九月中より少は宜し、無間谷に至り、鎌原の方見下す、林下に眞黒岩石押し出しける有様、廻りに並木ある黒府立の如く、其形今造る島臺に異らず、東西一里程、南北二十町許、夫より下皆鼠灰色に

五人組の
登山

見ゆ。扱釜山亥の方に登る、北方は割目多く未通路歩行不及、然共此頃は割目より出るけぶり、大方絶し、是より西の方へ廻らんとするに、成の方に幅三間程の割目二つあり、三丁餘下りて狭き所をまたぎ通る。西の方より頂上に登る、是即御鉢料なりと見る處、暫く窺ふに、煙の中に峰二つ見る、こも割目なり、又未の方の割目大小數あり、五町程下りて漸く渡越て南方より上る、此方砂石に割目埋り、通路よろし、御鉢料を卯辰の方まで廻るに、東方煙甚だ落ち、通路不及候。去る七月八日、燒抜きたる釜の北の方、はや中半埋しと煙間に見ゆ、釜渡り明和年中に同じ、深は煙太くして見えす、遙に遠く大瀧大河の如く音聞えて恐しく煙出る。無間谷西は半里、南は肩の如し、東は峰續きになり、前掛山より釜山十餘丈高く、四方へ砂石は降り積り釜大になりし事、今大燒以前に培せり、山の形變つて甚だ恐しく見ゆ、惜こしき山を目當南表へ真直に下る。烈敷難處、石轉び這まつろひつ手足を痛め、漸く血の池へ下る、堤あり、此所にごりの水源なり。(天明雜變記)

是、今を廻りて百數十年前の紀行文なり。字々流麗を飾る事なしと雖も、何々是眞實の韻。以て災後の淺岳を知る唯一の好資料たるべき也。

淺間大燒の噂

淺岳の消息既に然り、而して裾野居民の生活に至つても、亦何等の記す處なかるべからず。たゞ癸卯歲八月二日より廿五日までは小雨、大雨降り續きしが、誰云ひしともなく、來る廿八日は淺間大燒なりといひ、大洪水あるべしといふ。先に不慮の災厄にあひたる居民何ぞ黙々たるべけんや、村々にては、或は鳥居を建てて無難の祈願をなすもあり、或は湯立百日參詣に心をこむるあり。其他晝夜、念佛に祈禱に祭禮に、只管其身の無難を願ふも亦あはれにあらずや。然れ共其日も來りて何事もなく過ぎけるは、一同の喜びに堪えざる所なりし。其後も九月に入り噴上ありたれども、さしたる害もあらず。又十一月廿七日、同廿九日の兩度に亘りて、山燒け、輕井澤より安中一帶の地まで降灰あり、然れども是極めて少量斯くて噴煙止むことなくして遂に今日に及ぶ、其後の記事は載せて、第三節にあり。

その(三) 後記

以上は是淺岳が噴上當時の光景にして、讀者の切に知らんとしたる處なるべく吾人の切に語らんとしたる處なり。然れ共、只々これのみにては罹災記録の全

災後の景況

部なりとはいふべからず。其後の状況は如何なりしか。其善後の策は如何なりしか、之をも記すは其惨害を語らんに、甚だ必要なる事、亦言を須ひざるべき也。さるにても氣の毒なるは、其惨害を蒙りけん幾多の蒼生にはあらずや。家を焼かれ、屋を流され、作毛を害されたりし事、之をしも小なりとはすべからざるに、仕へんに父母左さず、談らんに兄なく弟なき者、其或は亡き親の靈を追ひて川に身を投じ、或は妻子の亡き靈の後世を弔はんとして、回國順禮に出づるなど、今日此世の人の夢想だも及ばざる所なるべく思ふも、涙の種にはあらずや。世状已に此の如くなれば、如何に幕威漸く地に墜ちんとしつゝある時なりと雖も、世未だ情理を蕪にするには至らず、下諸侯の盡瘁と人民の出精とに待ちて、救済の功茲に擧るに至れり、以下項を分ちて其一般を窺はんと欲す。

(上)

淺岳陽麓より中山道筋降灰、作も多大の損害を蒙るや、松平若狹守内、志賀又右衛門は、御勘定所宛一通の届書を差出したり。(御代官、遠藤兵右衛門、江戸屋敷へ宿繼を以て届けたる寫)

志賀又右衛門の註

五月中より、信州淺間山折々大焼、去月廿九日より、當月朔日二日、鳴動強く、別て五日より八日迄、大焼鳴動強く、御領所信州佐久郡村々へ、少宛砂降り候趣、淺間山近邊村々住居も、雖成程の儀故、何も家財片付立退候覺悟に罷在候體故、田畑手入も自然と怠り候趣に、御座候、追て出來方にも障り可申候哉と奉存候趣、信州役人共申越候、依之一通申上置候以上。

松平若狹守内

卯七月

志賀又右衛門

御勘定所

同月十五日に至れば、安中城主板倉伊勢守、重ねて上書する處ありたり。

先達御届申上候、信州淺間岳大焼、私在所へ焼石砂降り、其後泥交り雨降り、田畑痛み候趣。

一、高一萬八千二百二十四石、六斗五升五勺

内一萬五千四百三十一石、四斗八升五勺、碓氷郡の内四十五ヶ村。

右の場所へ焼砂七八寸より四五尺積り申候。

板倉伊勢守の上書

二千六百九十三石一斗六升五合五勺、群馬郡の内六ヶ村。
 砂四五寸程積り申候。
 一、坂本宿百姓家住居相成不申候も有之、小屋掛當時住居仕候。
 一、百姓潰屋二十一軒、但往還筋浦屋共に半潰れ、四軒、社人半潰れ三軒。
 一、御關所城内高札等別條無御座候。
 右の通に御座候碓氷峠の儀、通路無御座につき、委細相分兼候間、遂て可申上候、群馬郡村々は相躰より降砂薄方に御座候間、右の次第家來共より申越候間、此段御届申上候。以上

七月十五日

板倉伊勢守

見分役人
任命

かくの如くなれば、代官遠藤兵右衛門、原田清右衛門、今度淺間焼につき、上州信州山崩砂入等、場所爲見分、七月廿一日江戸出立の旨、於勘定所、右最寄の代官預所へ一同被仰渡可請御見分村々もありたり。
 之より先、七月十四日に至り、遠藤兵右衛門代官所御影役所手代

中河専藏

輕井澤、
手當金

田中祐助

右兩人出頭、見分あり、急手當夫食代として輕井澤へ

一金二十五兩

被下置

内、金五兩

輕井澤宿役人江戸への雜用引

金二十兩

同所人數千百十七人に割當一人につき、銀九十二文六分にあたる

之と同時に出頭したる節、

一金二十五兩

被下置

金十兩

江戸へ罷出たる役人旅用

金十五兩

千百十七人割、一人銀七十文宛

錢相場五貫三百文

役人輕井澤へ出頭

八月に入り輕井澤へ

從江戸爲御見分御普請役

元々 早川富三郎

荻原要吉

御影御役所手代

松田丹治

右三名出頭八月中旬地方爲檢分稻垣藤左衛門手附手代衆出頭

九月七日

爲御檢分

御勘定方

篠山重兵衛

御普請方

橋詰良助

右兩人出頭輕井澤表間敷兩裏用水殘らす間敷を檢む其節遠藤兵衛門手代稻垣直四郎田中祐助兩人も出向す。又道中奉行桑原伊豫守住宅割に出でたるは左の兩人なり。

輕井澤問屋 市右衛門

年寄 次郎左衛門

九月十六日

御勘定方御組頭

豊田金右衛門

御普請役

久留定八

御影御手代

松田丹治

右三名出頭

九月廿四日

惣御奉行役
御勘定御吟味役

根岸九郎左衛門

御用人

飯田角兵衛

御普請役元締

早川富三郎

御影御手代

荻野文吾

御影御手代

田中郡吉

右六名廿三名松井田泊りにて出頭

御普請役

飯泉秀藏

町田長三郎

見分の様

右兩名、中山道往還呑用水御普請御見分の爲め出頭以上の如く見分の役人、頻々と出入し、輕井澤宿爲めに混雜一方ならず、かくして漸く茲に普請に着手するに至れり、今稍複雑の嫌ありと雖も、御影新田小右衛門の記せる書付を引用して、更に見分の模様を詳にせんと欲す。

御勘定篠山重兵衛様御支配御勘定橋爪良助様御普請役飯泉秀藏様田中藤藏様町田長三郎様當御支配遠藤兵右衛門様御手代稻垣直四郎様御案内、卯九月六日輕井澤宿へ御着御泊、尤も御越の節、右宿東の分御檢分有之、翌七日同宿御檢分、夫より沓掛宿迄御越し道筋御見分右宿御泊、八日朝の内同宿並油井村御檢分、續て御影新田下堰湯川揚口より御檢分塲所にて御辨當、其夜追分宿御泊、九日上堰千ヶ瀧御檢分同宿御泊、十日前田原村小田井宿呑用水血の池御見分、岩村田宿御泊、十一日落合村御見分相濟輕井澤御宿にて御普請被仰付候

細川越中守様御手傳御普請

當御支配遠藤兵右衛門様御普請金御渡し方、上州板鼻宿へ御手代高田太左衛門越内喜内様御出張、上州信州共に金子御渡被成候。

御影新田上堰千ヶ瀧仕越し御普請急被仰付、九月廿五日より始る。

御普請役仲田改十郎様堀、長九百七十二間深四五尺幅六尺板堰二ヶ所長二間唐松板厚二寸五分を以て仕立候、右仲田様御病氣に付十月五日御替り飯泉秀藏様同九日御勘定栗原禮助様御案内遠藤兵右衛門様御手代稻垣直四郎殿御付添、普請所御見廻被遊候、同十九日御同人様出來方御見分飯泉村は同廿三日御出立になり同廿五日迄に御普請相濟同廿六日出來榮御見分として御勘定御組頭豊田金右衛門様御普請役様方御兩人御付添被成候、同廿七日同所爲御見分御勘定御吟味役根岸九郎左衛門様御普請役方四五人御付添被成候。然る所山内雪ふり候上しからみ等破損致候塲所手入致事も成兼候は、來春見分可致旨被仰渡御通被遊候。されば翌辰年閏正月十三日出來榮御見分として御小人目付小池定八様御普請役仲田藤藏様細川越中守様御役人永間仁大夫様御見分也。同三日湯川下堰御普請被仰付同

廿一日より初る、御掛御吟味下役立田安右衛門御普請役村井喜藏様町田長三郎様、猪湯川揚口掛堰長さ百十二間横三尺深二尺五寸樋代棒七尺より一丈三尺まで長百三十間棒の内は勿論堰兩腰迄不殘石にて詰る。右内水は水棒數ヶ所締切棒長七間二通堀浚長九百八十二間深七八尺横六尺長六間掛樋深二尺五寸横三尺杭締長三千三百七十二間六月八日迄に皆出來、御影新田御役所遠藤様元締御手代中川専藏殿御立會相濟申候右兩用水路御普請頂戴金合七百圓餘。(天明雜變記)

輕井澤へ
手當金

輕井澤宿飲用水缺乏して甚だ難儀を極めたる事は、吾人既に之を記したりしが、用水砂利除自普請はいよく八月初旬之に着手したり。九月上旬見分の後、御扶普請となり人夫は依然として輕井澤宿に命せられければ、賣女小兒に至る迄、何れも切々と働けり。而して十月初旬に至り夫食代燒家普請金二百二十兩。翌辰春に至り畑開發金等都合二千百三十八兩二分、永五十文三分三厘を輕井澤宿へ下與せられたり。

一金千二百二十二兩二分

永百八十文 御拜借合せて

百九兩三分

永二百三十文

大變の節急夫食追夫食分

内千九十二兩

燒家潰家破損家御普請金

二十兩二分

永二百文

馬飼料

又同宿へは金百二十五兩。こは正徳二年文照院殿より以來年々米高五十二石五斗御救として下さる。上州板鼻宿にては御米を頂戴す。但卯年立米直段兩に四斗二升の相場なれば、右金高に及ぶ右米高は百五十俵。夫より坂本、松井田其他の宿々、何れも或は馬飼料を貸與され、或は人馬賃錢の價上げをぞ仰せられける。今試に其一二を記せば。

一、坂本宿

合金四百五十八兩二分 永二百文

一、松井田、安中、板鼻

潰家、破損家、馬飼料共。但馬飼料五ヶ年賦也。合金六十二兩 永二百文

馬飼料 但一ヶ宿 五十疋宛 一疋に付永四

百四十文宛

一、輕井澤より板鼻迄五宿助郷九十四ヶ村

金九百五十兩二分 永二百

馬飼料
與人馬賃
錢値上

四十文

馬飼料拜借分。但百石に付金二兩宛返納

一、鴻巣より板橋まで七ヶ宿

同卯十二月より戊十二月迄中七ヶ年人馬

賃錢三割増被仰付

一、輕井澤より熊谷迄十一ヶ宿

右同斷三割増被仰付

かくの如くなれば諸人不足の中にも其生命を繋ぎ得、普請の如きも追々竣工するに至れり。碓氷嶺の如きも九月下旬より石砂の切割に従事したりしが、霜月初旬大畧竣工を見るに至れり。それより東方上州安中領、小幡領、高崎領七日市領なども、急に石砂の片付工事に着手し、僅かばかりの畑を開き、野菜など蒔きたりしが、八月中地主普請を命せられ、九月に至り漸くの事出來の運に至り、人々麥など蒔付けたり。

(下)

以上述べたる處は、主として淺岳陽麓、信州方面に於ける普請工事狀況の一般なり。吾人は更に歩を進めて、北上州漆岩汎濫の地方に及ばざるべからず。七月九日、上野國那和郡玉村宿年寄庄右衛門、問屋三郎治一通の届書を呈す。

玉村宿問屋年寄の
上書

先月末より信州淺間山震動仕、燒砂降り候儀、夥敷御座候處、去五日夜中に厚さ五寸程も降り申候。別て六日夜六ツ時より夥敷降り出し、夜中雷電大鳴、翌日七日晝も開夜の如くにて降り通し、其夜大降にて八日晝四ツ時まで降り申候。砂二寸七分餘、一坪一石五斗三升餘御座候。但し一升の砂四百三十匁御座候。田鼻へふり候砂五六寸。依て作物埋り申候、然れども右之間雨は少も降不申候。八日八ツ時利根川石泥の水大石火乍燃相流れ川上一面に燃、陸に押上申候。依て當宿五料宿間失河通路相止り日光の往來相止申候、三國通同様にて通路相止り申候。依て乍恐以宿繼御訴申上候。

七月九日

玉村宿

問屋 三郎 治

年寄 庄右衛門

同日、日光道中武藏國幸手宿問屋文右衛門、年寄仁左衛門等亦一書を呈出す、

乍恐以宿繼申上候。

日光道中幸手宿問屋年寄共申上候。當宿より八丁東の方にて惣權現堂川

幸手宿の
問屋年寄
上書

但し利根川の内に御座候。昨夜中今九日八ツ時迄家道具五六寸角の立柱四五尺丸の角小木敷居鴨居戸板等其外白杵重箱鉢の類川いつばいにて通路成兼申候夥敷流申候。干川御座候所黄黒の泥水三四尺相増男女出家溺死のもの迄五六十人馬七八疋川縁を流申候。川中の儀は何程流候哉相知不申候。爰に破鞍に上州群馬郡河島村と書付有之候間、右權現堂河岸へ掛り上州藤木河岸と申す處にて船の者に承り候へば河島村と申すは伊香保湯二里程有之山申聞候。右泥水故か鯉唼うなぎの類水に浮き上り川岸に寄夥敷手取仕候。右は先達御觸も御座候につき變異の義故乍恐以宿繼奉申上候。

日光道中幸手宿

問屋 文右衛門

年寄 仁左衛門

されば前記信州に於けるが如く、見分役足繁く此地に入り來り、多數の役夫を使役して、以て工事を急ぎたり、以下之が概略を記さんと欲す。

路役人任

信州と同じく、灰砂、火石、用水、往還、橋、悪水除の普請場所割役、勘定役、吟味役として當地に關係せしは左の面々なり。

- | | |
|---|---------|
| 群馬郡澁川旅宿 | 根岸九郎左衛門 |
| 同 組頭役 | 豊田金右衛門 |
| 同 御吟味役 | 田口五郎左衛門 |
| 同御普請役元締 | 品川 富三郎 |
| 同 御普請役 | 大西 榮八郎 |
| 同列大崎旅宿御代官 | 遠藤兵右衛門 |
| 同御普請金割元御勘定 | 古川五郎兵衛 |
| 御 普 請 役 | 逆見 音治郎 |
| 同 | 荻野 文吾 |
| 大笹、鎌原、小宿、大前、西久保、中居、赤羽根、袋倉、勘羽木、芦生田、古森、與喜谷、新井、横壁、川原湯、三島、田川、戸金井。 | |
| 吾妻原町旅宿御勘定 | 久保田進治郎 |

御普請役 長岡 文兵衛
同 關 文治郎

今井、立岩、羽根尾、坪井、長野、原林、川原田、横谷、松尾、岩下、矢倉、江原、原町、中之條、伊勢町、平、青山市、城村上。

以上の外、吾妻、利根、両河の流域に於ける各役人ありたるなれども今は之を畧す事とせり、(尙別項泥流通過の村々参照)而して工事着々其功を奏する所ありしが、辰閏四月九日に至り、御普請出来榮見分として

御指人目附 柳生 主膳正

來る、此工事のかく手間取たるを見ても、其如何に荒涼たるものなるかを察するに餘あり。

又利根川五料の下埋り、鳥へ切込み本庄浦甚しく破損し、通船絶無の有様なりければ、これは十一月初旬より川堀普請に着手したり。蛇籠を重ねて水を堰き止め、瀬筋を掘る事深さ九尺幅三十間長さ一里餘に及ぶ。かゝる大普請なれば、これも容易に出来難く、翌春二月下旬漸く竣工を告げたるのみ、聞らく此費用三萬

利根川普請

北上州普
後状況畧
既の理由

餘圓なりしと。

讀者は茲に至りて定めし物足らぬ感の胸臆に起りしなるべし。何ぞや中山道筋の事唯降砂石の甚しきありしのみ、是を上州押出しの事に比すれば其亂狀到底之を後者に譲らざるべからず。然るを其善後狀況の事、前者の詳細なるに反して後者の粗畧なるは何ぞやと。然れ共問ふを止めよ。前來吾人が記述皆然りしにあらざるや、是果して何の故ぞや。吾人先に本書を編まんとするや、之が資料の蒐集に維口も足らざる事二霜星、而して吾人の志の存する處を諒として、所藏の資料を供給したる者は、多くは南麓の人々にてありき。北上州に至つては吾人未だ之を手にしたる事なし。吾人嘗て之を慨し歩して群馬の北邊に需む。漸く目に入りたるもの一二に過ぎず、而して或者は家の珍寶と稱して貸與を肯せず。吾人會々披きて之を見るに吾人の手中のものと大差ある事なし。仍て強ひて之を需めずしてかへる。是實に如上粗畧の記述をなしたる所以、特に其然る所以明にして諸君の諒を得んとする也。

第三節 天明以後の淺間山

山頂噴煙日夜燃

石焦木黒認當年

晚來猶見西風起

吹送東天一道煙

龜田鵬齋

空前の悲劇
巨人情性

千古の齡を重ねし雄々しの淺岳や、彼一度世道人心の頽廢に慷慨の怒氣を發出するや、幾多の生靈爲めに屠り盡され幾多の草木爲めに生を失ひて、端なくも茲に空前の一大悲劇を演じたり。然りと雖も、是豈彼にとりては寧ろ空前の一大壯舉にはあらずや。縦横の霸氣内に鬱屈して男兒の活力常に血管を迸る。其一度世態の亂狀を見るや、其血争でかこゝに抑制し得るものぞ、忽ち發して濛々たる黒烟となり、砂石を投じ、溶岩を突發し、裾野の蒼生をして其膽を寒からしむ。思ふに此巨人情性の當然事には屬せずや。さるにても千古を通じて此氣常に滅せず、依然として上信の境に峙つ巨人よ。徳富蘆花は諷すらく、人はいふ自然是死すと、然も爾は活く、爾が腹中には烈火滿つ。誰か爾に狎るゝものぞ。萬古に騰る煙を見よ。煙歟。靜に上るに祖先が焚きし祭天の香爐の名残かと見へ。怒つて漲るは人の子の罪を懲する上帝の

上帝の稜威を宣る淺間山

淺岳水劫に死せざる乎

享和三年五月十六日

九月廿三日

狼火とも見ゆるなり。山を見て木と石と其腹に潜む鐵塊をのみ見る者、自然死せりといふもの、神なしといふもの歟。來り伏して上帝の稜威を宣る淺間の鳴動を聴け。……此日天殊に霽れて、晚秋の空、水よりも澄めり。淺間の麓を過ぎ、碓氷を下り、高崎に到り、願れば妙義碓氷、榛名赤城の諸山、兩毛の平原を扼して波濤の如くうねれるが上に、淺間は宛然王の如く聳えて、本細く末廣き其煙は、風に從つて飛龍の如く上毛の天に跳れば、其黒き影は碓氷を越えて、遙に榛名山衆を這ひわたれり。と。

一、享和三年——皇紀二四六三（光格天皇の御宇）

五月十六日、晝夜大燒、岳北二里内降砂あり。上州大笹村の邊迄とす。

此時輕井澤へは降らず。

九月廿三日、夜大燒、大石降り六里が原、分さりの茶屋一軒押し潰す。

十月七日、午前四時より焼出し七時過まで小砂降る。江戸へも灰降りしといふ。

一、文化十二年——皇紀二四七五（光格天皇の御宇）

正月二十日、夜焼出し十一時過ぎより小砂降る事半時、此時離山より上州板鼻に及ぶ。

一、明治二年——皇紀二五二九（今上天皇の御宇）

九月十九日、當春より度々の大焼にて、此時に至るも歇まざりければ、勅使北小路神祇大格並神祇官小吏、鼻田峠にて淺間山の祭事を執行す。

一、明治八年——皇紀二五三五（同上）

六月十四日、朝大焼降灰あり、木の葉白くなる。

一、明治十二年——皇紀二五三九（同上）

九月廿七日、朝十時大焼

九月廿八日、又々焼出し鳴動を伴ふ。

一、明治廿七年——皇紀二五五四（同上）

明治廿七年

五月廿四日

五月廿四日、大焼、本年に入りては度々の大鳴動ありて、四月十一日以来同十五日午前七時より廿分間、同十七日午前八時より約三十分間多量の黒烟を噴出したるしが、本日は終日黒烟を上騰し、夜に入りては山上紅を呈す。

六月十四日、大噴上（星野哲之助氏調）

一、天候、薄曇。

一、氣候、温度正午寒暖計七十八度。

一、風向、西北の微風。

一、發噴時、午前九時三十五分。

一、鳴動の模様、地中より百砲を齊發したる如く、唯一回の迅烈なる轟音と共に、家居を上下に激震したり。

一、噴煙狀況、新瓦色の密烟を噴出し、其高さ同山の半ヶ丈位なりしが、見る間に二倍の増大となる。折節強き西北風起りし爲め、其噴煙は東南に折れ、上州の天に靡き渡れり。

一、噴煙時、午前九時三十五分激音と共に發噴し、同十時廿分頃は漸々白色を帯び、其量も減じ平日の量と均しき程になりたるも、其色澤は黒色を呈せり。而して同十一時の頃は半腹以上は密雲を以て蔽はれ判然たらず。

一、在郊外直視者、直話、始め電光の如き火光を閃かし、僅に黒煙騰ると見しと同時に、鳴音ありし。

一、試験、爆鳴後四五分を経て、耳を地面に接したるに、地の響音は恰も汽車の近傍を過ぐるが如くなりき。

一、町内の人、各人ズドン、ミシンの一聲に打驚き、争て戶外に走出せしが、山の嶺の猛煙を見るや、何れも恐怖せり。

一、噴煙前の景況、本年四月十七日噴煙鳴動ありし以來は、日々兩三回位は勇ましき黒煙を噴出せしが、五月十六日に稍其量を増し、其後は前日來と同じかりしが、本年八九日頃よりは、梅雨の季節、半腹以上は雲を以て蔽ひ、定かに山嶺を見る能はざるも、夜間に至り時々火光の

天に映するを見れば、其煙量は稀薄なりとは思はれず、而して十四日即當日は、朝霧曇りなれども、同山の脈は更に雲もかゝらず、一層峙ちて確然として山体を現す。

一、噴火後、山上踏査者の直話、山上至る所新に噴出せしが、如き燒石磊々たり、其大なるものは徑七尺位のものあり、而して其西南に面する處、巔孔より麓に向ひ、長さ凡三丁餘、幅四間餘の新穴を生じたり。是鳴動の時の出來事ならんといひたり。

一、各地よりの通報、群馬縣下、前橋、高崎地方、茨城縣水戸近傍に降灰あり、又本縣下上田、松代、長野等にては、其鳴響を聞けりといふ。

一、明治三十三年——皇紀二五六〇（同上）

一、一月廿二日、午前六時四十分大噴煙と共に震動あり、輕井澤より東京地方へかけ、砂石及び灰などを降らす。

一、一月廿九日、午前三時十分、鳴動、尤も廿二日に比し頗る微弱にド………ドーンと遠雷の如き響に次で、岩村田地方は暫時家屋の震動を覺えた

明治三十三年
一月廿二日
一月廿九日

二月七日

二月七日、午後六時五分鳴動、輕井澤追分一帶の地に降灰あり。北上州降灰の後小石を降したる由、故に彼地山麓のものは天明の如き事はあらぬかと心配したりといふ。

山麓の人の嘯に、始め大砲の如き音響と共に徑一尺位の大石を噴出する事雨の降るが如く、中腹に至る迄火光輝き、其光景實に凄ましく、十餘分にして黒烟天に漲り、烟の中より火光を見、其壯絶いはん方なかりし。

二月八日

二月八日、朝に至り山嶺を望み見るに、噴火のため積雪消え、降灰のため黒色を呈し居れり。

二月十九日、午後四時又々大鳴動し、岩村田附近は大砲の響の如き音と同時に家屋の震動凄まじく、山頂眞黒の噴烟稍東北に傾きて天に沖したり。東方の各地降灰多かりしと。小沼村は最近距離の事とて、三時半より四時頃迄數回大砲の如き鳴動あり、戸も外れたる程なりしと。

二月十九日

二月廿一日

二月廿一日、午後八時又々遠雷の如き鳴動と共に噴煙甚しかりし。

二月廿二日

二月廿二日、午前八時十分又々大鳴動と共に黒烟大に噴騰す。

二月廿六日

二月廿六日、午後十時同廿七日、午前八時三十分、烈しき噴煙あり、前橋地方は廿六日午後二時より四時頃まで降灰、瓦は勿論道路迄白くなり、一時は濛々として先も見えぬ程なりしと。

三月一日

三月一日、午後零時三十分大噴煙あり、近頃連日連夜の噴煙は記すも五月蠅けれど、本日は殊に凄しく折柄西北風のため東南に靡き、數里を隔てたる平尾山の頂上迄一面に眞黒となりたり、鳴動はド……と雪だれの如き音したる迄にて極めて微弱なりし。山下の者の話には、毎夜の毎く遠雷の如き響を聞くと同時に戸障子ビリ……と震動すと。

三月廿四日

三月廿四日、燒三時四十分より七時頃迄、五回の大噴煙二回の震動あり、一日以後數回の噴煙あるも今回の最も凄じきものなりき。夜に入り十二時稍過ぎし頃一回の噴煙ありしを始めとし、午前三時四十分、四時三十分、六時二十分と都合四回の噴煙あり。殊に中の二回は

最も甚しく前回に其比なし。屋外にありし人の嘶に俄に一天明くるが如く火事とも思ふ程なりしと。従つて電光の如きもの數百千現出し山頂より少し下りたる處に、火玉の如きもの、轉げ出すを見たりと。當時の壯觀想ふに餘りあり。而して此際降下せし小石輕井澤邊にて、大なるは握飯大のものもありしといふ。

七月廿一日

七月廿一日、輕井澤よりの來信に曰。數日來淺間山に異狀を呈し、時々黒烟を噴出したるが、十九日は午前八時頃より廿分間程灰を降し、輕井澤附近爲めに一見薄雪の降下したるが如くなりし。されば山岳は雲霧に包まれて望見し得ざりし、其後毎日噴煙濛々として上騰する様凄じく、一度上騰する時は十數丈に至る、されど雲霧に遮られて見えぬ事多かりしと。

七月廿三日

七月廿三日、松村長野測候所長調査として登山したるも、格別の異狀なかりしと。

七月廿四日

七月廿四日、噴煙甚しく東天に緩く事數丈、恰も中天に黒龍の横るが如

くなりし。輕井澤よりの書信に八月七日午後三時より淺間山方面に方り、時々雷の如き音響を耳にしたるが、午後七時三十分頃に至るや、巨砲を放ちたるが如き響あり、同時に非常なる激震追分にては戸障子外れ、御代田にては戸外に逃げ出したる程ありて、淺間の方面は一面の雲霧に包まれ、數度鳴動の後八時頃に至りて止む。同時に東長倉村字小瀬より草津街道に亘りて、凡そ一里半許は大鳴動の後十分を経て、小豆大の砂利を加へて灰を降す事十分間にして止む。又磯部、高崎邊へは多少の降灰ありしといふ。

一、明治四十二年 皇紀二五六九 (同上)

明治四十二年
一月二十九日

一月二十九日、午後四時四十分より約四十分間大に鳴動し、濛々たる濃灰色の噴煙の天に冲するありしが、鳴動に伴ひて激しき震動を起し、爲めに附近の各村に於ては戸障子の倒れたるもの多々ありき。而して八ヶ岳山林中作業者の話に最強震の時の如き、森林樹木のグウグウと鳴る音と共に激しき震動ありて、頗る恐怖せりと。

五月卅一日

山上二團の火

流車中より見たる噴火

五月三十一日夜に入り十一時二十分巨砲の如しといはんより寧ろイナマイトの爆發ともいふべき凄まじき音響耳を劈くばかりなると共に家屋激しく震動しければ目下短かき初夏の夜の夢に入りたる計りの裾野の人は枕を蹴て戸外に飛び出せば淺間山嶺は全部一團の天火と變じ其光焰空中に反映し前掛山邊は頂上より投下しつゝある數千萬の猛火團點々とし更に山麓目掛けて押散したり其光景の慘憺たる且又壯大なる非常なるものなりき。而して此慘憺たる光景は約四十分にして漸次山麓に押移り全く認められぬ迄に至りしは一時間の後なりき。追分より鹽野北大井村方面は戸障子の外れたるもあり又噴火灰は附近各町村に夥しく翌一日朝見しに一坪に溜りし黒燒砂は約一合ばかりなりき。以上の光景を目撃したる人は語て曰く當夜の状況を見ぬ内は天明燒の繪圖は虚を寫せるものと考へしも是眞の景なるを點頭かれきと。

同夜汽車に搭して旅行中の某氏が御代田輕井澤間にて目撃したる光

景といふ通信には——同夜は天澄り月冴えなれば室窓よりは明かに淺間岳を望み得たり手は車窓により淺間岳を望み居ると十一時二十八分過ぎ淺間岳の噴火口の空がホット赤くなると思ふ瞬間噴火坑より圓い火の柱が立ち昇りしこと數十丈熾に天に沖するや一大黒烟と變じ山頂の空一面を覆ひ其黒烟の中より火花を散らすと共に恰も數百のダイナマイトの一時に爆發したらんが如き大音響を發し音響と共に火花は山嶺一面に落下し炎々たる焰と化したり。殊に噴火口より西南に當る屏風岩は一面の猛火に包まれ其谷間は噴き出したる猛火を以て埋めたれば恰も火の中に立ちたる火屏風の如くにして實に壯觀極まりなく猛火の落下する時に小石大の數百の火塊の黒烟の中より四方に墜落する様は一大花火を見るが如く猛火の落下し終るや、黒煙は刻一刻に噴出して其量を増し其黒烟の中より稻妻四方八方に閃き雷鳴を起したる光景は壯絶凄絶にして到底言語にも盡されず。かくて落下したる火は炎々と燃え上り其狀一大山火事を現出したるが

如くなりし、列車の輕井澤に着したる頃も淺間山巔に當り尙ほ火光の
中空に映するを見たりと。壯絶亦快絶、凄絶にあらずやと。又翌一日
午前十時半山麓を出發して二日未明山頂に達し、噴火後の狀況を視察
したる人の話には、今回の大噴火に先づ驚嘆したるは、從來に比し
て火口の全然一變したる事是なり。即從來に見たる噴火口中央部に
起伏し居たる熔岩積載の小丘及び火口西方の跳獅窟と稱する絶壁は、
共に崩壊し盡して些かの形跡なく、火口の周圍より中心へかけて摺鉢
なりに一体の緩き傾斜をなし、其中央部へは歩行し得る位にして、周圍
には噴出せられたる長さ十間乃至二十五間、高さ七八間乃至十餘間の
多數の巨石ころがり居り、第二次火口原に最も多し。湯の平附近に點
在せる落葉松は悉く黒焦となりたる上、滅茶々に粉碎され居るより
推せば、噴火の當時遠近より恰も山火事の如く見えたるもの、恐らく是
等の落葉松が燃え上りたる時の光景なるべく、又當時火の玉の如く見
えたるは、噴出しつゝありし石が熱の爲め斯く認められたるものなら

ん。一行は山頂諸處に於て烈しき硫黄の臭氣に觸れ、屢々氣絶せんと
せしも、其都度携帶せる氣付藥をのみて辛うじて難を免れたり。又燒
土の龜裂中に試に杖を突込み見るに暫時にして燻り始むる有様なれ
ば、登攀の際草鞋を通じて足裏に堪え難き熱を感じたり、且四圍の空氣
が甚しく乾燥し居りたる爲め、宛然赤道直下！火事場！酷熱地獄！の
境地に行くの思ひあらしめたり。更に九死に一生を得たる北大井共
勵會の經營せる登山者休憩所番人の語る所によれば、噴火の際突如と
して起れる大鳴動と共に、伴の男は刎ね飛ばされて、次て猛烈なる地響
に家屋の錠は飛び去り、柱一本は摧け去り、空は一見猛火に包まれたる
が如かりきと。彼此以て當時の慘况を察し得べきなり。

我淺間山研究會にても、六月十二日委員を派遣して實地踏査する所あ
らしめたり。委員の報告に曰く。前掛山に到れば一面新しき噴石を以
て蔽はれ、火口丘に到れば、全山の色澤噴火前とは大に其趣を殊にし、新
しき石を以て蔽はれ盡されたるは更なり、長さ二間、三間、四間。厚さ五

尺、六尺、七尺。幅一間半内外の大石所々に横はりて其數百十。殊に凄絶なるは以上の熔岩一度落下するや、地面に當りて孔を穿ち、其最大なるものは直徑三四尺、深さ一二尺にして、而も其四邊に新しき砂を飛散せしめし光景は、實に壯絶、凄絶の極みなり。云々と。

噴火の前

凡て噴火に際しては、往々前徴とも稱すべき現象の存するあるが如し。淺岳今回の噴火の前徴とも稱すべきは、同山の中腹湯の平の近傍（登山案内参照）に源平清水と稱する清水の湧出するがありし、然るに前年暑期の頃より源氏水の湧出止みたるより登山の人々、何か山に變動はあらざるかなといふもありき。吾人は其眞偽を知らずと雖も、暫記して世人に問はんと欲する也。

降灰區域

降灰區域は、當時風向東北なりしを以て、主として小諸以西に多かりしされと、それとても桑葉其他に被害ある程にてもあらざりし。小諸にては新聞全紙に約五合の降灰ありし。

大要以上の如くにして、佐久野數萬の人民は爲に一大驚愕を喫せしが、

當時新聞紙が報導せる各地の状は、又其一般を窺ふを得べしと信ずるが故に、之を左に摘録す。

大屋上田
よりの望見

大屋上田よりの望見 大屋にては同夜俄然大砲を放ちたる如き音響あり、續いて恰も地震の如き約一分の震動に、村民大に驚き老若男女を問はず、孰れも何事ならんと戸外に飛出し見れば淺間山方面に方り、數十丈の火煙高く冲天せるを發見し、茲に初めて一同安堵して寢に就けるが、一時は中々の大騒なりき。又上田にても同様の物音あり震動せるが、大屋程の騒ぎは爲さざりし。

長保新町
に降灰

長久保新町に降灰 小縣郡長久保新町にも降灰ありたるもの、如し、昨朝同町役場及び町農會より郡役所並に郡農會に「灰降る給桑害あるか」との電報あり、「灰桑洗ひ呉れよ」と返電す。

長野市に
ては地震
か雷か

長野市にては地震乎、雷乎 四邊の寂寞を破てドーンといふ大音響を聞き、目を醒したる人々は、地震乎、雷乎と怪しみ合へり。

上諏訪の
降灰

上諏訪の降灰 昨日未明上諏訪地方に降灰あるを發見す。

十二月七日
噴火の光景

轟然一發
佐久野を
震動す

十二月七日、一兩日來、上田方面には數回の地震ありしと傳ふれども、山麓には僅々の微震ありしのみなれば人々左程の事には思ひ及ばざりき。然るに七日午後七時四十分に至り方位南北とも覺しき、性質上下動の稍強震あり、後僅か五分時を經過するや、轟々との音響と共に一の激烈なる上下動を起し、之と同時に來れるズドンといふ音響は、地軸も爲めに碎けしかと思はるゝ程にて、百雷の一時に轟きしといはんか、百千砲の齊發といはんか只轟然と北佐久野一帯を震はせたり。之を聞きたる麓野の人々は素破や淺間山の噴火ならんと、皆々戶外に駈け出し見れば、果して同山の絶巔より中腹へかけては、炎々たる猛火を以て包みなされ、其熔岩火團は益々其麓に向て押散されつゝありし、其慘憺、壯絶の光景は到底筆紙の盡し得べくもあらず。佐久野數萬の人民をして肌を寒うせしめたり。而も其噴出の巨岩火團は中天に騰りて互に相衝突し、互に相破壊して再び坑の周邊に落下し、是と同時に電光の如き閃光は數百條とも思はるゝ程冲天に閃めくに至ては、其凄絶

殊勝なる
消防組

上野大笹
附近

實にいふ所を知らず。殊に其落下の破碎熔岩は、更に地面に落下するや、幾百萬、幾千萬の小破火片となりて谷を焼き山を焼くにぞ、人々胸を撫でてぞ見やりたる。(口繪参照)

斯くの如くにして其噴火の熔岩が、岳の南面に落下して今しも雜草地を焼き拂ひ、淺間美觀の一と謠はれつる裾野一帯の林に延焼せんとする虞あるや、撫野の消防組七十五名は準備匆匆馳せ付けて登山、必死となりて防火に従事したるにぞ、翌八日辛うじて赤松自然林前にて遏止したりしといふ。

以上の如き景況なれば、其一時如何に壯烈なる噴火なりしかは、視ひ知るに難からざるべし、猶附近各地に於ける諸般の光景は、其通信によりて知るを得べければ、之を左に摘録すべし。

上野國吾妻郡大笹附近 午後七時四十分稍強き地震あり、上下動を感じ時計の振子の止りたるもあり。其後間もなく大音響と共に戸障子激しく振動して大噴火ありたり。

同上草津

信濃小沼
村附近

岩村田附
近

小諸より
見たる淺
間山

上田より
見たる淺
間山

同國同郡草津町 午後七時四十五分頃地震あり、上下動を感ず。其後間もなく鳴響を聞きたり。(以上二項淺岳の陰麓)
信濃國北佐久郡小沼村附近 午後七時四十分頃地震と共にピリツリツと落雷の如き音響ありて家屋を震撼したるを感じたり。されば該部落の家屋は悉く其北方の戸障子を南方へ向け倒され中には障子の數段に破碎されたるもあり、又震動に際して釣洋燈の落下したるもありき。

同國同郡岩村田町附近 當地の爆聲は數十門の野砲一時に發するが如かりき。

同國同郡小諸町より見たる淺間山 午後七時四十分微震に續いて大震動あり、淺間山は黒煙渦巻く中に天をも焼かんばかりの火焰を吐き熔岩は八方に飛散して最も甚しきは東南の如く麓近くまで八日の朝なほ光火を放てり。

同國小縣郡上田町より見たる淺間山 二三分の震動ありて間もなく

淺間の噴火あり、翌三時頃迄は絶間なく、淺間方面に方り山火事らしく凄まじき光景を呈せるを觀望せり。(以上淺岳の南麓)

尙ほ此他各地の狀況は其通信によりて畧推知し得べければ、之を左に摘録することゝすべし。

東京よりの通信 七日夜七時三十分過ぎ東京市内に突然異様の音響起り、續いて二十分許り聞え、且つ家屋障子など震動したり、此時警視廳の硝子窓も震動したるを以て、何者の惡戯ならんと外を見たるも何者も居らず、怪しと思ひ居る折柄板橋署より熊谷署の電信なりとて淺間山の噴火を傳へ來れり、尙本郷深川方面には地震の如き震動あり、同じく戸障子を動かし漸次北方に進むに従ひて震動益々甚しきを加へたり。

上野國高崎よりの通信 午後七時四十五分、高崎市の天空に當りて一大鳴響あり、暫らくにして激しき地震あり、人々戶外に飛出し頗る混亂の狀を呈したるが十分許にして淺間山上に黒煙漲り十餘丈の火焰天

高崎通信

東京通信

安中通信

松井田通信

伊勢崎通信

前橋通信

に冲するを見受け、更に十分許りを経て黒煙は風に煽られて南に驟然
 き高崎市の中央を東西に分ちて中空を流れ、其光景頗る雄渾を極め、尙
 ほ市中には黒灰を降らしたれば、其光景實に慘憺たり。
 同國安中よりの通信 激烈なる鳴動あり、降灰する事一分時、其大さ米
 粒に比すべく、摺鉢を出して之を受けしに、約一握を得たり。
 同國松井田よりの通信 鳴響地震甚しく、降灰夥し。
 同國伊勢崎よりの通信 七日午後七時半頃、淺間山の頂より三本の火
 柱天に冲し、約四五十分の後、黒煙天に漲り、十數里(直徑)を距てたる當
 町の如き屋上に大音響を傳へ、何れも戶外へ飛び出せしが、其瞬間一道
 の黒煙は淺間より東方に向て進行し、小砂礫の如き降灰ありたり。一
 時は火藥庫の破裂かとも疑はれたる程なりき。
 同前橋市よりの通信 七日午後七時四十七分前橋市の西南に方り、轟
 然たる一大音響起り、人家の戸障子を震ひ動かし、此爲めに棚の上の器
 物の揺落されしもありしが、同時に西南方より黒煙帯の如く曳き來り

浦和通信

熊谷通信

宇都宮通信

横濱通信

水戸通信

物凄き光景を呈したり。最初怪響を聞き、戸障子動くこと四分間、多分
 岩島火藥庫の爆發ならんと噂されしが、懸て淺間山に異狀を呈し、噴煙
 天に冲するを見るに至り、其原因を知り始めて安堵せり。
 武藏國浦和よりの通信 午後七時五十分浦和地方に鳴響聞え、續いて
 土地震動せり、一時人心恟々たりしが、淺間山の噴火と知れ、何れも安堵
 せり。
 同國熊谷よりの通信 午後七時五十分頃、西南に方り火藥庫の爆發せ
 しが、如き大音響を聞きしが、間もなく家屋の震動するを聞きたり。
 下野國宇都宮よりの通信 午後七時五十分頃、西に方り火藥庫の爆發
 せしが、如き大音響を聞きしが、間もなく家屋の震動するを覺えたり。
 横濱市よりの通信 午後七時五十分頃、北側の戸障子を震動する事三
 回に及びたり。
 常陸國水戸市よりの通信 午後七時五十分頃、鳴響を聞き、同時に戸障
 子の振動するを認め、其後約一分南西方に水雷の爆發せるが如き音響